

---

# COC研究

## 第4号

---

『COC研究誌』第4号発行によせて  
～本学COC事業のこれまで、そして未来の扉を開く地域連携・協働支援拠点施設  
(未来の扉センター、仮称)へ～・・・阿部 重樹 1

COC事業は何を残したか  
—COC事業の設計意図とは—・・・松崎 光弘 3

COC事業は何を残したか  
～CSWから見る、教育・研究・社会貢献が繋がることの意味～・・・本間 照雄 7

COC事業は何を残したか  
～地(知)の拠点整備事業 終了報告会より～・・・菊池 広人 15

地域教育科目「地域の課題Ⅰ(地域課題版)」のカリキュラムおよび評価体系  
～ディプロマポリシーと連動した評価体系構築にむけて・・・菊池 広人 31

多文化共生部門の活動について・・・石川 真作 39

コミュニティソーシャルワーカー(CSW)スキルアッププログラム実施状況報告  
～受講生10名の声より～・・・東北学院大学学長室地域共生推進課 43

5年間の事業実績・・・ 55

# 『COC研究誌』第4号発行によせて ～本学COC事業のこれまで、そして未来の扉を開く地域連携・協働 支援拠点施設（未来の扉センター、仮称）へ～

地域共生推進機構長・学長室室長

阿部 重樹

この度文部科学省による「地（知）の拠点整備事業」の補助事業の終了の時期を迎えるにあたり、「本学COC事業のこれまで、そして未来の扉を開く地域連携・協働支援拠点施設（未来の扉センター、仮称）へ」が本稿表題にあるとおり私に与えられたテーマであった。

本学もまた教育、研究、地域貢献の3つの側面にかかわってCOC事業に取り組んできている。紙数の都合もあることから、ここでは「COC事業のこれまで」については教育的側面に係わる事柄を一点のみを述べるにとどめたい。その他の本学のこれまでのCOC事業への取り組みの総括については、本号における他の論考において取り上げられている。

ここでCSWスキルアッププログラムについて取り上げる理由についてであるが、このCSWスキルアッププログラムが教育と研究と社会貢献に一体的に取り組むというCOC事業の本旨をもっとも象徴的に実現するものとなっており、こうした意味において本学のCOC事業の中でももっとも成果を達成できた事業の一つとなっていると考えられるからである。宮城県、宮城県社会福祉協議会、仙台市、仙台市社会福祉協議会においては、東日本大震災からの復旧・復興の過程での体験やその後の地域包括ケアシステムの構築、地域共生社会の実現の社会的要請のなかでコミュニティソーシャルワーカー（CSW）の養成が喫緊の課題とされてきている。しかし、その他方でこのCSWの養成に係るプログラムも、結果としてその体制も決して十分なものとは言えない状況にある。これらの実情を背景として、本学と上記の自治体、関係団体によりCSW養成のための本格的なカリキュラムの策定を目指した共同研究を行い、こうして策定されたカリキュラムを中心とする養成体制も併せて構築した（研究）。これを文部科学省履修証明プログラム、職業実践力育成プログラム（BP）としての認定を受けた上で、多くの関係自治体、団体の協力を得ながら、実際のCSWの養成講座となるCSWスキルアッププログラムを実施してきている（教育・地域ニーズに対応する地域貢献）。詳細については、拙稿「地域に求められるコミュニティソーシャルワーカー～その機能と役割とは～—本学「コミュニティソーシャルワーカー（CSW）スキルアッププログラム」の中心的な課題と展望に係わって—」（東北学院大学『COC研究 第2号』2017年3月、所収）、「コミュニティソーシャルワーカー（CSW）スキルアッププログラム2年を終えての振り返り—新たな課題と今後の展望を中心として—」（東北学院大学『COC研究 第3号』2018年3月、所収）を参照していただきたい。また、本間照雄「COC事業は何を残したか—CSWから見る、教育・研究・社会貢献がつながる意味—」（東北学院大学『COC研究 第4号』2019年3月、所収）も本学CSWスキルアッププログラムを扱っている論考となっており、併せて参照されたい。

ところで、本学は旧仙台市立病院跡地を購入し、現在東北学院大学アーバンキャンパス計画を策定し、同計画の進捗をはかりつつ、五橋キャンパスの整備を進めてきている。この東北学院大学アーバンキャンパス計画を紹介するパンフレットの冒頭には、「この計画は、総合大学で様々な領域の学問を学ぶ若者たちが集い、異なる能力を持ち寄って、新たなものをつくる歓びを体験できるキャンパス

ライフのより高度な展開のための仙台都心部の土樋－五橋地区を一体的な『一つのキャンパス』として整備し、併せて地域交流拠点機能を持たせることを目指します。」と記載されている。そして、さらにパンフレットの中では、この地域交流拠点機能を果たすものとして「未来の扉を開く地域連携・協働の支援拠点」について、「高層棟1階につくられる『未来の扉センター』は、仙台市との連携・協力事業の文部科学省【COC事業】、【COC+事業】、【BP事業】を継承し、さらに発展させる拠点施設。『グランドビジョン150』においても、基本方針の一つとして重視されている地域貢献（『社会貢献』）を果たす」ことが紹介されている。

本学には現在、土樋キャンパスにおいて文学部、経済学部、経営学部、法学部の3・4年生が、泉キャンパスではこれらの文系4学部の1・2年生と教養学部生が学び、また工学部の学生が学ぶ多賀城キャンパスが所在している。2023年度より、上の3キャンパスに分かれて学んできていた学生たちは土樋キャンパスと同キャンパスから徒歩5分圏内に位置する五橋キャンパスとにより一体的に都市型キャンパスとして創出される「ひとつのキャンパス」で学生生活をおくることになる。

本学においては、after COCとして、COC事業を発展的に継承する未来の扉を開く地域連携・協働支援拠点施設（未来の扉センター、仮称）が上に紹介をした新しく開学する五橋キャンパスに設置される。

五橋キャンパスにはホール棟を含めて4棟が建設されるが、未来の扉センターは高層棟1階に所在することになっている。この高層棟は五橋キャンパスが接するメインストリートに面することから、未来の扉センターは新キャンパスのフロントラインに立地し、およそ367㎡の広さをもつ施設となる。地域連携・協働支援センターとしての学外からの最適なアクセスビリティという立地条件もさることながら、未来の扉センターは、改めてCOC選定大学として、地域社会に開かれた大学、地域社会と誠実に向き合い、地域社会とともに歩む大学を目指すという本学の基本姿勢を学内外に象徴的に示すものとなっている。

さて、最後に未来の扉センターの「今」についても述べておきたい。未来の扉センターは五橋キャンパスの開学に合わせて2023年度の設置が予定されていることは上に述べたとおりである。こうしたことから、COC事業の発展的継承を図りながら、未来の扉センターにおいて構想されている新たなプロジェクトなり、機能（役割）を2023年度を待たずして、可能な限り前倒しをして実現していくことが可能となるよう現在その検討作業に着手している。もとより地域連携・協働事業においては、大学が関係するものもまたそうであるように、個別のプロジェクトテーマごとに、当該プロジェクトの関係者が参加するプラットフォームの構築が求められている。また、そこではいわゆるヒト（人員）、カネ（財源）、モノ（拠点施設・備品）、チシキ（情報）といわれるものが係わる事業内容や実施体制等の共有化や利害の調整そしてプラットフォームの基盤となる信頼関係の構築にはそれなりの時間を要するのが常となっている。こうした意味において、2023年4月の五橋キャンパスの開学と同時に、未来の扉センターもスタートダッシュを図れるよう、COC事業も含めてこれまでの地域連携・協働事業への取り組みの中で信頼関係の構築が図られてきている自治体や社会福祉協議会、他大学、学校、ボランティアやNPO、町内会等各種関係団体・組織にも従来以上に理解と協力、支援をお願いしていくことになるであろう。こうした日常的な地域社会との営為の積み重ねの中においてこそ、またその結果としてのみ、真の意味において「大学は地域社会の財産、地域社会は大学の財産」というCOC事業が理念とした関係性（地域貢献という一つの大学ブランド力）が形成されるものでありと確信している。

COC事業は何を残したか  
—COC事業の設計意図とは—

地域協働教育推進機構 特任教授 松崎 光弘

# COC事業は何を残したか ―COC事業の設計意図とは―

地域協働教育推進機構 特任教授 松崎 光弘

## 1. はじめに

平成25年度に開始された文部科学省の補助事業「地（知）の拠点整備事業（COC）」は、全学的に地域を志向した教育・研究・地域貢献を進める大学を支援する事業である。大学の機能分化の流れの中で、地域の課題と大学の資源をマッチングさせることにより、教学マネジメントを推進し、地域再生・地域活性化の中核となる大学の育成を目指したものであると言える。

東北学院大学は、地域課題解決のプロセスに学生や教員が関与する仕組みを作り、それを活用したアクティブラーニングの推進を目指す「地域共生教育による持続的な『ひと』づくり『まち』づくり」事業（以下、本事業とする）を計画し、平成26年度に採択された。

平成31年3月をもって補助期間が終了する本事業について、その設計意図をあらためて振り返り、今後の事業の継続に向けた指針についての私見を取りまとめたい。

## 2. 本事業の基本設計

本事業の設計にあたり、地（知）の拠点としての大学とはどうあるべきかについて考えた。

地方創生の流れの中、当時から地域住民主体となっていない地域課題解決のアプローチや、教育的意図とプログラムの設計が不十分な地域活動やボランティア活動が散見された。このような活動では、高等教育としての教育効果も上がらず、地域の持続可能性に寄与しない。本事業では、それらの轍を踏むことなく、大学が地域の持続的な発展の中核となるための構造と取り組みを整理する必要があった。

その結果、他地域の事例も踏まえて、

- ① 東北学院大学をハブとした地域の関係性の再構築
- ② 地域コーディネーターの育成を核とした産学官金協働教育基盤の構築
- ③ カリキュラムレベルでのアクティブラーニングの導入

の三点を本事業の軸に据えて設計を進めることとした。

第一の、大学をハブとした地域の関係性の再構築とは、大学の研究教育シーズを活用して、企業、市民団体、自治会といった同種の組織が集約するコミュニティと、金融機関、行政といった支援機関の関係性を再構築し、一つの生態系として機能させることを意味する。

そのために、大学教員、学生、さらには大学において養成される「地域コーディネーター」がその要所で活動し、地域の中の関係性を変える触媒となることを目指した（図1）。

第二の、地域コーディネーターの育成を核とした産学官金協働教育基盤の構築とは、地域の企業やコミュニティの課題の解決に取り組む地域コーディネーターを、大学が地域と連携して育成しようというものである。そのために、コミュニティソーシャルワーカーや産学連携コーディネーター等、すでに活動している人たちの現場の課題を共有し研究する研究会や、彼らのスキルアップのための講座を提供することで、持続的な協働教育、地域課題解決、産業創出の基盤とすることをめざす設計とした。

ここでは、大学内での学びを、「理論化された知識と研究プロセスの習得」、地域の実践の場での学

びを、「知識の適用と価値創造プロセスの習得」とし、これらの往還が図られる仕組みを事業に埋め込み、東北学院大学が窓口となって地域コミュニティや地域企業の課題を集約し、大学のリソースを提供することで、地域の課題を地域住民が自ら解決できるプラットフォームを構築する設計とした（図2）。

その過程で、課題発見・解決のプロセスの一部を切り出し、学生の仮説検証型の学習の素材とすることが可能になるため、これを教学マネジメント改革の核とすることができる。

第三の、カリキュラムレベルでのアクティブラーニングの導入とは、地域における課題発見・解決のプロセスを抽出し教材化することで、カリキュラムの進行に伴って、関心領域の発見、関心領域の深掘・探究テーマの発見、探究の実践と、学びのスタイルを知識伝達型のアプローチから仮説検証型のアプローチに変化させ、最終的にはアクション（仮説的推論）を実践できるレベルに到達させることを目指したカリキュラムを開発することである。

ただし、各学部のカリキュラムを大幅に変更することは大きな混乱を招くため、地域教育科目という新たな科目群を学部横断で設置し、一つのミニカリキュラムとして運用するのが現実的であると考え、教養教育科目と専門教育科目の接続部に設置することとした。

これら三点を踏まえ、

- ① 地域課題を総合的に解決する能力を持った人材を継続的に育成する教育体制の整備
- ② 地域課題を顕在化させ、そこに必要な人材・資源を投入することで地域課題解決を実現するための体制の構築

に取り組む、「地域共生教育による持続的な『ひと』づくり『まち』づくり」事業が生み出された。

### 3. 本事業の振り返り

本事業が、実際にどのように進展し、補助期間終了後に何が残されるのか、上記の設計意図と引き比べて整理したい。

第一の観点は、東北学院大学をハブとした地域の関係性の再構築につながったかという点である。本事業では、仙台市や宮城県内社会福祉協議会、地元自治会等との関係性が再構築され、後述する「コミュニティソーシャルワーカー（CSW）スキルアッププログラム」等を通じて、これまでになかった学びの環境が地域内に生まれており、この部分では一定の成果が上がったと言えるだろう。

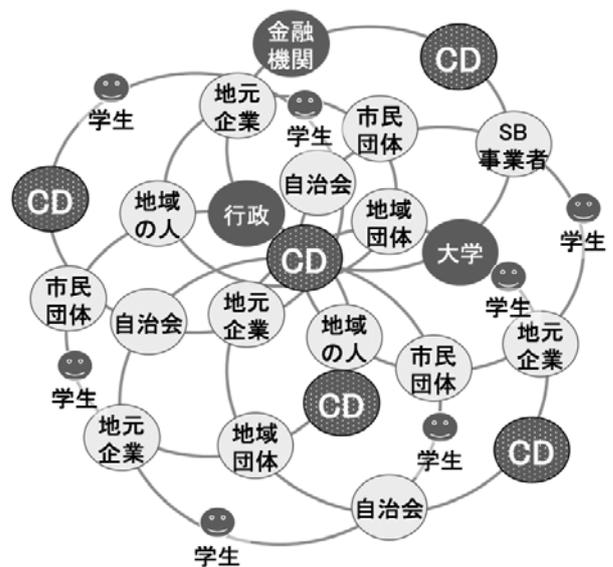


図1 大学をハブとした地域の関係性の再構築

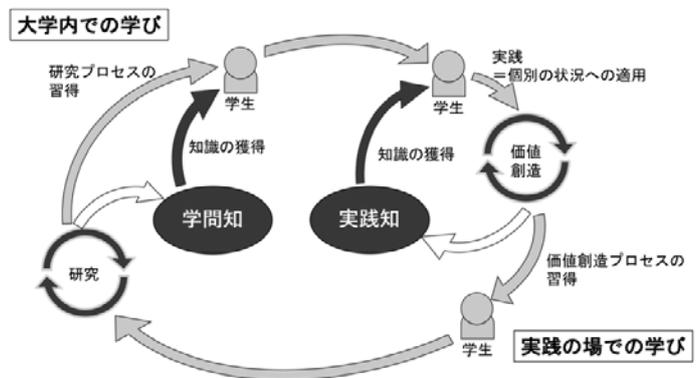


図2 理論学習と実践の場の往還による人材育成

第二の観点である、地域コーディネーターの育成を核とした産学官金協働教育基盤の構築については、平成25年に開講された履修証明プログラム「地域コーディネートスキルプログラム」を元に、平成26年から宮城県内の社会福祉協議会と連携した「コミュニティソーシャルワーカー（CSW）スキルアッププログラム」が開講された。

また、並行して「コミュニティソーシャルワーカー（CSW）研究会」が開催されてきた。これは、コミュニティソーシャルワーカーの現場の課題を研究会で共有しつつ、スキルアッププログラムの教材をアップデートし、スキルアッププログラムでの学びを現場で活用するという三位一体の学習コミュニティの形成につながっており、地域社会にとっては地域福祉の担い手育成や研究成果の現場での活用、大学にとっては先端の知見や事例の研究・教育への活用という、相互に進化する好循環の仕組みとなっている。

第三の観点である、カリキュラムレベルでのアクティブラーニングの導入については、「震災と復興」「地域の課題Ⅰ」「地域の課題Ⅱ」「地域課題演習」からなる地域教育科目が全学部を対象に開講され、学年進行に伴って、知識伝達型のアプローチから仮説検証型のアプローチに学びのスタイルを変化させていく設計の科目群が運営されている。

特に、「地域の課題Ⅱ」では地域でのフィールド調査が、「地域課題演習」では地域で活動する団体の活動への参画が組み込まれており、地域教育科目群というミニカリキュラム限定ではあるが、カリキュラムレベルでのアクティブラーニングが実現していると言える。

#### 4. COC事業の今後に向けて

本事業は、平成27年度に始まった「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」の開始によって、方向性を少し変更する必要が生じた。東北学院大学を主幹校とする宮城県内12の高等教育機関と自治体、企業等で実施する「みやぎ・せんだい協働教育基盤による地域高度人材の育成」事業（以下、宮城COC+とする）に、地域の産業の発展に寄与する取り組みが委ねられることとなり、本事業は地域コミュニティや地域福祉に関するテーマに集中することとなった。

しかし、宮城COC+は本事業と同様に、大学を地域の知の拠点とすることで、地域住民が主体となって地域の持続的発展を実現するための事業として設計されており、それぞれの補助期間が終了した時点で両事業が統合され、改めて本事業の目的に沿った取り組みを他大学と連携しつつ進めていくことが自然な流れである。

そのためには、本事業の実施機関である地域共生推進機構の機能を整理再編し、地域貢献・社会貢献を主体とした体制から、本事業及び宮城COC+を中核とする体制に移行することが望ましい。それによって、地域課題解決の場が、新たな教育機会・課題を生み、実践教育の場となり、その教育の場が地域課題解決の構想、実践力醸成の場になるというスパイラルアップが可能となる。

「未来の扉センター（仮称）」の設置を控え、東北学院大学は、地域との協働を、本事業の設計で描

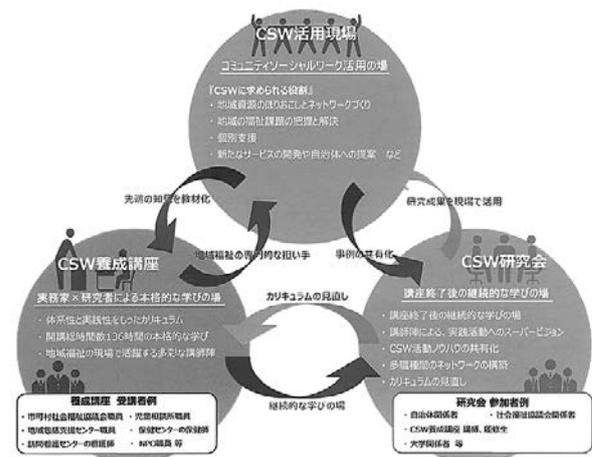


図3 地域コーディネーターの育成スキーム  
CSWスキルアッププログラム紹介パンフレットより

いたように大学の中心的な戦略のひとつとして位置づけるか、それとも従来の「地域貢献」の枠の中にとどまり続けるかの分岐点に立っている。今後に向けて、適切な意思決定と現場の活動が、地域やステークホルダーから求められている。

COC事業は何を残したのか  
— 教育・研究・社会貢献が繋がることの意味 —

地域共生推進機構 特任教授 本間 照雄

# COC事業は何を残したのか

## — 教育・研究・社会貢献が繋がることの意味 —

地域共生推進機構 特任教授 本間 照雄

### はじめに

「地（知）の拠点整備事業」（大学COC）は、2014（平成26）年に文部科学省の指定を受け、2018（平成30）年度を持って5年間の事業期間を終了した。

本学では、本事業を推進するために、2013（平成25）年度に地域共生推進機構を設置し、「循環型地域共生教育システム」の確立を目指し補助申請を行った。本事業は、地域連携を一層充実させ、地域課題を教育・研究に直結させ、その成果を再度、地域課題の解決につなげていくという、教育、研究及び社会貢献を継続的・発展的に好循環させる一貫体制（地域共生教育）の構築を目指し事業展開したものである。

ここでは、COC事業がどの様にして行われ何を残し何が今後の課題なのかを考える。

### 1 COC事業の概要

地（知）の拠点整備事業（大学COC）は、「教育」「研究」「社会貢献」の三つの柱で事業を進めている。「教育」では、本学の既存の科目群に加えて「震災と復興」「地域の課題Ⅰ」「地域の課題Ⅱ」「地域課題演習」の「地域教育科目」を新たに設置し、アクティブラーニングの手法を用いて、仮説的推論を取り入れ「課題発見」や「解決能力の向上」の達成と地域人財の育成を図っている。「研究」では、CSWに関する公開研究会、多文化共生社会の推進、市民参加型地域課題解決プログラム等を大きな柱として進めている。多くの場合、そのテーマは、本学の研究や教育成果を広く地域社会に開放すること目的にしている。「社会貢献」では、本学が、地域に開かれた大学であることを具体的な形で示すために、行政からの依頼に基づく様々な地域課題に関する支援や地元町内会との連携等を積極的に進めている。また、地域人財育成の一環として、文部科学省「職業実践力養成プログラム」（BP）認定事業である履修証明プログラム（CSWスキルアッププログラム）を行っている。

### 2 個別具体のCOC事業概要

COC事業は、「教育」「研究」「社会貢献」の三つの柱で進めている。ここでは、それぞれの柱の概要を整理し、COC事業がどの様な考え方で事業展開してきたのかをみてみよう。

#### 2-1 教育

本学では、地（知）の拠点整備事業（大学COC）を進めるにあたり、カリキュラムを改正し「地域教育科目」4科目を設置した。始めに、各科目がどの様にして進められているのかを見る。

##### 2-1-1 震災と復興

（授業のねらい）

地域教育科目「震災と復興」は、仙台市、多賀城市の行政職員と本学の教員がオムニバス形式で、東日本大震災の被災状況、そこからの復興過程での現状と課題を講義するものである。各講義で、地震、津波の発生メカニズムと被害の大きさ、復興過程に関わる政治・経済の仕組みや政策、市民が関

与する活動などについて学び、復興のために学生が一人の市民として何ができるかを考えることを到達点においている。

(授業概要)

授業の特徴は、15回の講座を通して、グループで『復興』『減災』『縮災』を地域で進めるためのアクション（地域の課題を解決すること）を2～4人のチームで実践し、その効果を検証すること」を求めており、第15回目の最終講義では、実際に行ったアクションの発表および得られた学びのふりかえりを行う。実際に、学生たちが地域社会において地域課題解決に向けたアクションを実践することで、震災と復興の授業内で学修した内容を整理・統合し、活用するまでが本講義で求める内容になっている。

平成29年度の授業を例に学生の取り組みを見てみよう。

○前期：泉キャンパス

「子ども達の防災意識の向上」 七北田児童センターでの防災学習

「私たちの「支援」のかたち」 陸前高田市立図書館への本の寄付

「塩竈駅から避難所までに要する時間とその周辺の波高の調査」 ハザードマップの検証

「身近な災害を知ってもらうために防災マップを広める」 学生への防災マップの発信

○後期：多賀城キャンパス

「震災ノート」 学内生協に震災の被害状況と現在の被災地を伝えるノートの設置

「高齢化が進む白石市防災マップ」 白石市の高齢者視点での地震用防災マップの作製

「多賀城市地域コミュニティの活性化」 多賀城市助け合い協議会形成への参加

「広報映像プロジェクト」 多賀城市が進めるプロモーションビデオへの参加

このように、オムニバス形式の授業に加え、地域の課題設定・検証と解決するためのアクションの実践を加味した内容となっている。

(成績評価)

成績の評価は、三つの区分で行っている。小テスト、プレゼンテーション評価及び最終レポートである。小テストは52点満点で、第2回から第14回までの13回の授業開始時に各4点満点で評価（4点×13回）。また、課題解決に向けたアクションのプレゼンテーション評価は23点満点で、課題解決に向けたアクションを主体性（7点）、地域波及（8点）、論理性（8点）で評価。最終レポート評価は25点満点で、課題解決の学びを主体性（7点）、論理性（8点）、発展性（10点）で評価している。

## 2-1-2 地域の課題 I（地域課題版）

(授業のねらい)

「地域の課題」とは、地域の現状を把握し、望ましい未来を具体化した時に生じるギャップである。東北地方においても、人口減少、少子高齢化、グローバル化、気候変動等の事象変化により、様々な「地域の課題」が生まれている。本講義では、地域の課題が最も顕在化された震災復興過程における地域が抱える問題を俯瞰し、「生活の再建」「防災と減災」といった視点を通して、課題化し、解決に向けた解決策を検討する。

(授業概要)

授業の特徴は、カリキュラムにおいては「生活の再建」「地域の再建」「被災地の今」の3つのケー

ス教材を活用した。それぞれのケース教材は、宮城県名取市、福島県新地町における東日本大震災での地域・個人の葛藤、そして石巻市等、被災地が未来に向けてどのような歩みを行っているかを共有するものである。各回では、その地域の現状の把握し、葛藤の抽出、葛藤の外的・内的要因の整理を行い、その課題を解決するためにすべきことを検討する。この一連のプロセスを経て、最後は、この検討から自分が復興のために現在、そして将来できることをそれぞれの学びたいこと、得たいことを元に論述した。



写真1 学士同士の意見交換

授業は次のような様子で進めることを基本としている。4名1グループを基本とし、それぞれがケースを読んで感じた感想、探求する視点、解決へのアプローチ等を共有し、議論を重ねること、そして3つのケースそれぞれでチームメンバーを変化させることによって、多様な視点、考えにふれる機会を多くし、それぞれの学びを深めることにつなげた。

(成績評価)

成績の評価は、三つの区分で行っている。小テスト、単元レポート及び最終レポートである。小テスト(39点満点)は、第2回から第14回までの13回の授業開始時に各3点満点で評価(3点×13回)。レポート評価(61点満点)は、3つのテーマそれぞれに提出する単元レポート(7点×3回)と最終回終了後に提出する最終レポート(40点満点)で、レポートの体裁(10%)、論理性(30%)、具体性(30%)及び主体性(30%)で評価している。

### 2-1-3 地域の課題Ⅱ(地域課題版)

(授業のねらい)

今日の地域社会は、取り組むべき課題が山積している。少子高齢化、過疎化、就労、環境等々の諸課題が、それぞれの地域社会において、より鮮明な形で顕在化・深刻化してきている。こうした現状の中で、地域住民は、如何にして現実と向き合い、課題解決に向けた試みを実践しているのだろうか。

こうした状況を受け、地域社会で行われている様々な実践に着目し、直接現地の声に耳を傾け、地域の実情を分析し、自分なりの課題分析を試みる。ここに至る一連の学修を、特定の地域を対象地として取り上げ、データの収集と分析をとおしてテーマ発見を行い、課題を分析し、その成果を報告書にまとめ上げる行為をとおして身につける。

(授業概要)

授業の特徴は、地域課題に取り組む団体を教材にして、参与観察及びメンバーや活動参加者を対象とした聞き書きを行い、調査報告書(ミニ論文)にまとめるところにある。

授業の一コマを見てみよう。平成29年度は、富谷市のNaritaマルシェと小規模特養(成田の里)とのコラボ企画で秋の芋煮会に参加した。子ども達に混じって高齢者と一緒に芋煮をつくり食卓を共にする事業である。学生は、一瞬にして子ども達のお兄さんお姉さんになり、お年寄りの孫になった。活動団体へのインタビューは、初めての経験という学生が多かった。聞き取った内容は、「聞き書き」の手法でまとめた。平成30年度は、富谷市で行われているNaritaマルシェ活動利用者の小学生及び親

19人に対して、参加しての感想を聞き書きすると共に、まかないつき寺子屋、タッチラグビー、おさがり会での参与観察を行っている。多賀城市では、災害公営住宅入居者を対象とした聞き書きを行い、生活のしづらさ、コミュニティ構築の難しさ及び様々な葛藤を聴き取った。調査結果は、調査対象地の富谷市長及び多賀城市長並びに調査対象地の関係者に報告し、報告書を各市関係課及び図書館にも贈呈した。



写真2 富谷市長に調査報告

(成績評価)

成績の評価は、大きくフィールドワークへの取り組み(60%)及び課題整理レポート(調査報告書)(40%)で行っている。フィールドワークへの取り組み(50%)は、活発な意見交換30%、率先した行為20%。課題整理レポート(50%)は、記述の適切さ30%、背景・先行研究の把握10%、字数の遵守10%で行っている。評価は、ルーブリックを作成しそれを下にして行っている。また、ルーブリックに加え学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)も考慮している。

#### 2-1-4 地域課題演習(地域課題版)

(授業のねらい)

今日の地域社会は、少子高齢化、過疎化、就労、環境等々、取り組むべき課題が山積している。被災地では、こうした課題が復興過程に覆い被さり、より厳しさを増している。こうした現状の中で、地域住民は、如何にして現実と向き合い、地域再生を行おうとしているのかについて、直接現地の声に耳を傾け、自分なりの復興の姿を描いていく。ここに至る一連の学修を、東日本大震災被災地を対象として、現地調査を企画・実施し、データの収集と分析、インタビュー及びミニ論文(報告書)の作成等を通して身につける。

(授業概要)

授業の特徴は、東日本大震災で甚大な被害を受けた南三陸町でフィールドワークを行い、そこでは災害公営住宅・防災移転・自立再建で暮らす被災者にコミュニティの再建についてインタビューし、現地調査結果は、6人で1編の論文を書く形にまとめ、南三陸町戸倉長清水住民の語り「一人ひとりが描く未来～復興の理想と再建の現実」と題する報告書に仕上げている。

授業の一コマを見てみよう。南三陸町災害公営住宅入居者11名に対してインタビューを行った。インタビューは、地域構想学科の学生は経験があったようだが、情報科学科の学生は初めてだという。聞き取った内容は、「聞き書き」の手法でまとめ、対象者の言葉から苦悩の現状やコミュニティ再建への想いを拾うようにした。調査結果は、南三陸町長及び調査対象地の住民など関係者に報告し、調査報告書を各関係課及び図書館にも贈呈した。

(成績評価)

成績の評価は、大きくフィールドワークへの取り組み(60%)及び課題整理レポート(調査報告書)(40%)



写真3 南三陸町での聞き書き

で行っている。フィールドワークへの取り組み（50%）は、活発な意見交換30%、率先した行為20%。課題整理レポート（50%）は、記述の適切さ30%、背景・先行研究の把握10%、字数の遵守10%で行っている。評価は、ルーブリックを作成しそれを下にして行っている。また、ルーブリックに加え学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）も考慮している。

## 2-2 研究

### （事業概要）

第二の柱研究は、CSWに関する研究、多文化共生社会の推進、市民参加型地域課題解決プログラムを大きな柱として進めている。多くの場合、そのテーマは、本学の研究や教育成果を広く地域社会に開放すること目的にすると同時に、行政を含めた今日的な地域課題に応えることを念頭に据えている。

主な事業としては、平成30年度を例にするとCSW公開研究会を始め以下のようなことになる。

- ・ 第1回CSW公開研究会「組織におけるCSWの育成とその方策」（36名参加）
- ・ 第2回CSW公開研究会「CSW公開授業－地域福祉とファンドレイジング」（23名参加）
- ・ 第3回CSW公開研究会「災害公営住宅自治会活動報告会」（130名参加）
- ・ 第4回CSW公開研究会「防災福祉の視点からCSWの役割を考える」（53名参加）
- ・ 第5回CSW公開研究会「地域コーディネータが走る！」（150名参加）
- ・ 五橋地域包括支援センター及び仙台市社会福祉協議会との五橋地区に於ける高齢者支援に関する研究
- ・ 多文化共生研究会開催
- ・ 仙台市及び多賀城市に関する地域課題へのサポート及び助言
- ・ COC研究第4号の発刊

### （事業の様子）

研究の特徴としては、「広く宮城県内の地域活動実践の情報交換の場となっている」、「行政あるいは各諸団体並びに地元町内会との連携協働の下に進められている」及び「多くの一般市民が参加している」等が挙げられる。

事業の一コマをCSW公開研究会の様子で見てみよう。

平成29年度の第5回CSW公開研究会「コーディネータが走る！」では、事例発表の後に行われる第三部意見交換「お知恵拝借/仲間づくり」は、名刺を交換し詳しい情報の交換を約束している様子があちこちに見られた。また、講演依頼を打診する様子などもあった。20年以上に渡って活動しているミニデイサービスで歌われている歌を、発表者の音頭で参加者皆が合唱する様子もあった。微笑ましくも有り、地域活動を進める際の抱擁力を感じる場面でもあった。地域課題を我が事として共有しようとする宣言のように見えた光景であった。平成30年度も150人の参加を得て盛大に開催された。栗原市から来た発表団体は、自らの団体がつくって販売している米粉パンを振る舞い、南三陸町から来た団体は、口頭発表後に災害公営住宅で毎朝行っている体操を行い、日頃の活動の様子を参加者全員で共有し体感していた。CSW公開研究会



写真4 ポスター発表の様子

の会場となったホーイ記念館地階ホールは、参加者150人が一体となり、和やかさと熱気が混在した、市民参加型研究会の特徴を遺憾なく発揮する場となった。

こうしたCSW公開研究会は、市町村社協や各種団体から、日頃の活動を発表する場として機能しているとの評価があり、次第に広がり役割を増している。

## 2-3 社会貢献

### (事業概要)

社会貢献の概要は、大学COC事業を象徴する。東北学院大学が、地域に開かれた大学であることを具体的な形で示すために、地元町内会との連携等を積極的進めている。また、地域人財育成の一環として、文部科学省「職業実践力養成プログラム」(BP)認定事業である履修証明プログラム(CSWスキルアッププログラム)を行っている。更には、行政からの依頼に基づく様々な地域課題に関する支援を行っている。

主な事業としては、以下の内容を恒例の事業としている。

- ・青葉土樋町内会との協働事業「敬老お食事会」
- ・土樋キャンパス内の文化財や各種知的資源を紹介する「キャンパスツアー」
- ・荒町市民活動センター事業「地域力創造支援事業」への参画
- ・仙台市市民協働推進課の行う協働まちづくり事業への支援
- ・仙台市被災者生活支援室の行う公営住宅コミュニティづくり事業への支援
- ・多賀城市子育て支援課への子育て環境整備、地域コミュニティ-課への自治会活動に関する支援
- ・多賀城高校防災教育支援
- ・履修証明プログラム「CSWスキルアッププログラム」の実施

### (事業の様子)

本事業は、仙台市関係各課、青葉土樋町内会、五橋地域包括支援センター、仙台市社会福祉協議会、荒町市民活動センター等との協働により進めている。多賀城市では、賀城市関係課及び児童館等との協働により進めている。このように多くの団体との協働で事業を進めている所に、本学が行う社会貢献の大きな特徴がある。

事業の一コマを見てみよう。平成29年度の敬老お食事会は、9月18日(祝)に8号館会議室で地元青葉土樋町内会との共催で企画し出席者61名の参加を得て行われた。敬老お食事会には、本学のSWE(吹奏楽団)も駆けつけてくれ、聞き慣れた楽曲に口ずさみ、演奏後は一緒に食事を取る等して終始和やかな中で進められた。平成30年度も同様に58名の参加者を得て開催されている。参加者からいただいた「また来年もお願いします」という言葉が、何よりの評価だと感じている。



写真5 敬老お食事会参加者

平成29年11月30日に行われた外部評価では、社会貢献の項目において、「土樋キャンパスに隣接する地域住民

との様々な交流事業は、取り組みを進める学生達にとっても住民にとっても大きな効果が見られ、震災後に変化する都市の地域社会の課題に向き合う貴重な事業であると考え」との評価を得ている。

また、仙台市地域共生推進会議及び多賀城市地域共生推進会議において社会貢献事業概要を報告したところ、行政支援に対する高い評価と感謝が伝えられた。

### 3 まとめにかえて

(三本柱の意味)

地域共生推進機構では、「教育」「研究」及び「社会貢献」を継続的・発展的に好循環させる一貫体制である地域共生教育の構築を目指して来た。教育は、地域という足場の下に行われ、研究は地域と共に進められ、教育と研究の成果が社会貢献という形で結実していく。こうした一連の流れが、地域課題の解決という目標の中で進められる。この循環させる一貫体制を「地域共生教育」と名付け、その構築を目指してきたのである。

(事例に見る循環)

「教育」「研究」及び「社会貢献」の好循環の一例を示そう。

始めに教育である。「震災と復興」では改めて震災が現実のこととして受け止め、「地域の課題Ⅰ」(地域課題版)では地域課題を解決するための感性を課題解決型学習(PBL)で磨いた。こうした基礎的な学習の上に「地域の課題Ⅱ」(地域課題版)を置いた。地域の課題Ⅱでは、震災での体験から地域での支え合いの必要性を感じ活動を起こしたNaritaマルシェ(宮城県富谷市)という、地域の子ども達を地域で育む活動を教材として取り上げた。1年目は、活動の全体像を把握する参与観察を中心とした授業。2年目は、Naritaマルシェ活動の中心的役割を担っているNaritaマルシェスタッフへの聞き書き手法を用いて、それぞれの活動に対する想いや願いを聞き取り分析する授業。学生は、この活動を「子どもも大人も楽しい場所」(調査報告書のタイトル)と表現している。3年目は、Naritaマルシェ活動に参加している子ども及び保護者を対象に、活動に参加しての感想を聞き書き及び参与観察から分析した。この分析を下に、学生は、この活動を「家族のようなつながり」(調査報告書のタイトル)と表現している。「地域課題演習」(地域課題版)では、甚大な被害を受けた南三陸町で、災害公営住宅入居者の声を直接聞きくフィールドワークを行い、学生ならではのコミュニティ再生に向けた提案を行っている。また、学生が3年生であることから、執筆した調査報告書は、就職活動の際に大学での学業の様子を伝える資料として活用したという。

研究では、CSW公開研究会及びCSWスキルアップ講座において、Naritaマルシェ活動を報告してもらい、多くの実践者、各種団体、行政及び研究者との意見交換の場を設け、議論を深めている。Naritaマルシェの代表者は、「他者への関心が薄れている現代で、地域へ関心をもち、あえて関わりながら学ぼうとする若者がいることは社会の宝。そんな貴重な若者たちが学べる場である地域の課題Ⅱは、『未来の社会はより良いものになる』という夢と希望を託せる学びの場である」と、COC事業最終報告会の場で評している。

社会貢献では、聞き書き及び参与観察で得られた知見を学生からの提案の形でNaritaマルシェや災害公営住宅自治会、また地元市長及び関係課長に報告する形で行政に戻している。こうした提案は、「自分たちの活動を客観的に見る機会になり、これまでの振り返り、これからの活動の組み立てに大変参考になる」(Naritaマルシェ代表)、「我々以上に住民の声を引き出してくれた。皆さんに感謝したい」(多賀城市担当課長)等の声が聴かれ、授業や研究の成果が社会貢献の形で地域に戻っていることを示している。こうした地元の反応は、学生の学びに新たな意欲や将来への期待を語らせると言

う形で、再び教育に戻ってきている。

(地域と共に歩む大学)

大学の役割は、教育、研究及び社会貢献がバランス良く整えられ、密接不可分の循環により、より高いレベルを目指していく。こうしたところに、「地域共生教育」の醍醐味がある。

学生もまた、「地域」に軸足を置くことにより、我が事として授業に向き合え、自分の将来の姿が想像できる。このことが、教育をより具体的な取り組み、近い将来の仕事の選択や生きる姿勢にも繋がっていく。将来の仕事に高齢者や地域への視点を見だし、技術者への夢を膨らませている学生の言葉は、地域との関わりで学びを深めていることを端的に現している。学生としてのみならず社会人としての基本的な姿勢を住民との関わりから教わったのである。こうした、一連の循環の教育環境を整えるところに我々の役割があると考えている。

(アーバンキャンパスの目指す姿に繋がっていく)

問いに戻ろう。大学COC事業は何を残し何が今後の課題なのか。

地域人財の育成は、本学の重要な使命の一つである。授業で地域と向き合った学生は、Naritaマルシェ活動での経験を活かし「将来的には、地域住民向けの生活支援アプリケーションや、高齢者向けのアプリケーションの開発を行い、支援するという形で活かしていきたい」(教養学部)と語り、災害公営住宅入居者の不便な生活実態の聞き取り「利用者にとって不便のないより良い構造物をつくるエンジニアとして社会に活躍出来るように勉強したい」(工学部)と語っている。こういった学生の声は、地域人財の育成という本学の使命が着実に浸透していることをうかがわせる。また、本学の学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)「地域の課題をはじめとする様々な具体的課題を見つけ、それまで獲得した学修成果を総合的に活用することでその課題を解決することができる」に沿っていることを示している。こうしたことから、地域教育科目は地域人財の育成に一定の役割を果たしていると言っても、言い過ぎにはならないであろう。

今後もこうした学生を一人でも多く輩出する為には、行政や地域資源との連携協働を図りながら、更なる修学環境の充実が求められる。今後は、こうした修学環境を整えるべく、地域との連携協働をさらに積極的・効果的に図るために検討されている『『未来の扉を開く』地域連携・協働支援センター』(仮称)の有り様についても、学内挙げて取り組んでいくことが求められる。そのことが、学都仙台における交流拠点として、2023年4月に供用開始となる市民に開かれたアーバン(都市型)キャンパスの目指す姿に繋がっていくものと考えている。

COC事業は何を残したか  
～地（知）の拠点整備事業 終了報告会より～

# COC事業は何を残したか ～地（知）の拠点整備事業 終了報告会より～

## 1. 実践報告

### ①教育

#### (1)「地域の課題Ⅰ」

東北学院大学地域共生推進機構 特任准教授 菊池 広人

本学のCOC事業は、教育と研究と社会貢献3つの軸が重なり合って進められています。その中で、教育は地域教育科目が設定されおり、全学で取り組むカリキュラムとして位置づけられているものです。

この中で必修である2年生前期の「地域の課題Ⅰ」は、「学ぶ姿勢づくり」を大切にして進めています。

やはり仙台にある大学として、東日本大震災からの復興と自分が探究したいことをつなげ、復興をジブンゴト化していくことはとても大切であると考えます。授業では、「コミュニティ」「防災」「合意形成」「イノベーション」の4つのテーマで、自分の探究領域との関連を検討します。例えば、防災であれば、防潮堤がない時のリスクとある時のリスクではどちらが高いのかということであったり、合意形成の事例では時間がかかっても合意形成をしっかりとプロセスを踏んでやる方がいいのか、早く決定して早く生活再建を進めた方がいいのかなど、答えがないものに対して分析をしながら、学問領域とつなげていくことを行っています。

そして、この授業の評価は、100点満点を、小テストを52点、テーマ毎のミニレポート20点、最終レポートを28点で評価します。小テストはresponという全学で導入しているラーニングマネジメントシステムを活用しています。授業開始5分で小テストをみんなスマホに打ち込んでやってもらって、それに対して回答をシェアするところからまずはスタートします。その中で事例を深めることによって、そしてふりかえりやテーマごとのミニレポートは、manabaというラーニングマネジメントシステムを活用し、学習履歴が残るかたちにしていきます。最終レポートでは、復興とSDGsと自分の探究したいことがどのようにつながるか整理します。

正解が無限にある中で、自分なりの答えをそれを掘り下げていくということをやっているというところでございます。

そして、その評価は本学のディプロマポリシーに対して、ダイレクトにつながる評価というところを意図しております。ディプロマポリシーの5つの項目を基準に、学生の変化を確認しながら進めているということで、自分が探究したいことと社会的な意味がどのようにつながっているか、その中で課題を自分の中で明確化できるかということが前向きに変化している状況となっています。

このように全学必修の地域の課題Ⅰで、地域教育科目全体で学ぶ姿勢を高め、自分の専門領域の中に軸をつくっていくということにより、各学部の学びがさらに深まるよう、今後も進めていきたいと考えます。

## (2)「震災と復興」

多賀城市総務部地域コミュニティ課 副主幹 吉田 智治

私からは、大学・NPO・自治体の連携での学びの場づくりについてお話させていただきます。

まずは、「震災と復興」ですが、授業の震災と復興の中で、私は、多賀城市の復興の過程と現状、課題を理解することを目的に、「震災後の多賀城市のまちづくり」、「地域コミュニティの再生」、「創造的復興から生まれた市民活動」といった内容の講義をしました。当初は座学での講義でしたが、一人の市民としてジブンゴトとして、何ができるかを考えるグループワークなどを導入して少しずつ内容を変更してきたところです。

授業を通して、学生さんに多賀城市の活動に興味を持っていただき、多賀城市の夏の風物詩のイベントであるビアサミットにボランティアとして参加をいただくことができました。この事業は、震災後に空洞化した中心市街地の活性化を目的とした市民活動団体が主催のイベントであり、学生が関わることで、その団体の理念や思いを感じてもらえたと思います。

座学から現地に飛び出し、今年度は、災害公営住宅の集会所で講義をいたしました。私から多賀城市の災害公営住宅に関しての講義を行い、その後、住民さんのサークル活動のフィールドワーク、自治会副会長さんとの意見交換を実施しました。災害公営住宅は高齢者が多いのですが、学生に関わっていただくことで、住民の皆さんすごく楽しそうに、学生さんとお話をされていました。自治会副会長からは、高齢者が多い災害公営住宅における自治会活動の難しさであるとか、5年・10年先を見据えた自治会のNPO法人化構想などの貴重なお話をうかがうことができました。

さらに、多賀城市市民活動サポートセンター（たがさぼ）を会場に講義を行い、たがさぼの機能や震災におけるの取り組みなど、活動している人がアクションを起こし、思いを形にするときにどんなことが必要なのかといったことを学んでいただきました。

このたがさぼとの連携は学生のアクションにもつながっています。課題設定を「多賀城市災害公営住宅におけるコミュニティ面の支援」とした学生グループが災害公営住宅自治会設立準備会に参加し、合意形成や、合意形成から生まれるコミュニティの状況について直にふれ、考えていただきました。「地域コミュニティ」という課題設定をしたグループは、そもそもコミュニティとは何か？など、課題に関するの問答を繰り返し、グループで考えていくことで、取り組みを整理し、その成果として、多賀城市介護福祉課主催の住民主体で支え合う地域づくり「地域支えあい実践塾」にも参加いただいたりしました。多賀城市では、平成30年4月からの東日本大震災復興祈念特別展「東大寺と東北」展の開催に向け、和歌を使ったプロモーションビデオ作成を行っていましたが、「多賀城の魅力発見」という課題設定をしたグループは、「ちぎりきなプロジェクト」というプロモーションビデオ作成に参加をいただきました。たがさぼのクリスマス雑貨市という冬のイベントでもボランティアとして参加してくださった学生さんもいらっしゃいます。団体さんへのインタビューを行っていただいたりして、団体さんの理念や思い、地域活動の解決の学びなどにも触れていただけたと思います。

この他、工学部の学生の皆さんが、多賀城のために活動したいということで「Truss」という団体を立ち上げており、「震災と復興」の学生さんにも関わっていただいて、多賀城の魅力を広く伝えるためのワークショップや、まち歩きなども連携して実施されています。

学生と地域の可能性ということで、「震災と復興」という地域課題の解決、地域活性化だけではなく、通学するだけであった場所が、学び・アクションを起こす新たな世界へ広がっていったのではないかと

いうふうに思います。また、学び・アクションを通じて地域への愛着が生まれてくるのではないかなというふうにも感じました。ピアサミットなど、市民活動団体が主催で多賀城市の後押しなく実施している場で、生き生きと笑顔で活動する市民の方と触れ合っていたことで、将来こういう大人になりたいなとか、自分自身がなりたい姿の構築なんかにもなったのではないかと思います。

市民活動団体だけでなく、災害公営住宅の住民さんや、様々な方に関わっていただくことで、人間力の向上などにもつながっていったのかなというふうに感じております。

この「震災と復興」という取り組みは、豊かな交流を生み出す貴重な機会だと私たちは考えております。今後も皆さんのご支援・ご協力賜ればと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

### (3)「地域の課題Ⅱ」

Naritaマルシェ 代表 増田恵美子

私たちは、「地域の課題Ⅱ」の学生さんたちと3年間関わらせていただきました。そして今思うのは、この「地域の課題Ⅱ」は夢を託せる場所だということです。

1年目は一人の学生が私たちイベントの一つ「まかないつき寺子屋」に参加してくれました。これは子ども向けのイベントです。はじめ、その学生はこのような場に参加することが苦手であることを聞いていたので、私たちも大丈夫かなと心配するくらい極度に緊張していました。でも写真を見てわかるように、話しているうちにだんだん打ち解けてきて、子どもたちと遊ぶときには本当に素敵な笑顔を見せてくれました。

そして、彼は、それを10ページにも渡るレポートに仕上げてくださいました。正直、私たちはこれを読んだ時にびっくりいたしました。ほんの短時間の関わりであるにもかかわらず、私たちの活動の本質をずばり、本当に見抜いていたからです。私だけではなく、これを読んだスタッフたちみんなが感動して、感動メールを次々と私に寄せてくれました。それを少し紹介させていただきたいと思います。「短時間過ごただけで、本質を見ることが出来るKくんは、その年代において少数派で、感受性が高い分、生きにくさを感じていると思いますが、応援している人もいるのだということが、スタッフの感想から伝わることを願います。」「指導した先生のような方が身近にいらして本当によかった。学問を追求するだけでなく、学生さんのことを大切に育てている先生がいらっしゃることに感動しました。このような先生に出会えた学生さんは本当に幸せです。」

彼は、これを職員さんの前でプレゼンテーションを行いました。事情を知っている職員さんは涙ながらに聞いていらっしゃいました。最後に本当に温かい激励の言葉が掛けられていたことを、私も参加していて、今思い出して胸がいっぱいになります。

この1年目に感じたこと、それは青年の中にある深い理解と豊かな感性、そしてその若者の可能性を信じて、忍耐強く、愛情深く導いていらした先生と大学の姿勢。この2つへの感銘、それが1年目に私たちが感じたことです。

2年目も同じくまかないつき寺子屋に参加していただきました。そして、そのあと、スタッフ9名にインタビューを行ってもらいました。その時のまかないつき寺子屋は子どもたちと老人福祉施設に行き、施設の方たちと一緒に芋煮をしました。その活動のあと、スタッフにインタビューをし、まとめさせていただきました。

この資料を読んだ時に、私は思わず笑ってしまいました。どうして笑ってしまったかという、9

人のスタッフが、結局は全員同じことを言っているからです。そして、その考察が素晴らしかったので、紹介させていただきます。

「Naritaマルシェの特徴の一つは、疑似社会を創造しようとしているところ。それは私の経験したことがないものだった。」

私はこの言葉を読んで、はっといたしました。私たちは赤ちゃんから福祉施設の100歳に近い方たちまで関わっています。確かにこれは一つの小さな社会だなというふうに思いました。そのような疑似社会を私たちが創造しようとしているのであれば、その社会がより理想的なものになるようにこれからも活動していきたい。そのような想いが湧きました。

もう一つ、『『地域の課題Ⅱ』は、今だけでなく未来の地域を考えることができる科目だと考える。』私はこの言葉ほど、端的にこの科目のことを表している言葉はないなと思って、ぜひ、履修科目の「地域の課題Ⅱ」の下に、「今だけでなく未来の地域を考えることができる科目」と載せていただきたいくらいです。このような学生の感性は素晴らしいなと思います。このように、2年目はスタッフの意識の共有ができた、そして、学生たちの学びからたくさんの気づきをいただいた年になりました。

3年目は2チームに分かれて参加していただきました。1チームは、私たちの活動に参加したことのある保護者、そしてその子ども19名にインタビューを行っていただきました。そしてもう1チームは、まかないつき寺子屋に参加していただきました。私たちは、参加してくださっている方たちに、「私たちの活動をどう思いますか？」と聞くことはありません。ですから、19名の方にインタビューをしていただいた一言一言は私たちの励みであり、財産となりました。この機会をいただいたことに本当に感謝しています。そのまとめの中に素晴らしい言葉があったので、紹介させていただきますと思います。

「Naritaマルシェのような活動が、人々の地域への関心に対して与える影響はこの先さらに大きくなっていくと思いますし、全国的に同じような活動が広がっていくことで、日本全体がさらにつながりを持った活気のある国に変化していくと思います。」

私たちのこの活動が活気のある国につながっていく、私はこの表現は決して大げさではないと思っています。なぜなら、そのような信念で、私たちはこのような活動をしているからです。私たちができることは足元のほんのちっちゃなことです。でも、そこを大事に活動しようとする人たちが、日本中に広がっていけば、必ずや日本全体が活気のある良い国になるに違いない。そのような想いを常に持って活動しているので、まったく同じことを学生さんが考察で書いてくれたことに深い深い感銘を受けました。この言葉は、私たちの宝物です。このまとめた冊子は、ぜひお一人でも多くの方に目を通していただきたいと思っています。

まとめとして、他者への関心が薄れているといわれている現代であえて関わりながらも、学ぼうとする若者がいることは、社会の宝です。そんな若者たちが学べるこの「地域の課題Ⅱ」というのは、未来の社会をよりよいものになっていくに違いないという、夢と希望を託せる学びの場だと確信しています。

一人でも多くの方たちが、この価値に気が付いて、発展に尽力していただくことを心から願って、私の発表とさせていただきます。

#### (4) 「地域課題演習」

東北学院大学教養学部情報科学科4年 岡 亮太郎

教養学部情報科学科4年生の岡亮太郎と申します。普段は、卒業研究でAndroid向けのスマートフォンアプリの開発というのを行っていて、研究室自体のテーマは教育と福祉です。その中でもAndroid向けのスマートフォンアプリケーションの開発として、小学校低学年向けプログラミング教育支援アプリケーションを開発しております。そんな私が、地域教育科目を受けた感想を交えて発表させていただきたいと思います。

私はこれまで、「地域の課題Ⅰ」（前期必修）「地域の課題Ⅱ」「地域の課題Ⅱ」（後期選択）「地域課題演習」（通年選択）の3つを履修いたしました。その実際の様子と感想を発表させていただきたいと思います。

「地域の課題Ⅰ」では200人規模での授業を体験しました。まず感想としては、人数が多く、教えている先生がすごく大変そうだと思います。自分自身の感想としては、他学科の学生と交流することができて、すごく勉強になったなと思います。他にも様々な考え方、課題の解決方法のアプローチについて、いろいろな考えをもつ他学科の学生とも出会うことができました。実際のアクティブラーニングの感想としては、他学科の学生とグループを組むことになり、同じ学科の学生とは組めなかったのが、初めて話す人ばかりでとても緊張したことを今でも覚えています。そして、アクティブラーニングの他の感想は、自ら考え、グループワークで共有しまとめて発表するというグループワークの基本を学ぶことができたのではないかなと思います。その他にも、アクティブラーニングのメインとして能動的に学ぶことにより「考える」という力自体を学習することが出来たのかなと思います。

「地域の課題Ⅱ」では、フィールドワークとして地域活動を見ての感想、地域に対して尽力している人たちが多くいることを知ることができたのがとても良かったと思います。そして、Naritaマルシェにいる子どもたちがすごく楽しそうで、まるでお家にいるかのような、第二の家としてNaritaマルシェが場所を受け持っているのではないかなという感想を持ちました。その他にも、Naritaマルシェで活動されているスタッフの方々やNaritaマルシェに通っている子どもたちとの人のつながり、温かさをすごく心に感じました。

最後に「地域課題演習」では、実際に南三陸町長清水にフィールドワークに行き、住民の方への調査、そしてその結果を南三陸町の町長さんへ報告させていただきました。被災地に直接足を運んでみて、想像以上にやはり被害は大きいなと思いました。それまでに写真や文献などで勉強させていただいてはいたんですけども、現地に出向いてみての目で見たときの被災地の被害の大きさは今でも忘れられません。この時も、まだまだ土地の整備などの復興も続いていて、これからもまだまだ復興は続いていくのではないかなという感想を抱きました。そして、フィールドワークで、実際に聞き書きをして、被災者の声を聞いてみて、7年、もう少しで8年経ちますが、経ったからこそ聞くことができたこと、そして、7年、8年経っても未だに聞くことのできないことの両方があると思いました。それでも未曾有の被害を受けた現地の方々には立ち上がり、強く生きて生活していたという感想を抱きました。

最後に地域教育科目を履修して、これからの仕事にどのように活かしていくかということですが、私は最初に申した通り、「教育と福祉」というテーマで研究室では研究を行っており、Androidやアプリケーションをメインに開発を研究しています。その中で、「地域の課題」を履修してみて、将来

的には地域住民者様向けの生活支援のアプリケーションや高齢者向けのアプリケーション開発などを行い、実際に地域教育科目で学んだことを含め、支援していける形がくれたらいいなと今は思っております。さらに、「地域の課題」での講義でのグループワークを通して、グループ単位での話し合いなどの力をこれからの仕事に活かしていけるのではないかなと個人的には思います。

最後になりますが、私が「地域の課題」という講義を受講して、聞き書きなどのフィールドワークを通して、一つ、今回のテーマである「地域と向き合う」ということに対して、感じたことがあります。それは、「地域と向き合う」ということが、大きく言えば「人と向き合う」ことなのではないかと思いました。地域に生きる方々と向き合いお話を聞いたり、その地域を知って、課題を知り、様々なことを学ぶことができたと思います。この地域と向き合うということは、人と向き合うことなんじゃないかということが、この地域教育科目を学び、自分の中で得た一番大切なことなのではないかと思えます。

## ②研究

### (1)「CSW公開研究会」

東北学院大学地域共生推進機構 特任教授 本間 照雄

平成25年に地域共生推進機構を本学は設立し、翌年、循環型地域共生教育システムの確立をテーマとして文科省の地（知）の拠点整備事業（COC事業）へ補助申請をして、当年7月に事業採択をされております。その後今日にいたるまで5年間この補助期間を活用して、この事業目的を達成に向け、活動を進めてきました。

このCOC事業の3つの柱のうちの「研究」では、主な事業として、CSWに関する研究、多文化共生社会の推進について、市民参加型地域課題解決プログラムの3つがあります。

ここではその中でもCSWに関する研究を中心にお話したいと思います。

このCSWの取り組みにおいて、公開研究会の開催は大きな柱となっております。研究分野の中核をなすCSW公開研究会は4年間で述べ20回、1,057人の参加を得て地域とともに学びを深めて参りました。

本年度の第1回目は「組織におけるコミュニティソーシャルワーカーの育成との方策について」、第2回目は「コミュニティソーシャルワーカー（CSW）スキルアッププログラム公開授業」として、多くの人にご参加いただきました。第3回目は「災害公営住宅自治会等活動報告会」として、一生懸命に新たな住まいについて自治会活動を活発にやろうという取り組みが多くあったため、宮城県内から9団体集まって報告をしてもらい、意見・現状を共有させていただきました。第4回目は「災害から一人ひとりの命と暮らしを守るために」として、防災福祉という新たな視点から地域コーディネーターの役割を考えました。そして、第5回目は「地域コーディネーターが走る！」として、宮城県内のコミュニティソーシャルワーカーが一堂に会して、その実践を共有しました。

このうち第3回の「災害公営住宅自治会等活動報告会」はホーイ記念館で行われ、150の方が参加されました。当日はとても高い関心をもって多く参加いただきました。終了後に、発表者と来場者が意見交換をして、名刺交換を行うなど、その発表を自分たちの活動にお土産としてもっていこうという人々が非常に多かった、それがとても印象的でした。マスコミでも大きく取り上げていただきま

した。この発表はすべて口頭発表とポスター発表の2つの方法で、学会方式で行っております。ポスター発表では、発表者を数十人の人たちが遠巻きにして、そして、発表が終わった後は活発な意見交換をする様子があちこちのブースで見ることができました。そして、この活発な様子を見ると同時に、CSWに対する期待というものが非常に大きいのではないかということを感じました。

この地（知）の拠点整備事業の5年間の補助期間において、何を実施してきたのかということですが、一言でいうと、「地域社会の知と東北学院大学の知とによる共創の基盤づくり」というように言えるのではないかと考えております。

本日も地元の町内会、青葉土樋町内会の古山会長他、多くの役員の皆様にお越しいただいております。また、協力市町村、多賀城市、仙台市からも、各課から様々な相談を受けております。また、それらの相談にのれるような基盤もできたかと思えます。

これから本学が何かの事業を実施するとなった場合には、宮城県内の市町村社会福祉協議会全部から名義後援をいただく、そのようなことができるようにもなりました。

このようにして、共創の基盤づくりというものを着々と進めてきた、これが5年間の歩みだと考えています。

目指してきたものは、学長のリーダーシップのもと、地域連携を一層充実させ、地域課題を教育・研究に直結させ、その成果を再度、地域課題の解決につなげていくという、教育、研究及び社会貢献を継続的・発展的に好循環させる一貫体制（地域共生教育）の構築です。

私たちはこの5年間で、このような目標を立てました。教育、研究、社会貢献それぞれの分野について、ほぼ達成できたのではないかと考えております。同時に、教育、研究、社会貢献それぞれについてはそれなりの発展はしましたが、これら3つを取り合わせて更なる発展をさせていくということについてはこれからの課題ではないかと考えています。

この、教育、研究、社会貢献を一本にして、更なる発展というものを目指していく。この時に、我々が現在実施しているコミュニティソーシャルワーカー（CSW）スキルアッププログラムというものが、とても大きな学びの場となるのではないかと考えています。

今回、この報告会というようなものが次なるステップへとつなぐ、その第1歩となれば幸いですと思っております。どうもありがとうございました。

## **(2) 「CSWスキルアップ講座（履修証明プログラム）」**

特定非営利活動法人みんぷく郡山事務所 **ダクルス久美**

私は2015年9月より、福島県から委託されている、原発避難者のための復興公営住宅コミュニティ形成支援事業に従事しております。福島では集団支援と個別支援の役割分担が明確に分かれており、私達コミュニティ支援員は集団支援を専門に扱うという立場のため、福祉の知識もなく専門職でもありません。

そのような私達が、原発被災という前例のない災害の当事者である方々とその複雑な状況に向き合いつつ、手探りのコミュニティ形成支援に従事する難しさや知識とスキルの不足に、入職早々から本当に悩み深い日々を送っていました。

入職からまだ数か月の2016年2月頃、たまたまインターネットで「コミュニティソーシャルワーカー スキルアッププログラム 受講生募集」の案内を目にしました。この講座に出会うまで「コミュ

ニティソーシャルワーカー」という存在を知りませんでしたし、福島県でそうした役割があるのかを調べてみましたが、導入されている様子もなく、誰が担うものなのかも知りませんでした。

しかしカリキュラムを見てみると、職務の中で課題に感じたり必要と感じたりする内容の学びが網羅されており、自分自身が今行っている職務はまさしくこういうことなのではないか、と感じ、「こんなプログラムがあるなんて！まさしく私の知りたいことがここで学べる！」と本当に救われる思いがしました。

福島から仙台への距離や1年間のカリキュラムという期間の不安よりも、とにかく学びたい、学ばなければ、という一心で申し込みを即決しました。

学習が始まってみると、地域福祉の基礎知識から、理論、実践的な技能、また専門分野別に学ぶ社会課題や豊富な事例研究と、どんどん内容が深まってゆきました。知識としてはもちろんのこと、仕事の現場で起こる、「こういうことが必要なのではないか」「もっとこういった取り組みができればいいのに」という疑問や葛藤に対する考察をたくさん受け取り、毎回、帰りの高速バスの中ではぐるぐると頭を巡らして考えていました。その高速バスの中での振り返りはいつも、1日の長い授業で疲れているにもかかわらず、今日学んだ内容をこぼすまいと、深く深く思いを掘り下げていくような時間でした。

しかし、そうして胸を焦がすような思いで持ち帰った学びも、仕事の現場では「私達の職務ではそこまで求められていない」という反応でなかなか理解されなかったり、他県の事例と地元との取り組みや状況の違いにがっかりすることもたくさんあり、学びの豊かさや自分自身の内面の広がりとは裏腹に、現場に戻ればさらに葛藤で苦しくなる、と言うことも多くありました。

学んでいる期間の半分以上は、そうした取り組みや仕組み・枠組みの違いにジレンマを感じたり悩んだりという事の方が多かったように思いますが、後半になるにつれてだんだんと、「行政や仕組みをそう簡単に変えることができない中で、今、自分が置かれている立場で何ができるだろう。役割・立場としてできない部分をどう補ってゆけばよいのだろう」という視点に変わってゆきました。授業はもちろんのこと、その葛藤の時間によって、さらに内面が引き延ばされ、成長させられたように感じます。

東北学院大学のCSWスキルアッププログラムは社会福祉全般を網羅する科目が盛り込まれており、専門職養成講座といえる、大変質の高いカリキュラムだと感じます。しかし、CSWは地域福祉におけるひとつの役割や職務として一部行政区域に配置されているものの、福島県では導入されておらず、また公的な資格として確立されていないため、この1年間を学びに費やしても、資格や認証を得られるというわけではありませんでした。

それでもこれだけの内容をしっかりと学べる機会は本当に貴重なことだと感じますし、ましてや私の年齢でも大学の履修プログラムで1年間も学べるということは、自分自身の人生にとっても大変大きなことであり、新たな知識を増やして何かこの現状を変えられるかもしれない、という希望は、本当に大きなモチベーションと前に進む力となりました。「絶対これを福島に持ち帰って伝えたい、何とか福島の支援の現場を良くしたい」という思いが、履修のための時間や距離や年齢を越えて心を奮い立たせてくれました。振り返れば本当に必死に食らいつくような、何とかして支援の現場を変えたいとの思いを握りしめて通っていたと感じます。

そんな濃い1年を過ごしての修了式では、溢れる思いを修了生挨拶に代えさせていただき、その後

も様々な機会を通して2期生・3期生の皆さんとも関わる機会を頂きました。自分自身が学んでいたときに感じた深い気付きや手応えを味わっているであろう仲間達が年毎に増えていくことは、何よりも喜びであり、また励まされる思いがします。

当時、交流員として現場に携わっていましたが、時間が経って支援のフェーズも私自身の役割も変わり、その頃とはまた違う立場・役割として職務にあたっています。また住民の皆さんが直面している課題もさらに変化し、様々な状況の中で考えるべきことや対応すべきことも変わっています。

ここで学んだことで、何をすべきなのか、今後何が必要になるのか、とすることを少し先回りして考えてこられたと感じますし、フェーズの変化と共に、あの時なかなか共有できなかったことが、今では共有認識になり、成すべきこととして取り組みが進んだとも感じます。

ですが、やはり住民の皆さんの状況も感情も時間が経つにつれて変化してゆき、私達が理想と思うことが必ずしもそうではないことや新たな課題が表出することも多々あり、知識としても実践としても生きた学びをし続けなければならないことを強く感じます。

CSWスキルアッププログラムは、ただ知識を養うためのものだけでも役割を担ったり課題解決をするためだけでなく、地域社会とそこで暮らす様々な人々の生き方や在り様を見つめ、より良くするために何ができるかという価値観を養う場でもあったと感じます。私に関わる職務は集団支援ではありますが、個が集まったの集団であり、コミュニティを形成するためにはひとりひとりの存在や思いに向き合わざるを得ない。それを見ずしてコミュニティの形成は成り立たない、と感じます。

支援の仕組みや枠組み、役割がどうであれ、できることが限られているにせよ、私達は目の前にいる存在がどのようなか、まずは感じなければならないのではないかと。ひとつの役割ですべてをカバーできなくても、皆が同じものを見て、それぞれの役割を組み合わせることでその課題を解決してゆければよい。どうしたらその「同じもの」を見る眼を養えるだろうか。どうしたら「そうだよね」と互いに言えるようになるだろうか。そのような思いで、次はぜひ、福島にCSWのカリキュラムを導入できないか、と試行錯誤を繰り返しています。

この構想にあたっては、学院大のCSWスキルアッププログラム事務局の皆さまや先生方にも何度も相談のお時間を頂きました。またそのための具体的なお提案や試算等も頂き、私のような一修了生に対して、また福島で私が感じている課題に対して、本当に親身になって一緒に考えてくださいました。

先生方のそのようなご尽力を頂きながらも私自身の力が及ばず、なかなか思うように進みませんが、そんな中でも「一緒にできることを考えてゆきましょう」と言ってくださる伴走者にも少しずつ出会えるようになりました。

ひとりでは小さな力ですが、ふたり、3人と集まれば、何かが起こるかもしれない。それを信じて、あきらめず地道に小さな一步一步を進めてゆきたいと思います。

ここで得た学びの1年間が、そのあとの歩みを大きく変えてくれました。このカリキュラムで出会った先生方とも、その後様々な繋がりを頂き、職務でもご協力を頂く機会が何度もありました。

また年に数回の公開研究会や、1期・2期では取り扱わなかった科目についてはフォローアップ授業として追加受講できる仕組みや、職務の現場で直面した課題等を相談できる窓口を設置して講師の先生につないでくださるなど、修了後も手厚いフォローを頂き、本当に感謝しています。

また、研究会やフォローアップ授業などでの再会を通して、1期・2期・3期にまたがって仲間が

いることの喜びを感じます。

いくつになっても成長の機会を頂けること、そしてその学びが仕事を通してさらに活きた学びとなること、それをただ単に自分の糧とするだけではなく、社会の中で何かしらの役割を担えることが、在学中だけではなく、またそののちに得ることのできた何倍もの収穫であると感じます。

私自身もまたこの経験を通して、地域のために学びたい誰かの後押しができればと思います。いくつになっても学び成長できることの手応え、社会の中で何かの役割を担うことの生きがいや喜びを感じて活躍する方々が、ひとりでも多く地域に起こされますように。

ご清聴ありがとうございました。

### ③社会貢献 「地域は大学の財産 大学は地域の財産」

仙台市五橋地域包括センター所長 結城 修子

本日は東北学院大学さんと私ども包括支援センター・社会福祉協議会が一緒に取り組んだ青葉土樋町内会についてご報告させていただきます。

今回の経過を説明させていただきますと、平成28年5月に本間先生から仙台市社会福祉協議会の方に、大学の身近な地域で地域貢献活動を実施したいというお話をいただきました。私たち包括支援センターにとっても、同じ年、平成28年4月に財務省の生活支援コーディネーターが包括支援センターの方に配置になっており、地域のネットワークを強化したり、地域づくりを進めたりしていかなければいけない状況となったところを、本当にこのようにありがたい話を頂いた次第です。

まず、本間先生からはモデル的に大学の身近な地域でという話があり、青葉土樋町内会にお願いをして実践を進めていきたいというふうに考えました。

はじめに町内会の会長さんに、事業の説明と今の地域の状況について、包括支援センター、社会福祉協議会、本間先生でお話をうかがいました。その後町内会の役員会の方にも本間先生と一緒に邪魔させていただいて、直接事業を説明しました。町内会役員会では、様々な意見を頂き、ちょっと敷居が高いなというような印象をお持ちの方がいらっしゃる一方で、今回の事業については、町内会に集会所がなく、なかなか集える場がないということもあって、大学の場所が使えることができればうれしいとか、学生さんが町内会の活動に関わってくれることで活気が出るというような期待する声も聞かれました。

結論としては、町内会の方々が全面的には協力をしていただけるということで、まずは敬老会を大学の場所をお借りして実施してみることから始めることとなりました。さらに、本間先生から、大学による地域の方向けの公開講座も進めていきたいというお話もあり、この事業が始まりました。

実際に平成28年から始まりました敬老会は、町内の方が本当に一致団結してきめ細やかな準備、温かい気持ちを込めて準備をされているということもありますし、なにしろこの素晴らしい環境で敬老会ができるということで、地域の行事として定着しつつあると思います。どこの地域でも敬老会が行われていると思いますが、参加者の皆様からは、どこの敬老会よりもすばらしいと感想が聞かれて、とても楽しみにしていらっしゃる高齢者の方も多いです。参加された方の中には、震災でやむなくご自宅が流されてしまって、この地に住むことになった方もいらっしゃいます。その方が「ここに来たためにこんな素敵な敬老会に参加できて幸せです。」という感想をお話しされていたことがとても印

象的でした。

その他にもホーイ記念館のカフェで素晴らしい環境で認知症サポーター養成講座を開催したり、フラワーアレンジメントだったり、それからキャンパスツアー、スマホサロン、人生フルーツ、たくさんのお話を企画していただいております。さらに、本間先生に五橋中学校に来ていただいて、中学生にもサポーター養成講座をしていただいております。

このように地域の皆様の興味が持てるようなものをたくさん企画していただいて、私たち包括支援センターも地域の方々に、今度こんなことがあるよ、学院さんでこんなことがあるよと、チラシをもっていくたびに、身近な地域で高齢者の方が参加できるイベントがあるということは、本当に私たちにとってはありがたいことと感じています。

さらに地域と大学との関係が構築されてきたこと、その積み重ねがあったことで、今年、地域のニーズや課題に対する意識調査、それから担い手の把握も含めたアンケート調査を実施することができました。仙台市社会福祉協議会青葉区事務所が中心に進めているこのアンケートの実施については、町内会の会長さんをはじめ役員の方々の全面的な協力があって実施できたものと思っております。800世帯と書いてありますけれども、町内会に入っている方と入っていない方で配布方法を変えておりますが、町内会に入っている方々には580世帯配っております。その中で33%の回収率というのはかなり高い回収率だと思っております。これもこの3年間の地域と大学との連携で構築された信頼の賜物だと思っております。

最後になりますが、私たち包括支援センターもたくさん学びがありました。地域の方々が最初、大学は敷居が高いなと感じていらっしゃいましたけれども、今日こうしてこの報告会に地域の方々が来てくださっていることが、まさしく身近に大学を感じてくださっていることなのだと思います。

それから、私たち包括支援センター、社会福祉協議会もそうですけれども、アンケート調査をするにあたって本間先生の方から、アンケートの内容とか実施方法を、かなりの時間を割いてご指導いただきました。地域福祉を推進する私たちが専門的な視点でご指導いただけるということは本当にありがたく、心強く思っております。

今後はそれに加えて、仙台市内の52カ所ある包括支援センターに、こういったことを、大学とこういったことができましたということを発信することが、包括支援センターにとっても貴重な情報になるかと思っております。今後は更にご指導いただきながら、アンケート調査をどう活かしていくかというところにつきましても、町内会の方々と一緒に考えてまいりたいと思っておりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

## 2. 事業評価

### ①「大学との連携による地域福祉を支える人材の育成」

仙台市健康福祉局地域福祉部社会課長 大槻 覚

本日は、これまで東北学院大学様と仙台市が協働させていただいた経過と、このCOC事業が節目を迎えるにあたり、感想を述べさせていただければと思います。

まずは経過でございますが、東北学院大学様から平成25年春頃に、COC事業に関するご相談をいただきました。ちょうどその頃、本市では、復興住宅への入居が始まろうとする時期で、平成26年度

から28年度にかけて入居する方が多く、当然いろいろな場所からいろいろな背景をお持ちの方がいらっしゃるって、そのコミュニティ支援をどうしていくのかというのが、本市にとって大きな課題でございました。

その中で、仙台市社会福祉協議会に、コミュニティソーシャルワーカー（CSW）を当初11名配置いたしました。地域の中に入ってコミュニティ支援をするというのは、役所にとっては苦手な部分ですので、官と民、両方の性質を併せもった社協さんに、制度の隙間の支援も含め、コミュニティ支援をしていただくCSWを配置しようという意図でありました。しかし、CSWの育成やその評価については、課題認識を持っていました。

二つ目の課題として、少子高齢化への対応です。現在、仙台市では、65歳以上の方が23%程度を占めています。それが20年後には、およそ3人に一人が65歳以上の方になります。そして、高齢化している地域の中で、つながりが希薄化しているともいわれています。4年前にアンケートを取ったところ、「地域の中で、何かお困りのときに助け合える親しい人はいますか?」と聞いたところ、2割しかいませんでした。「会えば、立ち話するくらいの方はいますか?」と聞いたところ、27%ほどでした。約半数は、立ち話できるような人が地域にいないという状況で、アンケートの結果からも、地域の希薄化というところが見てとれます。さらに、平成26年の町内会長へのアンケートでは、町内会長の約7割が、役員の高齢化や担い手不足に悩んでいるとの結果でした。

一方で、そうした弱まりつつある地域資源が本当に弱いことばかりかということ、東日本大震災の時には、大学生、高校生、そして、中学生に至るまで、若いボランティアの方が活躍されました。実際に、避難所以外で生活している期間中に安否確認された方にアンケートを取りましたところ、約半数の方が、地域の方から安否確認をしてもらったとの結果でした。つながりが薄れる中で、やはり困ったときにはお互い様という意識が一定程度働いていることが見られました。さらに、4年前のアンケートで、「条件が整えば、地域でボランティアに参加したいと思いますか。」と聞いたところ、全体の6割弱が「参加してみたい」という結果でした。中でも、学生さんは83%程度が、「条件さえ合えば参加したい。」という結果でした。このことから、潜在的には、支えとなる地域資源はあるのではとの認識を持ったところです。

このような課題のある中、東北学院大学様からこの事業のお話があり、平成25年春に連携自治体として、市長名で文科大臣あてに東北学院大学様の本事業への申請について副申いたしました。そして、平成28年度から、コミュニティソーシャルワーカー（CSW）スキルアッププログラムが始まりました。

復興公営住宅におけるCSWの支援は、まず地域に入ってアセスメントをして、地域の関係者で「支援者の会」をつくることから始めます。その会の中で、例えば「信州そばの交流会をしましょう」「お茶っこサロンを開いて、地域の人が集まる場所を作りましょう」といった機運を醸成します。そうした後に、「町内会を作りますか」または、「近隣の町内会に加入しましょうか」といった「住民の組織化」にむけた話し合いがはじまります。復興公営住宅は40棟あり、そのすべてが町内会の設立または近隣の町内会とつながり、一定のコミュニティ形成をしている状況です。さらに、今後、このコミュニティ支援の取り組みを復興公営住宅がない地域でも進めていきたいと考えています。

現在、国でも議論が進められ、コミュニティソーシャルワークの位置づけが明確化され、その必要性が高まってくることが予想されます。そして、その統一的なカリキュラムのようなものも今後作られていくのではないかと考えられます。その中で、平成28年度に開講したこのCSWスキルアッププロ

グラムは、それに先立って、体系立ったプログラムをお創りになられたという意味で、先見の明があったものと評価させていただいております。

そうした職業人の育成は、受講した方が各職場に帰られた後、今まである意味職人技でやっていたところを、専門的知見で整理することを通じて、地域福祉の向上に繋がるものと思います。実際、市社協でも計14名がCSWスキルアッププログラムを受講し、各職場の中で受講した内容を共有し、または、ファシリテーションの実践的技法が大変役立ったとの声もいただいているところです。

以上がこのスキルアッププログラムについての評価となります。

2つ目として、「地域教育科目」として、全学生に大学のカリキュラムとして、地域課題を考えるきっかけを提供していただいている点です。特に、3年生に受講していただく「地域課題演習」は、現場に出てアクティブラーニングを通じて、課題について考え、その解決策を導き、検証していくという、なかなか大学の授業では味わえない取り組みという点で意味のあることだと思っています。

3つ目として、「地域との協働」です。地域には、いろいろな活動を進めておられる市民の方々がたくさんいらっしゃいます。一方で、地域ごとに温度差があって、活動が活発でない地域もあります。そういった活動をなさっている部分を見える化していただき、「他の地域ではこういうことをやっている。こういうことなら、うちでもできるかもしれない。」、そういうきっかけづくりとして、「公開研究会」の開催も意義ある取り組みであると評価させていただいております。

他にも、土樋キャンパスを開放し、町内会と連携して、キャンパス見学ツアーや敬老お食事会を学生と一緒に取り組まれ、学生と地域住民の交流という点で、これも大変意義ある取り組みだと思っています。

最後に、介護・福祉の現場では全国的に、民生委員や地区社協の福祉委員が不足しております。一方で、国からは社会福祉法改正を受け、できるだけ地域でキーパーソンをつくり、それを支援することを通じて、地域に交流できるような場所や機会を提供していくことが求められています。これからは、世代を問わず誰もが、地域で、あるときは「支える側」、あるときは「支えられる側」とその役割が循環していくことが必要だと思っています。その中で、引き続き学生の皆さんには、地域活動に少しでも携わっていただき、そこで、地域の方とつながり、時には相談したり、時には様々な立場の方とコミュニケーションを深められたり、そのようなことを通じて、考え方の幅を広げ、地域の中で支える、また、支えられる、まさにwin-winの関係をつくってもらえればと思います。

そのような様々な意味で、COC事業というのは意義のあるものと思っていますし、引き続き、東北学院大学様には、仙台の未来を担う人材を育成にご協力いただきますようお願い申し上げます、私からの本事業への感想とさせていただきたいと思っています。

## (2)「地域との共生における大学との連携」

多賀城市総務部地域コミュニティ課 課長 柴田 光起

私からは「地域との共生における大学との連携」ということで、これまでの取り組み、地域共生推進機構と多賀城市との連携、今後についての3つに分けてお話をいたします。

まず、これまでの取り組みについてですが、東北学院大学と本市とは、平成19年11月に締結した連携協定に基づき、地域住民のための大学公開講座、本市へのインターンシップ、本市小中学校理科教員に対しての先端テクノロジーに関する講義等の教育分野での連携、あとは東日本大震災からの復

旧・復興支援など、ご支援をいただいております。

もちろん、平成19年の協定締結以前からも、大学の先生方に、各種審議会の委員就任をお引き受けいただいたり、市役所含め地元の事業所に優秀な人材の方々をたくさん輩出いただいております。

この中で平成25年に地域共生推進機構ができ、地域教育科目「震災と復興」での連携からはじまり、さまざまな新しい連携が生まれています。

まず、自治会、町内会分野での地域コミュニティ課との連携です。

地域コミュニティ課は災害公営住宅の自治会支援を担当しておりますが、本当に日々たくさんのごことが起こります。初めて集合住宅に入って自治会づくりをやるような方々が、チャレンジされているわけなので、常にいろんなことが起こっています。そして、そこに対応する私たちも「ええ！こんなことが起こるのか」という戸惑いがある中で、地域共生推進機構の本間先生に協力をいただき、いろいろ講演等から、共通のビジョンを作り、あるいは地域福祉のあり方について学ばせや、庁内・関係機関での話し合いのコーディネートをしていただいております。

次に、自治会実態調査です。昨年度自治会運営の実態を把握すべく、市内46の自治会にアンケート調査を昨年実施いたしました。私共だけでは、詳細な分析に至らない部分があるところを、地域共生推進機構の菊池先生に入らせていただいて分析をお願いし、その結果、女性が関わる自治会だとか、あるいは様々な団体と連携している自治会ほど、課題が少ないという状況が分かってきました。やはり多様な主体との協働は必要なんだなというところを認識いたしました。

また、10月には行政区長さんが集まる中で、と市内幹部職員との市政懇談会というのを開催しましたが、その際にも、多様性のある自治会運営だとか、歳を重ねることが楽しみになる地域づくりについてご講話をいただきました。区長からも大変好評で、もっと講話の時間が欲しいというお声も挙がっていたところでございます。

次に、子育て支援分野での子育て支援課との連携をご紹介します。現在、本市では、いわゆるネウボラ、多賀城版ネウボラといったところに取り組んでおりまして、庁内横断的な子ども・子育て支援施策の検討を実施しております。今年度は「子どもの貧困に関するアンケート調査」を実施することとしており、機構の協力を得て、アンケートに臨む意義や、各課で実施するアンケートを横断的に分析することの重要性について講話をいただきました。

次に同じ子育て分野で子育て支援施設また、市内には、委託事業者と指定管理者がそれぞれ異なる子育てサポートセンター、鶴ヶ谷児童館、西部児童センターのといった3館がございまして、実はこれが委託事業者と指定管理者が違うところで、私どもなかなか入りづらいところではあったんですけども、機構の協力により、初めて3館合同での研修を行いまして、各施設の理想を、絵や言葉にするワークショップを実施いたしました。

また、社会教育、防災分野では、多賀城市文化センターにおいまして、東日本大震災の教訓により、毎年開催している、文化センターでは、コンサート中に地震が発生した想定での、避難訓練を実施しておりました。につきまして、こちらも機構の協力により、今年初めての試みとして、やった訓練だけではなく、避難訓練後のモニタリングを実施いたしました。そもそも災害とは何かということを学びながら、一般公募で集まった防災モニターの方々と共に、危険個所をチェックしながら、危険個所マップを作成いたしました。職員の視点では気が付かない指摘も多く、モニターさんから引き出していただきましたいたということがございます。

これまでは、「震災と復興」以外の、機構との連携について紹介させていただきましたが、ここからは、今後の東北学院大学との連携についてお話させていただければと思います。

今まで御紹介してまいりましたように、近年は、これまでも増した緊密な連携により、これ今まで行われてこなかった、初めての試みなども実施されております。そのような中、今後の連携について改めて考えた時に、やはり、この両者のマークに立ち戻ってまいりました。ただし、これからは足し算だけの関係ではなく、掛け算の関係によって、それぞれの効果が無限大に続いていくような効果があったらいいなという風に考えております。

自治体戦略2040構想ということで、高齢者人口が最大となる2040年頃の自治体が抱える行政課題を整理した上で、今後の自治体のあり方を展望したものを総務省が構想を「自治体戦略2040構想」を総務省が発表いたしました。公的部門・民間部門いずれも労働力の供給制約を受ける中で、自治会など地縁組織も弱体化するだろうといわれている中で、自治体職員は、半分の職員数でも担うべき機能が発揮される仕組みが必要だと言われております。こうした流れや中、高齢化により自治会・町内会などが弱体化している中、ヒト・モノ・知識を備え、地域コミュニティの中核的存在である大学と地域との地縁を活かしたまちづくりというのがさらに進んでいったらいいの地域力アップにつながるのではないかと考えております。

以前、多賀城市の地域経営アドバイザーとして、本市の地域コミュニティ施策へのアドバイスをいただいております高崎経済大学の櫻井先生も、「人口減少社会の中で、これまで自分たちだけで当たり前できていたことができなくなる」と。「その時に、東京の大学では自治会の多くが大学と連携し、多くの自治会が大学生が自治会の会報を作ってくれたり、案内チラシを大学生が作ってくれていた。」と話されておりました。今後は、本日の発表事例にもあったような、地域が学生を育て、学生が地域を元気にするような取り組みがなども今よりももっとさらに継続生まれてしていったらいいなというふうに考えております。

また、地域のみならず、学生と市民活動団体やNPOとの繋がりができることで、自分の関りが地域課題の解決に繋がって、「自分の存在・学びが価値を生むものである」ということを時間できる場というのを大学と一緒に創っていきたいと考えております。例えば学生が自分の存在ですとか、自分が学んできたものが価値を生むものなんだということを実感できるような場が大事で、私どもとしても一緒につくっていきたいと考えております。

さらには、ちょっと欲張りますけれども、学生のみならず教職員の皆様がプロボノ的に市民活動団体・NPOとつながることで、得られる教職員の知識、あるいはスキルが地域や社会に還元されて、そのことが、東北学院大学の理解につながって、学生確保ですとか職員確保にも繋がるような関係性を構築することを、行政としても一緒にやっていたらいいなという風にとも思っております。

「地（知）の拠点整備事業」は、今年度をもって終了するとのことでございますが、今後もこういった連携が、・パートナーシップがずっと続いていくことを祈念して願っております。最後になりましたが、東北学院大学が地域の拠点大学として、新しい価値を創造するとともに、して地域のDNAを将来に渡って継承し続けることを御祈念申し上げまして、私からの報告とさせていただきます。

地域教育科目「地域の課題Ⅰ（地域課題版）」の  
カリキュラムおよび評価体系  
～ディプロマポリシーと連動した評価体系構築に向けて～

# 地域教育科目「地域の課題Ⅰ（地域課題版）」の カリキュラムおよび評価体系 ～ディプロマポリシーと連動した評価体系構築に向けて～

## ○地域教育科目とは～地域の課題Ⅰの位置づけ～

東北学院大学では地域が抱える具体的課題を発見し、その解決のために自らの学習成果を活用する教育活動として、本学の既存の科目群である「専門教育科目」、「教養教育科目」、「外国語科目」、「保健体育科目」と並んで「地域教育科目」を設置している。

低年次の授業からアクティブラーニングの手法を用いて、地域の生の課題をテーマにし、その解決のための手法を従来の知識伝達による演繹的な思考だけではなく、「仮説と検証」を軸とした仮説的推論（アブダクション）を取り入れることを通して「課題発見」や「解決能力」の向上を達成することを目的とする。

### <地域教育科目一覧>

「震災と復興」（前期泉キャンパス・後期多賀城キャンパス 各学年選択）

震災復興をテーマに地域の問題を理解する

「地域の課題Ⅰ」（前期：2年生必修）※2016年度開講 2018年度より全学部対象

地域の問題を俯瞰し、視点をもって課題を見つける

「地域の課題Ⅱ」（後期：2年生選択） ※2016年度開講 2018年度より全学部対象

地域課題と専門分野との関連性を理解する

「地域の課題演習」（通年：3年生選択） ※2017年度開講 2018年度より全学部対象

課題解決の現場で仮説検証を繰り返す

## ○地域の課題Ⅰ概要

地域の課題Ⅰは、地域共生推進機構教員が担当する地域課題を対象とした「地域課題版」と地域協働教育推進機構教員が担当する「地域企業版」にコースが分かれており、学生は前年度のガイダンスによって、いずれかのコースを選択した。

地域の課題Ⅰ（地域課題版）は、達成目標を「震災復興過程の地域について自らの関心領域・テーマを明らかにし、自分なりの解決策を提案する」と設定し、東日本大震災からの復興という枠組みの中で、それぞれの専門領域を背景とし、復興というテーマを主体的な視点を持ち、その過程を学ぶことによって、自分の探究領域が、社会や地域とどのようなつながりがあるのかを具体化・明確化した。

実際のカリキュラムにおいては「コミュニティ」「防災」「合意形成」「イノベーション」の4つの視点から主に映像をもとにしたケース教材を活用し、「解が限定されない課題への葛藤」を体験しながら、それぞれの視点での東日本大震災に関連した地域の実情をジブンゴト化するかたちで学習を進めた。

各回では、その地域の現状の把握し、葛藤の抽出、葛藤の外的・内的要因の整理を行い、その課題を解決するためにすべきことを検討する。

この一連のプロセスを経て、最後は、この検討から自分が復興のために現在、そして将来できることをそれぞれの学びたいこと、得たいことを元に論述する。

この授業の進行にあたっては、4名1グループを基本とし、それぞれが探究する視点、解決へのアプローチ等を共有し、議論を重ねること、そして3つのケースそれぞれでチームメンバーを変化させることによって、多様な視点、考えにふれる機会を多くし、それぞれの学びを深めることにつなげた。

## ○ディプロマポリシーによるアセスメント評価

地域の課題Ⅰは東北学院大学のディプロマポリシーに基づき、2年次として必要な能力を定義し、それに基づく評価を行った。

<ディプロマポリシーに基づく評価>

1. よりよく生きようとする態度をもつこと
  - a. 様々な地域課題・社会課題を自分事としてとらえることができる。
  - b. 様々な地域課題・社会課題に対して、自分が何らかの貢献できる方法がある
2. 知的活動を続けるための基本的技能を身に付けること
  - a. 地域課題について、課題に関わる情報を取得し、説明することができる
  - b. 課題解決を求められたとき、複数の情報を組み合わせ、最適な解を考え、説明することができる
3. 専攻分野の専門的知識とそれを支える認識や思考の方法を身に付けること
  - a. 自らの専門分野（学部）がどのような社会的事象や課題を取り扱う学問であるか他者に説明することができる
  - b. 自分が行う探究が社会においてどのような価値があるかを具体的に説明できる
4. ものごとを広く多様な視点から認識し、考えることができること
  - a. 多様な視点・意見を大切にしたい行動ができる
  - b. 議論において、自らが表明した意見と異なる他者の意見を説明することができる
5. 課題解決のためにさまざまな学習成果を総合的に活用することができること
  - a. 何か不明なこと・困難なことがあった時に何が課題かを整理できる
  - b. 何か課題に直面したとき、根本的な原因を明確化し、論理的に解決策を提案できる

## ○成績評価方法

### ●成績評価

本講座は、100点満点を以下のように評価した。

- ・小テスト 52%（4点×13回=52点）

2～14回目までの授業開始直後に小テストを実施。1回あたり4点で評価した。小テストは全てresponを用い、各自のスマートフォンからの回答をもとに、事前学習のための問いが具体的かつ明確な回答であるかを基準に採点および毎回のフィードバックを行った。

- ・テーマごとのミニレポート 20%（5点×4回=20点）

本講座では4つのケースを各3回で整理する。各ケースの課題を明確化し、それぞれの大学での探究分野とケースで得られた学びのつながりを具体的に説明するものであり、その具体性と主体性に対して評価を行った。

- ・最終レポート 28%

この授業を通して学んだことを、これからの学修や生活にどのようにつなげるかを15回の授業終了後にまとめた。

問い：SDGsの17の目標と169のターゲットから、ターゲット1つを選択し、そのターゲットと、震災からの復興、そして自分が大学で探究したいこととがどのような関係があるか、地域の課題Iで学んだことと関連付けて説明しなさい。

採点基準：

- 主体性 10点満点 ・ジブンゴトとしてSDGsや復興、地域の課題を捉えているか  
・自分が今後探究したいことがジブンゴトになっているか
- 論理性 8点満点 ・SDGsと復興、大学での探究が論理的につながっているか  
・課題と解決策が論理的につながっているか
- 具体性 6点満点 ・具体的な論述になっているか
- 体裁等 4点満点 ・レポートとして体裁がとれているか

## ○評価結果

### ●成績評価

2018年度地域の課題I（地域課題版）全履修者の成績の傾向は表1の通りである。全体の94.4%が単位を取得し、B以上の評価となったのは、全体の74.9%であった。

表1. 学部と評価のクロス表

学部		評価						合計	単位取得
		A	B	C	D	F	G		
教養学部	n	102	48	21	11	6	2	190	182
	%	53.7%	25.3%	11.1%	5.8%	3.2%	1.1%	100.0%	95.8%
経営学部	n	26	32	12	14	3	0	87	84
	%	29.9%	36.8%	13.8%	16.1%	3.4%	0.0%	100.0%	96.6%
経済学部	n	67	91	28	12	6	3	207	198
	%	32.4%	44.0%	13.5%	5.8%	2.9%	1.4%	100.0%	95.7%
工学部	n	70	58	22	11	10	8	179	161
	%	39.1%	32.4%	12.3%	6.1%	5.6%	4.5%	100.0%	89.9%
文学部	n	115	70	20	19	8	6	238	224
	%	48.3%	29.4%	8.4%	8.0%	3.4%	2.5%	100.0%	94.1%
法学部	n	104	53	28	20	9	1	215	205
	%	48.4%	24.7%	13.0%	9.3%	4.2%	0.5%	100.0%	95.3%
合計	n	484	352	131	87	42	20	1116	1054
	%	43.4%	31.5%	11.7%	7.8%	3.8%	1.8%	100.0%	94.4%

### ●ディプロマポリシーによるアセスメント評価

ディプロマポリシーによるアセスメント評価の結果を別紙にまとめた。本講座の成果の検討のため、前後の変化についてノンパラメトリック検定を実施し、有意な変化 ( $p < 0.05$ ) が認められた項目は以下の通りである。

2. 知的活動を続けるための基本的技能を身に付けること

- b. 課題解決を求められたとき、複数の情報を組み合わせ、最適な解を考え、説明することができる
- 3. 専攻分野の専門的知識とそれを支える認識や思考の方法を身に付けること
  - a. 自らの専門分野（学部）がどのような社会的事象や課題を取り扱う学問であるか他者に説明することができる
  - b. 自分が行う探究が社会においてどのような価値があるかを具体的に説明できる
- 4. ものごとを広く多様な視点から認識し、考えることができること
  - a. 多様な視点・意見を大切にした行動ができる
  - b. 議論において、自らが表明した意見と異なる他者の意見を説明することができる
- 5. 課題解決のためにさまざまな学習成果を総合的に活用することができること
  - a. 何か不明なこと・困難なことがあった時に何が課題かを整理できる
  - b. 何か課題に直面したとき、根本的な原因を明確化し、論理的に解決策を提案できる

## ○成果と課題

地域の課題Ⅰ（地域課題版）を実践することにより、特に専門的な知識領域と地域・社会のつながりの明確化、ダイバーシティの必要性、課題解決に向けた仮説設定力および課題解決に向けた提案力といった項目が前向きな変化を生むことが認められた。このことは、本講座の中で繰り返し、「課題設定」「課題の明確化」「その課題と自分の探究領域のつながりの整理」を実践していることが影響していると考えられる。また、「よりよく生きる」の項目においては有意な変化は認められなかった。このことは、本講座で社会課題を具体的に解決できるという自己効力感を高めるアプローチが、座学みの授業であったことも含め、不足していたことが原因であると考えられる。

## ○地域の課題Ⅰのこれから

地域の課題Ⅰ（地域課題版）は、地域教育科目唯一の必修授業としての役割を認識し、ディプロマポリシーに基づき、より主体的にかつ学生一人ひとりの将来探究したいことをより後押しできる内容に改善をし続けなければならない。

また、2019年度以降のCOC事業補助期間終了後、このより持続的かつ効果的な授業実施体系づくりを行っていく必要がある。

2019年度は、今回の評価を活かし、授業運営システムの構築を軸とし、より効果的な授業運営につなげていく。

<参考資料：地域の課題Ⅰシラバス>

## 地域の課題Ⅰ（地域課題版）2018年度

### 1) 概略略

科目名称	地域の課題Ⅰ（地域課題版）
テーマ	東日本大震災からの復興過程における地域の課題を理解する
講義内容	「地域の課題」とは、地域の現状を把握し、望ましい未来を具体化したときに生じるギャップである。東北地方においても、人口減少、少子高齢化、グローバル化、気候変動等の事象変化により、様々な「地域の課題」が生まれている。本講義では、地域の課題が最も顕在化された震災復興過程における地域が抱える問題を俯瞰し、「生活の再建」「防災と減災」といった視点を通して、課題化し、解決に向けた解決策を検討する。
達成目標	震災復興過程の地域の課題を自らの関心領域・テーマとの関係性を明確にして、論理的に設定できる。また、特定の地域を設定し、地域課題の仮説を設定し、その仮説に対して自らできるアクションを導き出せる。

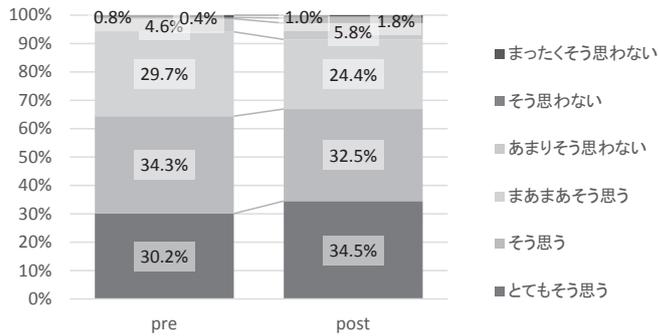
### 2) 講義計画・スケジュール

	枠組	概要	授業外学習（事前）	授業外学習（事後）
第01回	ガイダンス	ガイダンス：この授業の目的と到達目標、学び方、留意事項について説明する。 地域課題版、地域企業版の講義概要を理解し、登録科目の選択決定をする。	「復興」の定義について自分なりに考えてみる	「復興」の定義について自分なりに考えてみる
第02回	コミュニティと生活再建(1)	大船渡市の事例をもとに、地域の現状と課題に関して、複数の視点とその背景を議論する。議論のポイント等をミニッツペーパーとして提出し、解決方策をまとめた資料を次回授業時に提出する。	事例を読み込み、ワークシートに事例に対する気づき、課題等をまとめてくる。	ミニッツペーパーとして、授業内で議論したことを構造化し、提出する。
第03回	コミュニティと生活再建(2)	対象となる事例の根本的な原因に潜む葛藤の要因をそれぞれのステークホルダーの状況から整理し、様々な解がある地域の中で、大切にすべきことをまとめる。	課題の背景を深めるために、対象地域における当時の状況を調べ、まとめる。	ミニッツペーパーとして、授業内で議論したことを構造化し、提出する。
第04回	コミュニティと生活再建(3)	「コミュニティと生活再建」の中で、普遍的な知見を整理する。その視点から自分が探究したいこととこの地域の課題とどのような関係性があるかを整理しまとめる。	他地域の事例と比較し、検証することで、普遍的な知見を整理する。	今回の単元での学びを文章化し、800字程度のミニレポートを作成する。
第05回	防災と減災(1)	新地町の事例をもとに、地域の現状と課題に関して、複数の視点とその背景を議論する。議論のポイント等をミニッツペーパーとして提出し、解決方策をまとめた資料を次回授業時に提出する。	事例を読み込み、ワークシートに事例に対する気づき、課題等をまとめてくる。	ミニッツペーパーとして、授業内で議論したことを構造化し、提出する。
第06回	防災と減災(2)	対象となる事例の根本的な原因に潜む葛藤の要因をそれぞれのステークホルダーの状況から整理し、様々な解がある地域の中で、大切にすべきことをまとめる。	課題の背景を深めるために、対象地域における当時の状況を調べ、まとめる。	ミニッツペーパーとして、授業内で議論したことを構造化し、提出する。
第07回	防災と減災(3)	「防災と減災」の中で、普遍的な知見を整理する。その視点から自分が探究したいこととこの地域の課題とどのような関係性があるかを整理しまとめる。	他地域の事例と比較し、検証することで、普遍的な知見を整理する。	今回の単元での学びを文章化し、800字程度のミニレポートを作成する。
第08回	中間ふりかえり	第1章・第2章のふりかえりを行うとともに、最終レポートの作成に向けて、自分が今後探究したいことの構造化と地域の課題との関連性の整理を行う。	これまでの学びをワークシートをもとに構造化してくる。	最終レポートの作成に向けて、必要な視点を整理する。
第09回	合意形成の意味(1)	名取市の事例をもとに、地域の現状と課題に関して、複数の視点とその背景を議論する。議論のポイント等をミニッツペーパーとして提出し、解決方策をまとめた資料を次回授業時に提出する。	事例を読み込み、ワークシートに事例に対する気づき、課題等をまとめてくる。	ミニッツペーパーとして、授業内で議論したことを構造化し、提出する。
第10回	合意形成の意味(2)	対象となる事例の根本的な原因に潜む葛藤の要因をそれぞれのステークホルダーの状況から整理し、様々な解がある地域の中で、大切にすべきことをまとめる。	課題の背景を深めるために、対象地域における当時の状況を調べ、まとめる。	ミニッツペーパーとして、授業内で議論したことを構造化し、提出する。
第11回	合意形成の意味(3)	「合意形成の意味」の中で、普遍的な知見を整理する。その視点から自分が探究したいこととこの地域の課題とどのような関係性があるかを整理しまとめる。	他地域の事例と比較し、検証することで、普遍的な知見を整理する。	今回の単元での学びを文章化し、800字程度のミニレポートを作成する。
第12回	被災地の未来に向けて(1)	石巻市の事例をもとに、地域の現状と課題に関して、複数の視点とその背景を議論する。議論のポイント等をミニッツペーパーとして提出し、解決方策をまとめた資料を次回授業時に提出する。	事例を読み込み、ワークシートに事例に対する気づき、課題等をまとめてくる。	ミニッツペーパーとして、授業内で議論したことを構造化し、提出する。
第13回	被災地の未来に向けて(2)	対象となる事例の根本的な原因に潜む葛藤の要因をそれぞれのステークホルダーの状況から整理し、様々な解がある地域の中で、大切にすべきことをまとめる。	課題の背景を深めるために、対象地域における当時の状況を調べ、まとめる。	ミニッツペーパーとして、授業内で議論したことを構造化し、提出する。
第14回	被災地の未来に向けて(3)	「被災地の未来に向けて」の中で、普遍的な知見を整理する。その視点から自分が探究したいこととこの地域の課題とどのような関係性があるかを整理しまとめる。	他地域の事例と比較し、検証することで、普遍的な知見を整理する。	今回の単元での学びを文章化し、800字程度のミニレポートを作成する。
第15回	ふりかえり	地域の課題の学修をとおして、地域の課題を解決するための仮説を立て、論理的に検証し、その内容をグループの中で共有し、さらに深める	これまでの学びをワークシートをもとに構造化してくる。	授業内の指示をもとに最終レポートを作成する。

(別紙) 地域の課題 I 2018ディプロマポリシーに対するアセスメント結果

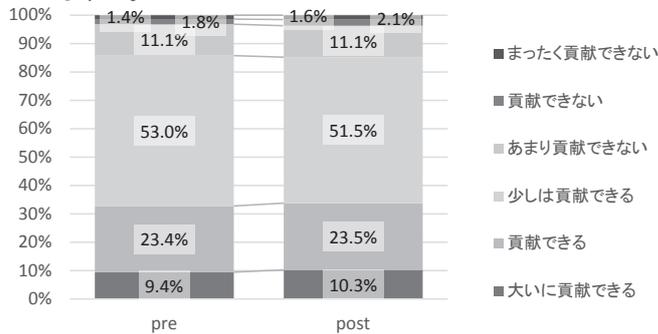
1. 現代をよく生きることについて、キリスト教の教えをふまえた考察ができる。

Q10.他者・地域・社会へ貢献したいと思いますか？



Q10.他者・地域・社会へ貢献したいと思いますか？	pre		post	
	n	%	n	%
とてもそう思う	285	30.2	326	34.5
そう思う	324	34.3	307	32.5
まあまあそう思う	281	29.7	231	24.4
あまりそう思わない	43	4.6	55	5.8
そう思わない	4	0.4	17	1.8
まったくそう思わない	8	0.8	9	1.0
合計	945		945	

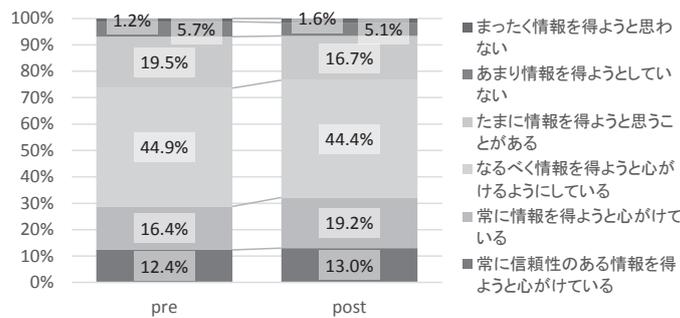
Q11.他者・地域・社会に対して、自分は貢献できると思いますか。



Q11.他者・地域・社会に対して、自分は貢献できると思いますか。	pre		post	
	n	%	n	%
大いに貢献できる	89	9.4	97	10.3
貢献できる	221	23.4	222	23.5
少しは貢献できる	501	53.0	487	51.5
あまり貢献できない	105	11.1	105	11.1
貢献できない	17	1.8	20	2.1
まったく貢献できない	13	1.4	15	1.6
合計	946		946	

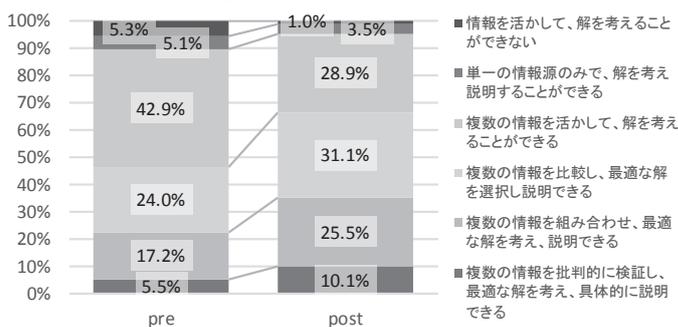
2. 高度な知的活動に必要な汎用的諸技能・能力及び英語力を活用できる

Q2.日常的に社会の事象や探究に関する情報を得ようと心がけていますか？



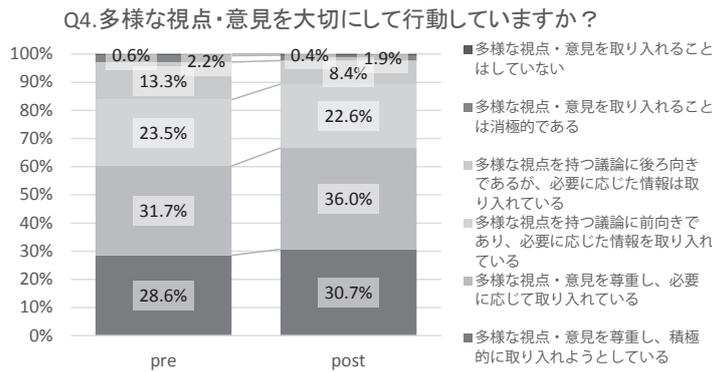
Q2.日常的に社会の事象や探究に関する情報を得ようと心がけていますか？	pre		post	
	n	%	n	%
常に信頼性のある情報を得ようと心がけている	117	12.4	123	13.0
常に情報を得ようと心がけている	155	16.4	181	19.2
なるべく情報を得ようと心がけるようにしている	424	44.9	420	44.4
たまに情報を得ようと思うことがある	184	19.5	158	16.7
あまり情報を得ようとしていない	54	5.7	48	5.1
まったく情報を得ようと思わない	11	1.2	15	1.6
合計	945		945	

Q3.課題の解決を求められたとき、複数の情報を組み合わせ、最適な解を考え、説明することができますか？

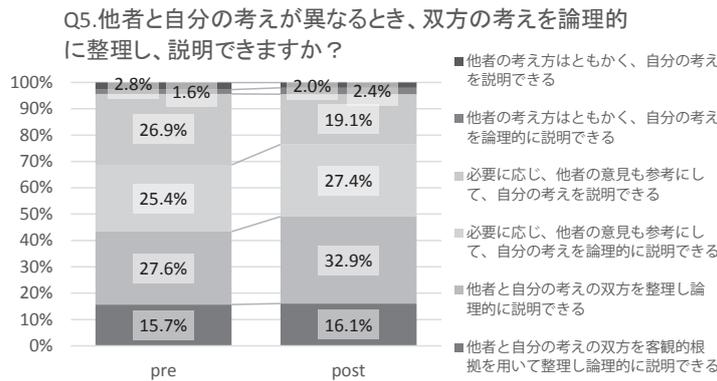


Q3.課題の解決を求められたとき、複数の情報を組み合わせ、最適な解を考え、説明することができますか？	pre		post	
	n	%	n	%
複数の情報を批判的に検証し、最適な解を考え、具体的に説明できる	52	5.5	95	10.1
複数の情報を組み合わせ、最適な解を考え、説明できる	163	17.2	241	25.5
複数の情報を比較し、最適な解を選択し説明できる	227	24.0	294	31.1
複数の情報を活かして、解を考えることができる	405	42.9	273	28.9
単一の情報源のみで、解を考え説明することができる	48	5.1	33	3.5
情報を活かして、解を考えることができない	50	5.3	9	1.0
合計	945		945	

### 3. ものごとを広く多様な視点から認識し、異なる認識・思考方法や価値観に理解を示すことができる。

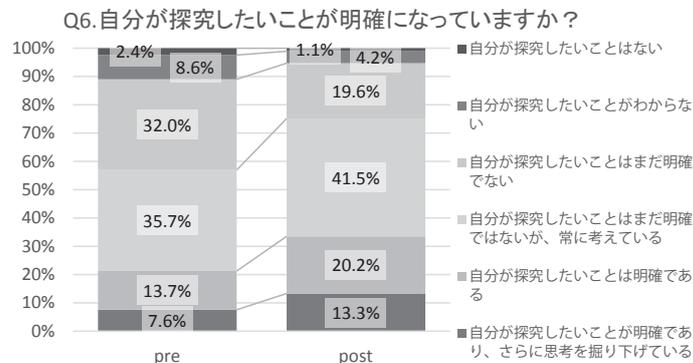


Q4 多様な視点・意見を大切に行動していますか？	pre		post	
	n	%	n	%
多様な視点・意見を尊重し、積極的に取り入れようとしている	270	28.6	290	30.7
多様な視点・意見を尊重し、必要に応じて取り入れている	300	31.7	340	36.0
多様な視点を持つ議論に前向きであり、必要に応じた情報を取り入れている	222	23.5	214	22.6
多様な視点を持つ議論に後ろ向きであるが、必要に応じた情報は取り入れている	126	13.3	79	8.4
多様な視点・意見を取り入れることは消極的である	21	2.2	18	1.9
多様な視点・意見を取り入れることはしていない	6	0.6	4	0.4
合計	945		945	

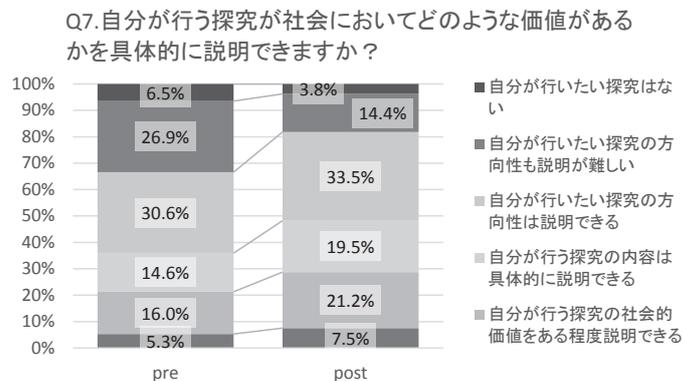


Q5 他者と自分の考えが異なるとき、双方の考えを論理的に整理し、説明できますか？	pre		post	
	n	%	n	%
他者と自分の考えの双方を客観的根拠を用いて整理し論理的に説明できる	148	15.7	152	16.1
他者と自分の考えの双方を整理し論理的に説明できる	261	27.6	311	32.9
必要に応じ、他者の意見も参考にして、自分の考えを論理的に説明できる	240	25.4	259	27.4
必要に応じ、他者の意見も参考にして、自分の考えを説明できる	254	26.9	180	19.1
他者の考え方はともかく、自分の考えを論理的に説明できる	15	1.6	23	2.4
他者の考え方はともかく、自分の考えを説明できる	26	2.8	19	2.0
合計	944		944	

### 4. 専攻分野の専門的知識とそれを支える認識や思考の方法を説明できる。



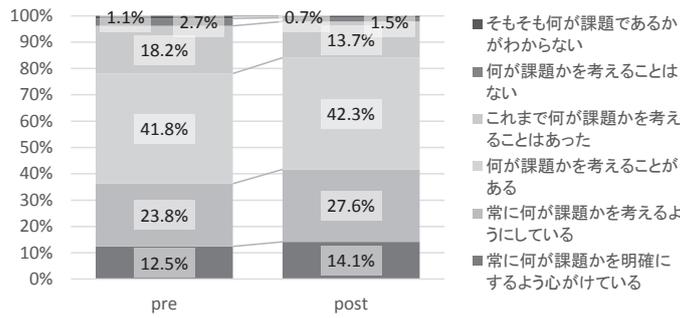
Q6 自分が探究したいことが明確になっていますか？	pre		post	
	n	%	n	%
自分が探究したいことが明確であり、さらに思考を掘り下げている	72	7.6	126	13.3
自分が探究したいことは明確である	129	13.7	191	20.2
自分が探究したいことはまだ明確ではないが、常に考えている	337	35.7	392	41.5
自分が探究したいことはまだ明確でない	302	32.0	185	19.6
自分が探究したいことがわからない	81	8.6	40	4.2
自分が探究したいことはない	23	2.4	10	1.1
合計	944		944	



Q7 自分が行う探究が社会においてどのような価値があるかを具体的に説明できますか？	pre		post	
	n	%	n	%
自分が行いたい探究の社会的価値を論理的に説明することができる	50	5.3	71	7.5
自分が行う探究の社会的価値をある程度説明できる	151	16.0	200	21.2
自分が行う探究の内容は具体的に説明できる	138	14.6	184	19.5
自分が行いたい探究の方向性は説明できる	289	30.6	316	33.5
自分が行いたい探究の方向性も説明が難しい	254	26.9	136	14.4
自分が行いたい探究はない	61	6.5	36	3.8
合計	943		943	

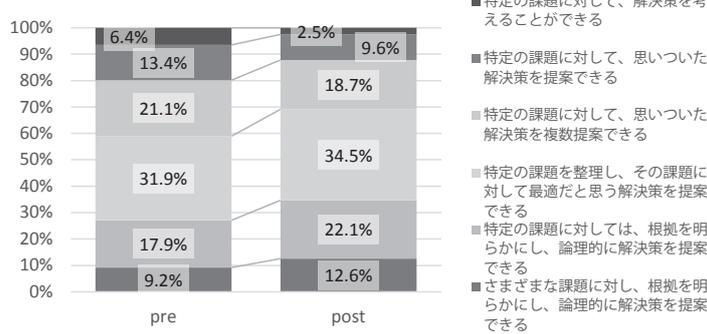
## 5. 課題を発見し、その解決のために学修成果を総合的に活用できる。

Q8.何か不明なこと・困難なことがあった時に何が課題かを整理するようにしていますか？



Q8.何か不明なこと・困難なことがあった時に何が課題かを整理するようにしていますか？	pre		post	
	n	%	n	%
常に何が課題かを明確にするよう心がけている	118	12.5	134	14.1
常に何が課題かを考えるようにしている	225	23.8	261	27.6
何が課題かを考えることがある	396	41.8	401	42.3
これまで何が課題かを考えることはあった	172	18.2	130	13.7
何が課題かを考えることはない	26	2.7	14	1.5
そもそも何が課題であるかがわからない	10	1.1	7	0.7
合計	947		947	

Q9.何か課題に直面したとき、根本的な原因を明確化し、論理的に解決策を提案できますか？



Q9.何か課題に直面したとき、根本的な原因を明確化し、論理的に解決策を提案できますか？	pre		post	
	n	%	n	%
さまざまな課題に対し、根拠を明らかにし、論理的に解決策を提案できる	87	9.2	119	12.6
特定の課題に対しては、根拠を明らかにし、論理的に解決策を提案できる	169	17.9	209	22.1
特定の課題を整理し、その課題に対して最適だと思う解決策を提案できる	302	31.9	326	34.5
特定の課題に対して、思いついた解決策を複数提案できる	200	21.1	177	18.7
特定の課題に対して、思いついた解決策を提案できる	127	13.4	91	9.6
特定の課題に対して、解決策を提案することができる	61	6.4	24	2.5
合計	946		946	

# 多文化共生部門の活動について

共生社会経済学科准教授 石川 真作

# 多文化共生部門の活動について

共生社会経済学科准教授 石川 真作

## ○セミナー「外国につながる子どものサポート」

2018年5月21日に、「外国人の子ども・サポートの会」の田所希衣子さんをお招きして、セミナーが開催された。講演は、①外国人児童生徒の状況、②子どものことばと学ぶ力、外国人の子どもサポートの会のとりくみ、の3つのテーマで行われた。参加者は21名、うち学生20名、外部参加者1名であった。

仙台市、石巻市、登米市などにおいて、両親または親のどちらかが外国人で日本生まれの児童生徒が増え、また、小学校高学年、中学生時の来日も多くなっており、言葉の問題などで学習上の困難を抱える子供たちがいる。また、多くが日本生まれであり「自分は日本人。外国人ではない。」と考えている一方、2つの国を往復したり、複数の国を移動している子供たちもおり、心のケアも必要である。しかし、現行の教育制度は、日本国籍の子どものための教育制度であり、外国籍の子どもは義務教育の対象になっていないこともあって、親の方針や、出会った人、受けられた教育によって将来が大きく変わってしまうのが実情である。そうした状況に対して、子供たちの学習をサポートすることで、将来の可能性を開いていく活動をしているのが、「外国人の子供サポートの会」である。平日放課後、土曜・日曜に学校外で日本語・教科学習の学習サポートを行っており、1週間に1回、「サポーター」と生徒の1対1での学習が、活動の中心である。

一言に言語能力と言っても、日常生活で身につける生活言語能力と学習活動で獲得される学習言語能力は異なっており、認知的要求の高い学習言語能力は自然に獲得できるものではないという。学習言語は学齢期に長期間かけて身につけるものであるが、外国人の子供は同時期に非常に複雑な言語状況に置かれる。小学校低学年で来日した生徒は、母語の習得途中で日本語に触れるため、母語を忘れやすい。中学生で来日した生徒は、母語で知識を積み上げているため、思考力が育っており、日本語を整理しながら学ぶことができるが、漢字学習が大きなハードルとなる。家族の中に二つの言語がある場合や、家族の内と外の言語がちがう場合は、言語と言語の間のバランスが難しく、場合によっては親とコミュニケーションがとれなくなることもある。また、子どもは使わないとすぐに忘れるため、移動を繰り返すと、学習言語能力はもとより、生活言語もままならないことになりかねないという。そうしたことから、高校進学がひとつの壁となるため、こうした状況に置かれた子供たちの教育をサポートする必要があることが強調された。

また、宮城県には、小・中学校へのサポーター派遣のシステムがあり、学校長からの申請で派遣されること、仙台市教育委員会や宮城県国際化協会からもサポートがあること、中学で来日した子供には配慮申請ができることなど、公的な取り組みも紹介された。

このような仕組みがあるが、人手が足りないため、学生ボランティアの参加が期待されている。そのことを受けて、後日、当日参加した学生たちが、「サポートの会」と仙台市観光国際協会、宮城県国際化協会などが行っている「日本語を母語としない子どもと親のための進路ガイダンス」、「日本語を母語としない小中学生のための夏休み教室」をボランティアとしてお手伝いした。また、「サポートの会」の「サポーター」に参加している学生もいる。しかしながら、これらは一時的かつ個人的な意志によるものであり、このような取り組みを地域の課題と認識し、組織的に関与する仕組みづくり

が必要であると感じた。

### ○講演会「ルワンダ大虐殺から四半世紀—2020年パラリンピックを目指して—」

2018年12月6日に、ルワンダで活動するNPO「ムリンディ・ジャパン・ワンラブ・プロジェクト」の共同代表、ルダシングワ・ガテラ・エマニュエル氏、ルダシングワ・真美氏による講演が行われた。参加者は延べ100名であった。

「ムリンディ・ジャパン・ワンラブ・プロジェクト」は、1994年に発生したルワンダ大虐殺や、その他様々な理由で手足を失う人が多いルワンダにおいて、義肢の提供を行っているNPOである。今年度も昨年度同様に、活動報告会という形で活動の紹介を中心とした講演が行われた。義肢提供の活動や職業訓練の取り組みに加え、ワンラブ・チームがルワンダ代表として2020年の東京パラリンピックへの出場を目指していることが報告された。

学生の感想として多く見られたのは、ルワンダという国を知らなかった、あるいは、ルワンダ虐殺を知らなかったが、このような悲惨な歴史があったことを知って衝撃を受けた、また、世界ではそのような厳しい現実があるということを知った、などといった内容であった。また、ルワンダ虐殺は授業で知っていたが、実際に話を聞いて認識を新たにしたり、という主旨の内容も多く見られた。これらの感想からは、当事者などを外部講師として招いてお話を伺うことも、アクティブ・ラーニングとしての効果が大いながうかがえる。授業外でそのような取り組みをフレキシブルに行える枠組み構築が必要であると考えられる。

### ○難民を知るワークショップ

2018年12月15日に、認定NPO法人IVYとの共催で、「難民を知るワークショップ」をおこなった。IVYは山形市に本拠を置く認定NPO法人であり、カンボジア、フィリピン、東ティモール、イラクなどで難民支援の活動を行っている。また、東北6県担当の外務省NGO相談員として、NGOの設立や管理、運営、国際協力活動について、アドバイスや啓蒙活動を行っている。この「難民を知るワークショップ」も、外務省NGO相談員の出張サービスの制度を併用して行われた。

昨年度まで行ってきたワークショップはシリア難民がテーマであったが、今年度は、「ロヒンギャ難民編」として、アジア地域で発生している深刻な難民問題であるロヒンギャ難民の状況を知るための新たなプログラムが用意された。IVYからスタッフが来学し、参加者は21名、うち本学学生が18名、一般参加者が3名であった。本年度は3回目の開催にして初めて関係者以外の参加応募があり、この取り組みが徐々に知られるようになってきていることが感じられた。

内容は基本的にはシリア難民と同様に難民発生、国外脱出といった経緯を示す写真を、時系列に沿って並べることで、状況を理解し、家族関係などの設定を書いた紙に基づいて子供から老人までの家族の役割を決め、誰を優先しどのように避難するかを決め、難民申請用紙を記入し認定を受けて難民キャンプに移動、そして、難民キャンプでの生活上の問題を考え、最終的にキャンプにとどまるか、帰国するか、第3国定住を望むかの決断をするといった流れで、ロールプレイを行った。これらの過程で、難民が何度も厳しい選択を迫られること、キャンプの生活の過酷さなどを理解していった。

例年痛感することであるが、「難民条約」の内容などは講義で扱われていても、その意味するところが何であるのか、このようなシミュレーションを経て初めて理解する学生も多く見られる。個々の



写真1 難民を知るワークショップの様子

授業の枠組みを超えた多角的なアクティブ・ラーニングの取り組みが幅広く行われることによる教育効果は非常に大きいと考えられる。

### ○地域の定住外国人支援

これらの主催行事の他に、部門メンバーの教員による地域の外国人住民への支援の取り組みが幅広く行われている。

「外国につながる子供のサポート」において報告したとおり、「進学セミナー」「夏休み教室」など仙台観光国際協会および宮城県国際化協会を中心に行われている外国人児童生徒の学習支援の催しには、石川および教養学部の佐藤真紀講師のゼミの学生が例年ボランティアとして参加している。

佐藤講師は、「子どもLAMP仙台」と称して、外国につながる子どもたちの母語および日本語と、教科学習の支援活動を行っている。佐藤ゼミの学生を中心に、有志の学生と交換留学生が参加し、コラトリエ・リエゾンにおいて週1回、金曜日の午後に近隣の子どもたちを対象に学習支援を行っている。また、佐藤講師が顧問を務める交流サークル「HANDS」による成人向けの日本語学習支援の活動も、同じくコラトリエ・リエゾンにて火曜日、金曜日の週2回行われている。

さらに、佐藤ゼミと、同じく教養学部の菅原真枝准教授のゼミの学生たちが合同で、「みんぴ」と称し、名取市の介護施設で働くインドネシアからのEPA介護福祉士候補生の日本語学習支援を行っている。当該施設は、候補生たちが日本語を学習する時間を設けているが、日本語を教える人材が不足しているため、学生たちがシフトを組んで週2、3回現地に通って補助に当たっている。

また、同じく成人向けの支援活動として、石川のゼミおよび「フィールドワーク」を履修している学生が、塩竈市の企業で技能実習を行っているインドネシア人、ベトナム人等との交流と日本語学習支援を今年度から本格的に行うようになった。また、白石市の技能実習監理団体の研修における学習支援も試験的に行い、来年度から継続的に行っていく予定である。

これらの取り組みは、COC事業における社会貢献の一環としての「定住外国人住民に対する支援」に挙げられた内容と合致している。しかしながら、実際には個々の教員が担当する学部学科の科目教育の延長線上で行われたものであり、事業として体系化できていたわけでは必ずしもない。2019年4

月からは新たな在留資格が設けられ本格的な外国人労働者の受け入れが始まる。特に人手不足が深刻な被災地においては、すでに急激な外国人人口の増加が見られるが、今後はさらなる加速が予想される。現場では、大学に対してこの分野での知的人的な貢献を求める声が数多く聞かれている。地域社会への貢献として全学的に取り組む体制づくりが必要であると感じる。



写真2 技能実習生との日本語教室

コミュニティソーシャルワーカー (CSW)  
スキルアッププログラム実施状況報告  
～受講生10名の声より～

東北学院大学学長室地域共生推進課

# コミュニティソーシャルワーカー（CSW）スキルアッププログラム 実施状況報告～受講生10名の声より～

東北学院大学学長室地域共生推進課

## 1. コミュニティソーシャルワーカー（CSW）スキルアッププログラム実施状況報告

平成27年度に文部科学省「職業実践力育成プログラム」に採択され開始した「コミュニティソーシャルワーカー（CSW）スキルアッププログラム」は、3年目のプログラムとして平成30年度も開講し、平成31年3月16日の修了式をもって1年間のプログラムの全てが終了した。

平成30年度は10名の受講生が履修し、コミュニティソーシャルワーカー（以下、「CSW」）に求められる知識・技能を学び、授業内のグループワーク等ではそれぞれの立場から活発な意見交換を行い、10名全員がプログラムを修了した。

ここでは、10名それぞれから寄稿いただいた文章を「受講生の声」として掲載し、実施状況の報告としたい。

それぞれの「受講生の声」からみえるのは、CSWとして地域とつながりを持ち、様々な視点を交えながら支援・活動を行っていくことの重要性和、本プログラム受講によるスキルアップの実感である。

「本プログラムで学んだことを地域に還元していきたい。」「臨機応変に対応できるフットワークの軽い職員を目指したい。」「福祉施設発のコミュニティソーシャルワークを実践したい。」等、本プログラムで学んだ知識・技能を活用しながら、実践活動へ臨んでいきたいという思いが記載されている。

また、本プログラムはCSWとしての基礎から応用までを網羅しており、さらに実践に活用できるものであると多くの受講生が評価している。

地域を支えるCSWは、今後ますます重要となってくるものであり、そのスキルアップ・育成に取り組んでいく必要がある。

地域とともに歩み、地域に根差した大学の社会貢献の取り組みのひとつとして、本プログラムを継続開講し、地域に貢献する人材の育成を今後もすすめていきたい。

## 2. 受講生の声

あいはら きみお  
○相原 公男 さん

**コミュニティソーシャルワーカー（CSW）スキルアッププログラムを受講された理由を教えてください。**

私は、平成29年3月末で退職するあたり、退職者へのお知らせの中にCSWスキルアッププログラムの受講生募集を目にしました。講座の内容を見ると社会福祉、地域コミュニティ及び災害復興復旧に関する講座ということで、私のこれまで係わってきた仕事と関連があることから興味があり、応募しました。



**実際の授業を履修されていかがでしたか？**

授業は密度が濃く、特に90分1コマの1日4コマ授業は、能力的にも体力的にも厳しいものがありましたが、若い受講生の皆様に交えていただきつつ、講師先生方のお話を聞くことができたことは大変有意義でした。

私は、これまで社会福祉や災害復旧は行政の一端であると思っていましたが、現代の社会状況は激動しており、住民サービスの質や対象範囲の増大及び厳しい予算的制約の中では事実上困難で、住民



の様々な係わりを得なければ成立し得ないことを、講師先生方から詳細なデータに基づき講義を受けたことで、これまで自分の中にあった漠然とした課題について納得することが出来ました。

しかしながら、まだ私の中で講義の学術的理論と現場対応との乖離があるのも事実で、これからも現実を直視しながら、さらに知識を重ねていくことの必要性を痛感しています。

**学んだことをどのように活かされていますか？**

今後は地域社会の一員としてこの講座を受講して得た知識を地域に還元できるよう、地域との関わりを持ちながら今回学んだ様々な知識や手法を活用し貢献して参りたいと思います。

また、今回の受講を縁に同期の皆様や先輩諸兄の皆様方との交流を深めるとともに、皆様方のご活躍を期待していきたいと思います。

最後に、退職者の中には私同様CSWの役割や活動状況を知らない方もいると思われるので、機会があればCSWスキルアッププログラム受講を勧め、多くの人々にこの講座のすばらしさを伝えて参りたいと思います。

## コミュニティソーシャルワーカー（CSW）スキルアッププログラムを受講された理由を教えてください。

CSWとしてこの先、多様化・複雑化する地域課題に対応するには、物事を複眼的に捉える柔軟性が必要であり、そのために幅広い知識や実践的な援助技術を習得する必要があると感じていました。その点において本プログラムは、多様な領域から学びを得ることができ、自身のスキルアップにつながると考え受講しました。



## 実際の授業を履修されていかがでしたか？

制度や理論、対人援助技術、データ分析、他都市の事例などバラエティに富んだ内容で講座が設けられており、自身のスキルアップを図るには最適な環境であると感じています。講師の先生方のお話は大変興味深く、また、グループワークにおいても、他職種間で意見交換を行うことで様々な気づきが得られ、受講する度に新しい発見が得られていたように思います。

また、既に関わりの深い領域の講義においても改めて自身の対応を振り返る良い機会となりました。通年プログラムということで長丁場ではありますが、熱心な受講生との出会いにも恵まれ、お互い刺激を受けながら充実した時間を過ごすことが出来ました。



## 学んだことをどのように活かされていますか？

障害種別ごとの特性や基本的なコミュニケーションスキルを学べたことにより、地域の方と接する際の参考としながら対応することができています。また、ファシリテーショングラフィックスを履修し、日々の相談記録の取り方を工夫するなど業務の取り組み方への意識改革にもつながりました。今後も日々の様々な場面の中で、本プログラムで学んだことを活かしていきたいと思っています。



### コミュニティソーシャルワーカー（CSW）スキルアッププログラムを受講された理由を教えてください。

私の所属する法人は、地域福祉に取り組む法人であり、CSWとしての知識やスキルを身に付けることが必要だと感じていました。このプログラムを受講することで、より多くの視点で地域の課題を捉えることができ、様々な団体と連携して地域課題に取り組んでいけるようになると考えたからです。

### 実際の授業を履修されていかがでしたか？

授業時間は90分で、内容もソーシャルワークの基本的な考え方から、実践的・専門的なものまで幅広い内容のプログラムになっており、毎回楽しみに授業を受けています。講義形式だけでなく、グループワークやロールプレイングなどもあるので、他の人の意見も聞くことができ、とてもいい刺激になっています。科目もCSWとして活動するために必要な内容が網羅されており、CSWとは何か、地域の課題を解決するためにはどうしたらいいのかについて、より深く考えながら学んでいます。

授業を受けることで、日々の業務の振り返りや法人の事業を客観的に捉えることもでき、また、CSWにとって必要な考え方や新たな視点を得ることができるので、とても学びがいのあるプログラムだと感じました。



### 学んだことをどのように活かされていますか？

法人のある地域では、福祉団体や町内会、社会福祉協議会などの福祉ネットワークがあり、当法人も事務局として加わっています。授業を受けたことで、会議での情報交換や講演会の開催など、いざという時のために様々な団体とつながっていることの大切さを改めて認識しました。

## コミュニティソーシャルワーカー (CSW) スキルアッププログラムを受講された理由を教えてください。

20年近く社会福祉の仕事に携わっていながらも、日々の業務の中で知識不足、能力不足に悩まされることがありました。このプログラムを通して、様々な課題を抱える社会福祉の“今”を学び、地域福祉活動を支援していくための技術を習得できることを期待して受講しました。



## 実際の授業を履修されていかがでしたか？

コミュニティソーシャルワークの基本や、地域福祉の現状・課題等を集中的に学べることはもちろん、調査・分析、傾聴やファシリテーション等といった実践に役立つ授業が豊富に用意されており、飽きることがありません。当初選択していなかった授業も受けさせていただきました。さらに高齢者から障害者、子育て、生活困窮者など分野別の授業も数多くあり、それぞれの知識を深めることもできました。



またグループワークで他の受講生と様々な意見を交わすことで、新たな発見をしたり、自分の考えを整理できたりと、授業の中から今後の業務に活用できるヒントを数多くいただきました。

1年間を通して、たいへん良い刺激となりました。講師の皆様、運営スタッフの皆様、共に学んだ受講生の皆様に心から感謝です！

## 学んだことをどのように活かされていますか？

大学等で福祉を学ぶ機会がないまま今に至っていましたが、このプログラムを受講したことで、自分自身にとっての基盤が築けたように思います。今は地域福祉の現場から少々離れた業務をしていますが、ここで学び得たことを活かして、今後、社会福祉協議会がどうあるべきか考えていきたいと思っています。



### コミュニティソーシャルワーカー (CSW) スキルアッププログラムを受講された理由を教えてください。

私は転職組で福祉分野の職務経験がなく、大学などでも福祉の勉強をしてきませんでした。様々な地域福祉活動者や生活困窮者等と関わっていく中で、上司や先輩職員に相談しながら業務を行ってきましたが、どこかに「この対応で良いのだろうか…」という不安を感じていました。

そんなときに、多彩なプログラムで基礎から応用まで学ぶことができるプログラムがあることを知り受講しました。

### 実際の授業を履修されていかがでしたか？

当初考えていた以上に幅広いプログラム内容になっており驚きました。ソーシャルワークの基本といったことから、障害や、災害等の基本的知識から実践的立場での講義まで、CSWとして地域と関わっていくうえで必要なことを網羅していると感じました。特にファシリテーションの講義だけでも、様々な視点から複数の講義が用意されていて、大変勉強になりました。

受講生も社協職員だけではなく、様々な立場の方が受講されており、それぞれの観点からの意見が交わされることが良い刺激となりました。



### 学んだことをどのように活かされていますか？

いままではただ一生懸命に対応しようとするばかりでしたが、“この対応の仕方で良いだろうか”と客観的視点を持って複数の選択肢を想像し、検討するようになってきたと思います。このプログラムを受講することで得られたCSWの核というべきものを大切にし、臨機応変に対応できるフットワークの軽い職員を目指して日々精進していきたいと思っています。

○<sup>さとう</sup>佐藤 <sup>あかね</sup>朱子 さん

**コミュニティソーシャルワーカー（CSW）スキルアッププログラムを受講された理由を教えてください。**

今年、社会福祉士試験に合格しました。保険薬局で事務職をしており、資格取得後の学びの場を探していたこと、また、資格取得の際、実習先が社会福祉協議会で、地域での「つながり」が大切であると感じ、地域福祉について学んでみたいという思いから受講しました。



**実際の授業を履修されていかがでしたか？**

社会福祉協議会の職員向け講座という印象で、最初は場違いの受講ではないかとの不安もありました。基礎知識が多少あるとはいえ、講座によっては理解に時間を要することもあり、グループワークでは言葉につまることも多々ありました。



しかし、地域での実践的な取り組み等が事例を通して学べることはもちろん、学問的な講座や、協働、ファシリテーションの講座等は仕事の仕方にも通じると私には思え、授業に参加し様々な知識に触れること、新たな視点を得ることが私には楽しく、面白さを感じました。また、地域には「つながること」の出来る人や場所がたくさんあることに気づかされました。

**学んだことをどのように活かされていますか？**

授業は、職場の会議や運営における自己の振り返りとなり、問題と課題を意識すること、考えを書いて整理することで仕事のやり方を見直しています。また、「つながり」への可能性を感じ、処方せんを介さずとも、誰かの地域生活に寄りそえる、そんな場所に薬局がなれるよう、まずは地域にでる一歩として出前講座等の企画を準備しています。

○ (社福) 岩沼市社会福祉協議会 <sup>たけだ</sup>武田 <sup>ともこ</sup>智子 さん

### コミュニティソーシャルワーカー (CSW) スキルアッププログラムを受講された理由を教えてください。

社会福祉協議会に所属しています。生活に困りごとを抱えた方からの相談を受ける中で、ひとりでは問題を解決できず孤立化したり、抱える問題が複雑化していったケースに直面することがあり、地域の支え合いの仕組みづくりや個別課題の解決に対応する力を身に着けたいと感じていました。様々な視点から地域を考え、地域づくりを担うCSWとは何か学びたいと思い今回プログラムを受講させていただきました。



### 実際の授業を履修されていかがでしたか？

福祉政策の動向を踏まえた地域福祉の基礎から実務的な地域診断の方法論、事例研究まで様々なプログラムが用意され、普段の業務に照らし合わせながら基礎や実践を学ぶことができました。特



にCSRやファンドレイジングなど地域活動を支える新しい手段を学べたことはとても新鮮で、すぐに実践に取り入れたいと思う内容でした。講義やグループワークを通して一緒に学んだ3期生とは、慣れない課題に苦労しながらも、多種多様な立場からの意見を聞くことができ、大変参考になる意見が多かったです。

### 学んだことをどのように活かされていますか？

CSWについての学びを通して、地域に暮らす方の「こんな活動がしたい」「こんな課題を解決したい」という声をしっかり拾い、関係する社会資源とつながりをもって一つ一つの思いを形にしたいと思っています。また、今回のプログラムの実践として把握した地域の社会資源はもちろん、各講師の方々、また地域福祉への思いを持ち意見を交換した3期生とはこれからもつながりを持ち続けたいと思います。

○ (社福) 大河原町社会福祉協議会 <sup>なかむら</sup> 中村 <sup>けんしん</sup> 顕伸 さん

### コミュニティソーシャルワーカー (CSW) スキルアッププログラムを受講された理由を教えてください。

局内で生活支援体制整備事業に関わるようになり、地域での助け合い、支え合いを学ぶようになりました。また子ども食堂の運営に携わり、老若男女すべての方々への福祉や地域共生社会について考えるようになりました。CSWがそのキーパーソンであると思い、今回受講させていただきました。



### 実際の授業を履修されていかがでしたか？

基礎科目では最近の動向や政策も踏まえて今の社会情勢に合った講義になっており、さらに地域福祉活動の策定方法までプログラムに入っているのもそのまま実務に活かせるものでした。また協働する際の様々な技法や活動者の方から直接支援活動について学ぶことができ、即活用できるプログラムだと感じました。



受講生も様々な職種の方がおり、それぞれの得意不得意分野を補うように情報交換ができ、どのような人でも参加できるプログラムだと思います。

### 学んだことをどのように活かされていますか？

子ども食堂の運営で子どもに対するアプローチやボランティア等の組織作りに大変役立っております。また生活支援体制整備事業の協議体運営にもファシリテーションのテクニック等参考になります。

何より局内でこのプログラムの内容を共有することにより、局全体のスキルアップになったと感じています。



### コミュニティソーシャルワーカー (CSW) スキルアッププログラムを受講された理由を教えてください。

デイサービスの相談員として働いておりますが、以前の相談業務では「その分野の知識」で支援が可能であったものの、近年になりニーズの多様性、複雑化がみられたことで、現在の知識では十分な相談支援を行うことができないと感じ、新たな知識を習得するために本プログラムを受講させていただきました。

### 実際の授業を履修されていかがでしたか？

社会福祉士を取得してからというもの、知識の更新をせずにはいたところではありますが、本プログラムは基礎的な授業はもちろんのこと、コミュニティソーシャルワークを実践していく上で必要な科目が贅沢に盛り込まれており、現在の仕事に応用することができるとともに、新たに展開していく事業に関してもとても有効な知識として活用することができます。

また、同じ視点を持った仲間とつながることができるとともに、教育および実践の第一線で活躍されている講師陣がいることで、学んだ事を実践していくためのプロセスを学ぶ事ができます。

そして、フィードバック体制も整えられているおり、実践に対する相談ができる点は、現職に従事する者として、とてもメリットとなる講座と感じております。



### 学んだことをどのように活かされていますか？

現在の仕事において、支援の幅が広がると感じております。

また、老人福祉施設としての展開についても本プログラムはとても有意義であったため、「共生」のコンセプトのもと、「ソーシャルワーカー」として、そして「コミュニティソーシャルワーカー」として同僚や地域と協働のもと、福祉施設発のコミュニティソーシャルワークを展開していければと思っております。



**コミュニティソーシャルワーカー（CSW）スキルアッププログラムを受講された理由を教えてください。**

現在、地域づくりを支援する仕事を行っています。私が担当している地区は、市内でも高齢化率が高く、これからの地域づくりを進めるうえでも無視することは出来なくなってきています。また、行政も地域福祉に力を入れ始めており、地区を中心とした地域福祉のあり方についても考えなければならぬと感じていました。様々な地域の課題に対しどのように向き合い課題を解決していくのか、その取り組み方法や住民への対応などについて学ぶことが出来ればと思いい受講しました。

### **実際の授業を履修されていかがでしたか？**

6月ごろまでは、1日6時間の講義に慣れず、3月まで続けることができるかとても不安でした。しかし、社会の現状や課題などについて、毎回多岐にわたる専門の先生方の講義や他の受講生との意見交換などを行ううちに受講への不安は吹き飛び、自分の視野がいかに狭かったかを痛感するとともに、学ぶ楽しさや大切さに気づく有意義な時間になっていました。



### **学んだことをどのように活かされていますか？**

全ての講座は現在の社会の課題に対応できる内容で、遅かれ早かれ実践に活かせると思います。私が担当している地区でワークショップを開催することになり、講座で学んだ「ファシリテーションの実際とワークショップ運営Ⅰ・Ⅱ」「ファシリテーショングラフィックス」や「協働の手法」などは、すぐに実践に活かすことが出来ました。また、事業企画を行う際も、これまで自分に無かった視点から考え、講義で得られた知識を活かし、これまでとは異なる事業を展開していきたいと考えています。

## 五年間の事業実績

項目		平成26年度進捗状況			
教育	シラバスにおいて地域に関する学習をおこなうことを明示している授業数	No.	対象学部・学科	科目名	概要
・地域教育科目 0科目 ・教養及び専門科目 36科目		1	全学部共通 ※文学部英文学科、 総合人文学科を除く	東北地域論	教養教育科目/2年次/半期/2単位
		2	経済学部全学科 法学部法律学科 工学部全学科	震災と復興	教養教育科目/1年次/半期/2単位
		3	文学部・教養学部 全学科共通	地域構想論	社会教育主事に関する科目/2年次/半期/2単位
		4	文学部・教養学部 全学科共通	地域福祉論	社会教育主事に関する科目/2年次/半期/2単位
		5	文学部・教養学部 全学科共通	地域スポーツ論	社会教育主事に関する科目/3年次/半期/2単位
		6	文学部・教養学部 全学科共通	地域教育論	社会教育主事に関する科目/3年次/半期/2単位
		7	文学部・教養学部 全学科共通	地域政策論	社会教育主事に関する科目/3年次/半期/2単位
		8	文学部・教養学部 全学科共通	地域文化論	社会教育主事に関する科目/3年次/半期/2単位
		9	文学部・教養学部 全学科共通	地域社会論	社会教育主事に関する科目/3年次/半期/2単位
		10	経済学部 全学科共通	東北経済論Ⅰ	専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		11	経済学部 全学科共通	東北経済論Ⅱ	専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		12	経済学部 全学科共通	地域経済論	専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		13	経済学部 経済学科	経済学特殊講義Ⅰ	専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		14	経済学部 経済学科	経済学特殊講義Ⅱ	専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		15	経済学部 経済学科	経済学特殊講義Ⅲ	専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		16	経済学部 経済学科	地域経済史	・専門教育科目/3年次開講/通年/4単位
		17	経済学部 共生社会経済学科	地域福祉論Ⅰ	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		18	経済学部 共生社会経済学科	地域福祉論Ⅱ	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		19	経済学部 共生社会経済学科	地方財政論	・専門教育科目/3年次開講/通年/4単位
		20	経済学部 共生社会経済学科	フィールドワーク A	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		21	経済学部 共生社会経済学科	フィールドワーク B	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		22	経済学部 共生社会経済学科	フィールドワーク C	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		23	経済学部 共生社会経済学科	フィールドワーク D	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		24	経済学部 共生社会経済学科	フィールドワーク E	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		25	経済学部 共生社会経済学科	フィールドワーク F	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		26	経営学部 経営学科	総合講座Ⅰ	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位/
		27	経営学部 経営学科	総合講座Ⅱ	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位/
		28	経営学部 経営学科	総合講座Ⅲ	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位/
		29	経営学部 経営学科	総合講座Ⅳ	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位/
		30	教養学部 全学科共通	地域構想学演習A	・学部共通科目/3年次開講/半期/1単位/選択 必修

項目		平成26年度進捗状況			
		31	教養学部 全学科共通	地域構想学演習B ・学部共通科目/3年次開講/半期/1単位/選択必修	
		32	教養学部 地域構想学科	地域情報解析 ・専門教育科目/2年次開講/半期/2単位	
		33	教養学部 地域構想学科	地域防災科学 ・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位	
		34	教養学部 地域構想学科	地域構想学基礎実習 ・専門教育科目/1年次開講/半期/2単位/必修	
		35	教養学部 地域構想学科	地誌学要説 ・専門教育科目/1年次開講/半期/2単位	
		36	教養学部 地域構想学科	地域経済学 ・専門教育科目/2年次開講/半期/2単位	
教育	アクティブラーニング型授業を行う専任教員数	No.	学部	学科	氏名
		1	経済学部	経済学科	千葉 昭彦
		2	経済学部	共生社会経済学科	郭 基煥
		3	経済学部	共生社会経済学科	野崎 明
		4	経済学部	共生社会経済学科	熊沢 由美
		5	経済学部	共生社会経済学科	黒坂 愛衣
		6	経済学部	共生社会経済学科	小宮 友根
		7	経済学部	共生社会経済学科	齊藤 康則
		8	経営学部	経営学科	折橋 伸哉
		9	経営学部	経営学科	村山 貴俊
		10	経営学部	経営学科	松村 尚彦
		11	経営学部	経営学科	松岡 孝介
		12	経営学部	経営学科	矢口 義教
		13	工学部	環境建設工学科	飛田 善雄
		14	工学部	環境建設工学科	吉田 望
		15	教養学部	地域構想学科	金菱 清
		16	教養学部	地域構想学科	高野 岳彦
		17	教養学部	地域構想学科	平吹 喜彦
		18	教養学部	地域構想学科	増子 正
		19	教養学部	地域構想学科	松原 悟
		20	教養学部	地域構想学科	松本 秀明
		21	教養学部	地域構想学科	宮城 豊彦
		22	教養学部	地域構想学科	和田 正春
		23	教養学部	地域構想学科	天野 和彦
		24	教養学部	地域構想学科	植田今日子
	FD・SD推進	平成26年度FD研修会「成績評価とアクティブラーニング」平成26年11月27日(木) 参加者：約127名(本学教員102名、他大学教員約25名)			
		平成26年度第1回地(知)の拠点整備事業に係るFD研修会 平成27年2月24日(火) 参加者：30名(本学教員30名)			
		平成26年度第2回地(知)の拠点整備事業に係るFD研修会 平成27年3月12日(木) 参加者：30名(本学教員30名)			
研究	地域コーディネーター(CSW等)に関する研究 担当教員： 阿部 重樹 松崎 光弘 渡邊 一馬 小泉 美彩紀	第1回地域コーディネーター養成プログラム開発研究会 平成27年3月26日(木) 先駆者による事例紹介：本間照雄氏、真壁さおり氏、押切真千亜氏 養成プログラム骨子紹介：松崎光弘 大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/150324-2.html			
		大学地域連携・アクティブラーニングコーディネーター養成プログラム(4回開催) 平成26年9月20日(土) 平成26年10月25日(土) 平成26年12月26日(金) 平成27年1月24日(土)			
研究	多文化共生社会の推進 担当教員： 郭 基煥 小宮 友根 七海 雅人 黒坂 愛衣	「多文化共生社会の行方—ヘイトスピーチ問題の背景・影響・実践的解決—」 平成27年3月21日(土)13時30分～ 発題者/討論参加者：鄭暎恵氏、石橋英昭氏、和泉奈緒氏、明戸隆浩氏、金明秀氏、郭基煥、佐藤信行氏 大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/150225-5.html			
研究	その他、市民参加型の地域課題解決プログラム				

項目		平成26年度進捗状況
社会 貢献	地域志向系の公開講座 及びセミナーの開講数	「震災と文学」の開催：全10回（前期5回、後期5回） 講 師：山折哲雄、赤坂憲雄、山形孝夫、小森陽一、東雅夫、熊谷達也、星亮一、佐伯一麦、池澤夏樹、和合亮一 参 加 者：650名（後期5回） 大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/oc2014sp-02.html 大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/oc2014au-05.html
		東北学院大学『地（知）の拠点整備事業』キックオフシンポジウム・第3回東北域学シンポジウム ～東北学院大学が目指す地域における大学の役割～ 平成27年2月14日（土）13時30分～ 講 師：合田隆史氏、菊地健次郎氏、藤沢烈氏、平賀ノブ氏、金ヶ崎政伸氏、和田正春、松崎光弘、渡邊一馬 参 加 者：80名 地域共生推進機構HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/iprc/news/199.html
		「災害公営住宅への関わりを再考するー地域・福祉・保健の観点から」 平成27年3月10日（火）10時～ 講 師：佐藤和代氏、菅原恭子氏、牛坂勝氏、齊藤康則（コーディネーター） 参 加 者：70名 大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/150226-1.html
社会 貢献	市民活動への参加を希望する方を対象とした講座開講数	「減災市民会議2015」 平成27年3月19日（木） 参 加 者：25名 大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/150331-3.html
社会 貢献	多賀城高等学校に関連した勉強会	説明会 平成26年10月25日（土） 特別講演：「新たな学びに向けて～災害科学の魅力～」 教養学部地域構想学科和田正春 参 加 者：70名 多賀城高等学校HP：http://www.tagajo-hs.myswan.ne.jp/esd_bousai_past.html
その他	地域共生推進機構会議	第1回 平成26年6月16日（月） 第2回 平成26年12月22日（月） 第3回 平成27年1月14日（水）

項目		平成27年度進捗状況			
教育	シラバスにおいて地域に関する学習をおこなうことを明示している授業数	No.	対象学部・学科	科目名	概要
・地域教育科目 1科目 ・教養及び専門科目 39科目		1	全学部共通 ※文学部英文学科、 総合人文学科を除く	東北地域論	・教養教育科目/2年次/半期/2単位
		2	全学部共通 ※経営学部を除く	震災と復興	・教養教育科目/1年次/半期/2単位
		3	文学部・教養学部 全学科共通	地域構想論	・社会教育主事に関する科目/2年次/半期/2単位
		4	文学部・教養学部 全学科共通	地域福祉論	・社会教育主事に関する科目/2年次/半期/2単位
		5	文学部・教養学部 全学科共通	地域スポーツ論	・社会教育主事に関する科目/3年次/半期/2単位
		6	文学部・教養学部 全学科共通	地域教育論	・社会教育主事に関する科目/3年次/半期/2単位
		7	文学部・教養学部 全学科共通	地域政策論	・社会教育主事に関する科目/3年次/半期/2単位
		8	文学部・教養学部 全学科共通	地域文化論	・社会教育主事に関する科目/3年次/半期/2単位
		9	文学部・教養学部 全学科共通	地域社会論	・社会教育主事に関する科目/3年次/半期/2単位
		10	経済学部 全学科共通	東北経済論Ⅰ	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		11	経済学部 全学科共通	東北経済論Ⅱ	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		12	経済学部 全学科共通	地域経済論Ⅰ	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		13	経済学部 全学科共通	地域経済論Ⅱ	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		14	経済学部 経済学科	経済学特殊講義Ⅰ	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		15	経済学部 経済学科	経済学特殊講義Ⅱ	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		16	経済学部 経済学科	経済学特殊講義Ⅲ	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		17	経済学部 共生社会経済学科	地域福祉論Ⅰ	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		18	経済学部 共生社会経済学科	地域福祉論Ⅱ	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		19	経済学部 共生社会経済学科	地方財政論Ⅰ	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		20	経済学部 共生社会経済学科	地方財政論Ⅱ	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		21	経済学部 共生社会経済学科	フィールドワーク A	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		22	経済学部 共生社会経済学科	フィールドワーク B	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		23	経済学部 共生社会経済学科	フィールドワーク C	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		24	経済学部 共生社会経済学科	フィールドワーク D	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		25	経済学部 共生社会経済学科	フィールドワーク E	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		26	経済学部 共生社会経済学科	フィールドワーク F	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		27	経営学部 経営学科	総合講座Ⅰ	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位/
		28	経営学部 経営学科	総合講座Ⅱ	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位/
		29	経営学部 経営学科	総合講座Ⅲ	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位/
		30	経営学部 経営学科	総合講座Ⅳ	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位/
		31	教養学部 全学科共通	地域構想学演習A	・学部共通科目/3年次開講/半期/1単位/選択必修

項目		平成27年度進捗状況			
		32	教養学部 全学科共通	地域構想学演習B ・学部共通科目/3年次開講/半期/1単位/選択必修	
		33	教養学部 地域構想学科	地域生活論 ・専門教育科目/1年次開講/半期/2単位	
		34	教養学部 地域構想学科	地域と自然 ・専門教育科目/1年次開講/半期/2単位	
		35	教養学部 地域構想学科	地域情報解析 ・専門教育科目/2年次開講/半期/2単位	
		36	教養学部 地域構想学科	地域防災科学 ・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位	
		37	教養学部 地域構想学科	地域構想学基礎実習 ・専門教育科目/1年次開講/半期/2単位/必修	
		38	教養学部 地域構想学科	地誌学要説(地誌学概説) ・専門教育科目/1年次開講/半期/2単位	
		39	教養学部 地域構想学科	地域経済学 ・専門教育科目/2年次開講/半期/2単位	
教育	アクティブラーニング型授業を行う専任教員数	No.	学部	学科	氏名
		1	経済学部	経済学科	千葉 昭彦
		2	経済学部	共生社会経済学科	郭 基煥
		3	経済学部	共生社会経済学科	野崎 明
		4	経済学部	共生社会経済学科	熊沢 由美
		5	経済学部	共生社会経済学科	黒坂 愛衣
		6	経済学部	共生社会経済学科	小宮 友根
		7	経済学部	共生社会経済学科	齊藤 康則
		8	経営学部	経営学科	折橋 伸哉
		9	経営学部	経営学科	斎藤 善之
		10	経営学部	経営学科	村山 貴俊
		11	経営学部	経営学科	松村 尚彦
		12	経営学部	経営学科	尾田 基
		13	経営学部	経営学科	松岡 孝介
		14	経営学部	経営学科	矢口 義教
		15	経営学部	経営学科	秋池 篤
		16	工学部	環境建設工学科	飛田 善雄
		17	工学部	環境建設工学科	吉田 望
		18	教養学部	地域構想学科	岩動 志乃夫
		19	教養学部	地域構想学科	金菱 清
		20	教養学部	地域構想学科	佐久間 政広
		21	教養学部	地域構想学科	高野 岳彦
		22	教養学部	地域構想学科	高橋 信二
		23	教養学部	地域構想学科	平吹 喜彦
		24	教養学部	地域構想学科	増子 正
		25	教養学部	地域構想学科	松原 悟
		26	教養学部	地域構想学科	松本 秀明
		27	教養学部	地域構想学科	宮城 豊彦
		28	教養学部	地域構想学科	柳井 雅也
		29	教養学部	地域構想学科	和田 正春
		30	教養学部	地域構想学科	天野 和彦
		31	教養学部	地域構想学科	植田今日子
		32	教養学部	地域構想学科	大澤 史伸
		33	教養学部	地域構想学科	菅原 真枝
		34	教養学部	地域構想学科	柳澤 英明
		35	地域共生推進機構	特任講師	松崎 光弘
		36	地域共生推進機構	特任講師	渡邊 一馬
		37	地域共生推進機構	特任講師	小泉 美彩紀
	FD・SD推進	新任職員対象FD研修会 平成27年4月2日(木)			
		授業運営実施に関する説明会 平成27年4月9日(木)			

	項目	平成27年度進捗状況
		TGベーシック担当者向けFD研修会 平成27年6月4日(木)
		平成27年度第1回大学事務職員対象「地(知)の拠点整備事業に係る職員研修会」平成27年7月15日(水) 参加者:41名
研究	地域コーディネーター(CSW等)に関する研究 担当教員: 阿部 重樹 増子 正 齊藤 康則 黒坂 愛衣 松崎 光弘 渡邊 一馬 小泉 美彩紀	CSW研究会 第1回CSW研究会 平成27年10月1日(木) 第2回CSW研究会 平成27年10月28日(水) 第3回CSW研究会 平成27年11月19日(木) 第4回CSW研究会 平成27年12月3日(木) 第5回CSW公開研究会 平成27年12月19日(土) 研究報告:阿部重樹、松崎光弘 CSW実践活動報告:伊師洋香氏 大学HP: <a href="http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/151215-2.html">http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/151215-2.html</a> 第6回CSW研究会 平成28年1月20日(水) 第7回CSW公開研究会 平成28年3月15日(火) 研究報告:Golam Mathbor氏 ディスカッション:大久保環氏、阿部由紀氏、伊東征吉氏、阿部福美氏、本間照雄 大学HP: <a href="http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/160316-1.html">http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/160316-1.html</a>
研究	多文化共生社会の推進 担当教員: 郭 基煥 小宮 友根 七海 雅人 石川 真作 佐藤 真紀	「異郷被災」を語る——在日コリアン被災者の東日本大震災 平成27年10月23日(金)18:30~ 登壇者:赤坂憲雄氏、郭基煥、李善姫氏 大学HP: <a href="http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/151022-3.html">http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/151022-3.html</a> ドキュメンタリー映画「ヘイトスピーチ」上映会 平成27年11月19日(木)13時30分~ トークセッション:佐々木航弥氏、郭基煥 大学HP: <a href="http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/151116-2.html">http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/151116-2.html</a>
研究	その他、市民参加型の地域課題解決プログラム 担当教員: 阿部 重樹 和田 正春 坂本 泰伸 齊藤 康則	「復興公営住宅のいまとこれから」 平成28年1月21日(木)16時~ 基調講演:本多史朗氏 研究報告:坂本泰伸 ディスカッション:伊勢貴氏、菊池広人氏、飯塚正広氏、齊藤康則(コーディネーター) 大学HP: <a href="http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/160106-2.html">http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/160106-2.html</a> 総合戦略策定に係る市民懇談会(多賀城市) 第1回 平成27年6月23日(火) 第2回 平成27年6月24日(水) 第3回 平成27年6月25日(木) 第4回 平成27年6月27日(土)
社会 貢献	地域志向系の公開講座 及びセミナーの開講数	「震災と文学」の開催:全10回(前期5回、後期5回) 講 師:いとうせいこう、西谷修、アイリーン・美緒子・スミス、外岡秀俊、大島幹雄、 佐藤通雅/高野ムツオ、島田雅彦、和合亮一、佐伯一麦、熊谷達也 参 加 者:約1000名(前期・後期) 大学HP: <a href="http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/oc2015sp-02.html">http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/oc2015sp-02.html</a> 大学HP: <a href="http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/oc2015au-06.html">http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/oc2015au-06.html</a> 「地域コーディネータースキルプログラム」の実施 平成27年5月20日(水)~8月29日(土) 受 講 生:8名(うち7名修了)
社会 貢献	市民活動への参加を希望する方を対象とした講座開講数	復活と創造 東北の地域力⑦「歴史から捉えた災害列島」 平成27年7月19日(日)14:00~16:30 基調講演:保立道久氏 パネル討論:保立道久氏、千葉孝弥氏、松本秀明、佐川正敏、七海雅人 参 加 者:200名 大学HP: <a href="http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/150629-2.html">http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/150629-2.html</a> 公開勉強会「復興公営住宅における住民自治会の組織化への支援をめぐる」 平成27年10月23日(金)16:30~18:30 講 師:大久保環氏 参 加 者:70名 大学HP: <a href="http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/151022-2.html">http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/151022-2.html</a> 第4回東北域学シンポジウム テ ー マ:地域と共に生きる大学を考える 平成28年3月19日(土)14時00分~ 参 加 者:50名 地域共生推進機構HP: <a href="http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/iprc/news/754.html">http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/iprc/news/754.html</a>
社会 貢献	多賀城高等学校に関連した勉強会	災害科学科開設に向けたワークショップ実施 ・「発災時・避難時を想定した防災ワークショップ」 平成27年6月2日(火) 多賀城高校3年生280名 大学HP: <a href="http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/iprc/news/230.html">http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/iprc/news/230.html</a>

項目		平成27年度進捗状況
		<p>新潟県立見附高等学校訪問に伴う事前研修及び当日の支援</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・事前研修 平成27年10月1日（木）16時40分～ 多賀城高校9名</li> <li>・当日の支援（ワークショップ） 平成27年10月2日（金）14時30分～ 見附高校2年生155名、多賀城高校9名、教養学部学生8名 大学HP：<a href="http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/151009-1.html">http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/151009-1.html</a></li> </ul> <p>大学の研究活動と同高校生との連携実験実施</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「安全安心なキャンパス計画のための被災時の避難誘導大規模シミュレーションに関する研究」に基づく調査 平成27年11月21日（土）9時30分～ 多賀城高校38名、同高校教員2名 地域共生推進機構HP：<a href="http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/iprc/news/630.html">http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/iprc/news/630.html</a></li> </ul>
その他	フォローアップ調査	H26年度分 対象者：全学生（回収率62.7%）、全教員（回収率81.3%）、全職員（回収率62.6%）、全連携自治体（回収率100%）
	地域共生推進機構会議	第1回 平成27年4月14日（火）
	自治体との連絡調整会議	第1回仙台市地域共生推進協議会 平成27年12月25日（金） 第2回仙台市地域共生推進協議会 平成28年3月7日（月）
	COC研究の発行	平成28年3月 第1号発行

項目		平成28年度進捗状況			
教育	シラバスにおいて地域に関する学習をおこなうことを明示している授業数	No.	対象学部・学科	科目名	概要
・地域教育科目 5科目 ・教養及び専門科目 44科目		1	全学部共通 ※経営学部を除く	震災と復興	・地域教育科目/1年次/半期/2単位(文学部・教養学部)
		2	全学部共通 ※文学部総合人文	東北地域論	・教養教育科目/2年次/半期/2単位
		3	全学部共通 ※工学部を除く	環境の科学	・教養教育科目/1年次/半期/2単位(歴史学科以外)
		4	文学部・教養学部 全学科共通	地域の課題Ⅰ(地域課題版)	・地域教育科目/2年次/半期/2単位
		5	文学部・教養学部 全学科共通	地域の課題Ⅰ(地域企業版)	・地域教育科目/2年次/半期/2単位
		6	文学部・教養学部 全学科共通	地域の課題Ⅱ(地域課題版)	・地域教育科目/2年次/半期/2単位
		7	文学部・教養学部 全学科共通	地域の課題Ⅱ(地域企業版)	・地域教育科目/2年次/半期/2単位
		8	文学部・教養学部 全学科共通	地域構想論	・社会教育主事に関する科目/2年次/半期/2単位
		9	文学部・教養学部 全学科共通	地域福祉論	・社会教育主事に関する科目/2年次/半期/2単位
		10	文学部・教養学部 全学科共通	地域スポーツ論	・社会教育主事に関する科目/2年次/半期/2単位
		11	文学部・教養学部 全学科共通	地域教育論	・社会教育主事に関する科目/3年次/半期/2単位
		12	文学部・教養学部 全学科共通	地域政策論	・社会教育主事に関する科目/3年次/半期/2単位
		13	文学部・教養学部 全学科共通	地域文化論	・社会教育主事に関する科目/3年次/半期/2単位
		14	文学部・教養学部 全学科共通	地域社会論	・社会教育主事に関する科目/3年次/半期/2単位
		15	経済学部 全学科共通	東北経済論Ⅰ	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		16	経済学部 全学科共通	東北経済論Ⅱ	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		17	経済学部 全学科共通	地域経済論Ⅰ	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		18	経済学部 全学科共通	地域経済論Ⅱ	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		19	経済学部 経済学科	経済学特殊講義Ⅲ	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		20	経済学部 経済学科	経済学特殊講義Ⅳ	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		21	経済学部 共生社会経済学科	地域福祉論Ⅰ	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		22	経済学部 共生社会経済学科	地域福祉論Ⅱ	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		23	経済学部 共生社会経済学科	地方財政論Ⅰ	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		24	経済学部 共生社会経済学科	地方財政論Ⅱ	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		25	経済学部 共生社会経済学科	フィールドワークA	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		26	経済学部 共生社会経済学科	フィールドワークB	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		27	経済学部 共生社会経済学科	フィールドワークC	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		28	経済学部 共生社会経済学科	フィールドワークD	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		29	経済学部 共生社会経済学科	フィールドワークE	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		30	経済学部 共生社会経済学科	フィールドワークF	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
		31	経営学部 経営学科	総合講座Ⅱ	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位/

項目		平成28年度進捗状況			
		32	経営学部 経営学科	総合講座Ⅳ	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位/
		33	教養学部 全学科共通	地域構想学演習A	・学部共通科目/3年次開講/半期/1単位/選択必修
		34	教養学部 全学科共通	地域構想学演習B	・学部共通科目/3年次開講/半期/1単位/選択必修
		35	教養学部 地域構想学科	地域生活論	・専門教育科目/1年次開講/半期/2単位
		36	教養学部 地域構想学科	地域と自然	・専門教育科目/1年次開講/半期/2単位
		37	教養学部 地域構想学科	地域構想学基礎実習	・専門教育科目/1年次開講/半期/2単位/必修
		38	教養学部 地域構想学科	地誌学要説	・専門教育科目/1年次開講/半期/2単位
		39	教養学部 地域構想学科	東北地域学	・教養教育科目/2年次/半期/2単位
		40	教養学部 地域構想学科	地域システム論	・専門教育科目/2年次開講/半期/2単位
		41	教養学部 地域構想学科	地域データ分析法	・専門教育科目/2年次開講/半期/2単位
		42	教養学部 地域構想学科	地形学	・専門教育科目/2年次開講/半期/2単位
		43	教養学部 地域構想学科	地域経済学	・専門教育科目/2年次開講/半期/2単位
		44	教養学部 地域構想学科	地域防災科学	・専門教育科目/3年次開講/半期/2単位
教育	アクティブラーニング型授業を行う専任教員数	No.	学部	学科	氏名
		1	文学部	英文学科	バックレイ・フィリップ
		2	文学部	英文学科	柴田 良孝
		3	文学部	英文学科	村野井 仁
		4	文学部	総合人文学科	出村 みや子
		5	文学部	総合人文学科	鐸木 道剛
		6	文学部	総合人文学科	野村 信
		7	文学部	歴史学科	河西 晃祐
		8	文学部	歴史学科	加藤 幸治
		9	文学部	歴史学科	佐川 正敏
		10	文学部	歴史学科	佐藤 義則
		11	文学部	歴史学科	政岡 伸洋
		12	文学部	歴史学科	櫻井 康人
		13	文学部	歴史学科	楠 義彦
		14	文学部	歴史学科	谷口 満
		15	文学部	歴史学科	七海 雅人
		16	経済学部	経済学科	伊鹿倉 正司
		17	経済学部	経済学科	倉田 洋
		18	経済学部	経済学科	原田 善教
		19	経済学部	経済学科	篠崎 剛
		20	経済学部	経済学科	小沼 宗一
		21	経済学部	経済学科	千葉 昭彦
		22	経済学部	共生社会経済学科	斉藤 尚
		23	経営学部	経営学科	松村 尚彦
		24	経営学部	経営学科	矢口 義教
		25	法学部	法律学科	井上 義比古
		26	法学部	法律学科	宮川 基
		27	法学部	法律学科	黒田 秀治
		28	法学部	法律学科	菊地 雄介
		29	法学部	法律学科	松浦 陽子
		30	法学部	法律学科	大窪 誠
		31	法学部	法律学科	中村 雄一
		32	法学部	法律学科	陶久 利彦

項目	平成28年度進捗状況		
	33	工学部	機械知能工学科 梶川 伸哉
	34	工学部	機械知能工学科 郷古 学
	35	工学部	機械知能工学科 熊谷 正朗
	36	工学部	機械知能工学科 斎藤 修
	37	工学部	電気電子工学科 郭 海蛟
	38	工学部	電気電子工学科 金 義鎮
	39	工学部	電気電子工学科 呉 国紅
	40	工学部	電子工学科 桑野 聡子
	41	工学部	電子工学科 志子田 有光
	42	工学部	電子工学科 土井 正晶
	43	工学部	環境建設工学科 遠藤 孝夫
	44	工学部	環境建設工学科 石川 雅美
	45	工学部	環境建設工学科 飛田 善雄
	46	工学部	環境建設工学科 武田 三弘
	47	工学部	環境建設工学科 鈴木 道哉
	48	工学部	情報基盤工学科 吉川 英機
	49	工学部	情報基盤工学科 神永 正博
	50	教養学部	人間科学科 加藤 健二
	51	教養学部	人間科学科 金井 嘉宏
	52	教養学部	人間科学科 黒須 憲
	53	教養学部	人間科学科 仙田 幸子
	54	教養学部	人間科学科 千葉 智則
	55	教養学部	人間科学科 渡辺 通子
	56	教養学部	人間科学科 堀毛 裕子
	57	教養学部	言語文化学科 岸 浩介
	58	教養学部	言語文化学科 今井 奈緒子
	59	教養学部	言語文化学科 酒井 朋子
	60	教養学部	言語文化学科 津上 誠
	61	教養学部	言語文化学科 門間 俊明
	62	教養学部	情報科学科 佐藤 篤
	63	教養学部	情報科学科 土原 和子
	64	教養学部	情報科学科 松本 章代
	65	教養学部	地域構想学科 岩動 志乃夫
	66	教養学部	地域構想学科 宮城 豊彦
	67	教養学部	地域構想学科 金菱 清
	68	教養学部	地域構想学科 高橋 信二
	69	教養学部	地域構想学科 佐久間 政広
	70	教養学部	地域構想学科 松本 秀明
	71	教養学部	地域構想学科 菅原 真枝
	72	教養学部	地域構想学科 大澤 史伸
	73	教養学部	地域構想学科 天野 和彦
	74	教養学部	地域構想学科 平吹 喜彦
	75	教養学部	地域構想学科 和田 正春
	76	地域共生推進機構	特任講師 菊池 広人
	77	地域協働教育推進機構	特任講師 四宮 千佳子
	78	地域協働教育推進機構	特任講師 渡辺 一馬
	79	英語教育センター	特任講師 尾坂 純子
FD・SD推進	<p>学内FD研修 地域協働教育による ディープ・アクティブラーニングの推進 東北学院大学が          取り組むCOC/COC+事業の概観          平成28年4月5日(火)          参加者：38名</p> <p>第1回AL学習会 「LTD話し合い学習法と協同学習」 平成28年11月24日(木)          参加者：19名</p> <p>第2回AL学習会 「中学・高校におけるALの実践」 平成29年1月19日(木)          参加者：17名</p> <p>第3回AL学習会 「授業外学習へのアプローチ」          参加者：10名</p>		

	項目	平成28年度進捗状況
研究	地域コーディネーター(CSW等)に関する研究 担当教員： 阿部 重樹 郭 基煥 増子 正 齊藤 康則 黒坂 愛衣 松崎 光弘 本間 照雄 菊池 広人 小泉 美彩紀	<p>第1回CSW運営会議 平成28年4月5日(金) 第2回CSW運営会議 平成28年11月7日(月) 第3回CSW運営会議 平成28年12月5日(月) 第4回CSW運営会議 平成28年12月12日(月) 第5回CSW運営会議 平成29年2月6日(月) 第6回CSW運営会議 平成29年2月25日(土)</p> <p>第1回CSW公開研究会 平成28年5月19日(木) 「災害復興公営住宅におけるコミュニティづくり研究会」 プレゼンテーション：(特活)カリタス釜石(岩手県釜石市) (一社)復興みなさん会(宮城県南三陸町) (一社)石巻仮設住宅自治連合推進会(宮城県石巻市) (特活)おおさき地域創造研究会(宮城県大崎市) (特活)みんぷく(福島県いわき市) コーディネーター：本間照雄 参加者：80名 大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/160615-1.html 河北新報：2016.5.24</p> <p>第2回CSW公開研究会 平成28年9月15日(木) 「自治会とその周辺を舞台とした女性の役割」 プレゼンテーション：(特活)カリタス釜石(岩手県釜石市) (一社)復興みなさん会(宮城県南三陸町) (一社)石巻じちれん(宮城県石巻市) (特活)おおさき地域創造研究会(宮城県大崎市) トークセッション：岡本全勝氏、本間照雄 参加者：58名 大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/160923-3.html 東北学院時報：(第736号)2016.11.1</p> <p>第3回CSW公開研究会 平成28年11月16日(水) 「多様な人財による地域福祉の推進」基調講話：庄子智広氏 パネリスト：岡本圭一郎氏、三井悦弘氏、荒川陽子氏、芳賀裕子氏 参加者：38名 大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/161124-6.html</p>
研究	多文化共生社会の推進 担当教員： 郭 基煥 小宮 友根 七海 雅人 石川 真作 佐藤 真紀 津上 誠 酒井 朋子 菅原 真枝 楊 世英 本間 照雄 菊池 広人 小泉 美彩紀	<p>「難民化・ヘイトクライムから生命の非孤立化、非序列化へー東日本大震災(3.11)・セウォル号事件(4.16)・相模原事件(7.26)後のコミュニティ」 平成28年9月17日(土) 特別講演：金泰昌氏 参加者：約50名 大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/160928-1.html 東北学院時報：(第736号)2016.11.15</p> <p>平成28年度「難民ワークショップ」平成28年12月13日(火) 参加者：71名 COC研究第2号</p> <p>「日韓共感の可能性」打合せ会 平成29年2月25日(土) 参加者：20名</p> <p>「記憶風景を縫う」ー被災地の手仕事活動とチリのタペストリー (アルピジューラ)から災禍の記憶と表現を考えるプロジェクト勉強会(公開研究会) (共催)計8回(6/15…20名、7/13…10名、8/20…10名、9/8…5名、10/1…10名、11/19…15名、12/17…10名、1/21…10名)</p>
研究	その他、市民参加型の地域課題解決プログラム 担当教員： 阿部 重樹 坂本 泰伸 本間 照雄 菊池 広人 小泉 美彩紀	<p>青葉区土樋町内会「敬老お食事会」平成28年9月19日(月・祝) 参加者：50名 大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/160920-1.html 河北新報：2016.9.20 読売新聞：2016.9.20 東北学院時報：(第736号)2016.11.15</p> <p>「スマホサロン@青葉土樋」平成28年9月19日(月・祝) 参加者：20名 大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/161202-6.html</p> <p>「哲学カフェー認知症学びの講座ー」平成28年3月8日(水) 参加者：19名 大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/170216-1.html</p>
社会貢献	地域志向系の公開講座及びセミナーの開講数	<p>「震災と文学」の開催：全10回(前期5回、後期5回) 講師：若松英輔、柳美里、土方正志、川元茂、熊谷達也、藻谷浩介、渡辺誠一郎、東雅夫、佐伯一麦、和合亮一、平田オリザ 参加者：約980名(前期・後期) 大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/oc2016sp-11.html http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/oc2016au-31.html</p>

	項目	平成28年度進捗状況
		履修証明プログラム「コミュニティソーシャルワーカー（CSW）スキルアッププログラム」 開講式：平成28年4月23日 講義：平成28年4月23日～平成29年2月11日 計22回 修了式：平成29年3月18日 受講者：18名 修了者：14名 大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/160209-1.html http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/160416-1.html http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/170207-2.html http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/170329-1.html 河北新報：2016.7.21
社会 貢献	市民活動への参加を希望する方を対象とした講座開講数	シンポジウム「宮城・熊本・岩手をつなぐ」 平成28年11月6日（日） ゲスト：多田一彦氏、石塚直樹氏 参加者：32名 大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/161013-3.html 河北新報：2016.11.7
		地域コーディネーター見本市「宮城県内先進事例に学ぶ地域力の魅力と可能性」 平成29年1月13日（金） 基調講演：藻谷浩介氏 事例報告： ①暮らしの中で支える一街中を走る認知症サポーター―（大河原町） ②地域を彩る活動―顔の見える町内会―（多賀城市高橋東二区） ③明日を拓く若手社協職員―宮城の地域福祉を考える会「ゆいっこ」―（県内全域） ④要援護高齢者に役割を―福祉施設と小学校―（栗原市鶯沢） ⑤面倒くささを楽しもう―前浜おらほのとおき―（気仙沼市本吉町前浜） ⑥現代版寺子屋―Naritaマルシェ―（富谷市成田） ⑦被災地の絆を育む―見えない糸を紡ぐCSC―（石巻市） ⑧小地域ネットワーク事業―よかったネット―（登米市） ⑨地域包括ケア環境づくり―走る保健師―（東松島市） ⑩住民と大学の協働―資源をつなぐ町内会長―（仙台市土樋） 大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/170117-1.html 参加者：130名 東北学院時報：（第738号）2017.3.15
		域学シンポジウム「地域と共に生きる大学を考える」 平成29年3月18日（土） キーノートレクチャー：喜久里要氏 事例紹介：【名古屋学院大学】家本博一氏、杉山晃一氏 【京都文教大学】片山明久氏、押領司哲也氏 参加者：80名 大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/170329-2.html
社会 貢献	多賀城高等学校に関連した勉強会	ファシリテーター養成講習 平成29年1月5日（木） 参加者：16名 多賀城高校HP：情報更新2017.1.10
		第2回ファシリテーター養成講習 平成29年2月4日（土） 参加者：15名 多賀城高校HP：情報更新2017.1.10
その他	フォローアップ調査	H27年度分 対象者：全学生（回収率63.1%）、全教員（回収率49.2%）、全職員（回収率59.4%）、全連携自治体（回収率100%）
	地域共生推進機構会議	第1回 平成28年7月4日（月） 第2回 平成28年11月7日（月） 第3回 平成28年12月19日（月） 第4回 平成29年3月6日（月）
	地域共生推進機構運営委員会	第1回 平成28年6月9日（木） 第2回 平成28年10月27日（木） 第3回 平成29年2月21日（火）（メール審議） 第4回 平成29年3月24日（金）
	自治体との連絡調整会議	仙台市地域共生推進協議会 平成29年3月13日（月） 第1回多賀城市地域共生推進協議会 平成28年9月7日（水） 第2回多賀城市地域共生推進協議会 平成29年3月21日（火）
	COC研究の発行	平成29年3月 第2号発行

項目		平成29年度進捗状況			
教育	シラバスにおいて地域に関する学習をおこなうことを明示している授業数	No.	対象学部・学科	科目名	概要
・地域教育科目 7科目 ・教養及び専門科目 53科目		1	全学部共通	震災と復興	・地域教育科目/1年次/半期/2単位 (全学部) ・教養教育科目/2年次/半期/2単位 (工学部)
		2	全学部共通 ※工学部を除く	環境の科学	・教養教育科目/1年次/半期/2単位 (歴史学科以外) ・教養教育科目/2年次/半期/2単位 (歴史学科)
		3	全学部共通 ※総合人文学科を除く	東北地域論	・教養教育科目/2年次/半期/2単位
		4	文学部・教養学部 全学部共通	ボランティア活動	・社会教育主事に関する科目/2年次/半期/2単位 (文学部) ・学部共通科目/2年次/半期/2単位 (教養学部)
		5	文学部・教養学部 全学部共通	地域スポーツ論	・社会教育主事に関する科目/2年次/半期/2単位
		6	文学部・教養学部 全学部共通	地域の課題Ⅰ (地域課題版)	・地域教育科目/2年次/半期/2単位
		7	文学部・教養学部 全学部共通	地域の課題Ⅰ (地域企業版)	・地域教育科目/2年次/半期/2単位
		8	文学部・教養学部 全学部共通	地域の課題Ⅱ (地域課題版)	・地域教育科目/2年次/半期/2単位
		9	文学部・教養学部 全学部共通	地域の課題Ⅱ (地域企業版)	・地域教育科目/2年次/半期/2単位
		10	文学部・教養学部 全学部共通	生涯学習概論	・博物館学芸員に関する科目/2年次/通年/4単位 (文学部) ・学科専門科目/2年次/半期/2単位 (人間科学科・地域構想学科) ・社会教育主事に関する科目/2年次/半期/2単位 (言語文化学科・情報科学科)
		11	文学部・教養学部 全学部共通	スポーツマネジメント	・社会教育主事に関する科目/3年次/半期/2単位
		12	文学部・教養学部 全学部共通	教育調査実習A	・社会教育主事に関する科目/3年次/半期/2単位
		13	文学部・教養学部 全学部共通	教育調査実習B	・社会教育主事に関する科目/3年次/半期/2単位
		14	文学部・教養学部 全学部共通	現代社会と社会教育	・社会教育主事に関する科目/3年次/半期/2単位
		15	文学部・教養学部 全学部共通	社会教育課題研究	・社会教育主事に関する科目/3年次/通年/4単位
		16	文学部・教養学部 全学部共通	社会教育実習	・社会教育主事に関する科目/3年次/通年/2単位
		17	文学部・教養学部 全学部共通	地域課題演習 (地域課題版)	・地域教育科目/3年次/通年/4単位
		18	文学部・教養学部 全学部共通	地域課題演習 (地域企業版)	・地域教育科目/3年次/通年/4単位
		19	文学部・教養学部 全学部共通	地域文化論	・社会教育主事に関する科目/3年次/半期/2単位
		20	文学部・教養学部 全学部共通	社会教育計画	・社会教育主事に関する科目/4年次/通年/4単位
		21	文学部 全学部共通	生活文化史Ⅱ	・博物館学芸員に関する科目/3年次/半期/2単位 (英文学科) ・専門教育科目/3年次/半期/2単位 (総合人文学科・歴史学科)
		22	歴史学科・ 人間科学科・地域構 想学科	江戸から明治へ	・専門教育科目/2年次/半期/2単位 (歴史学科) ・学科専門科目/2年次/半期/2単位 (人間科学科) ・教員免許状の教科に関する科目/2年次/半期/2単位 (地域構想学科)
		23	文学部 歴史学科	基礎地理学	・教養教育科目/2年次/半期/2単位
		24	文学部 歴史学科	民俗学実習Ⅰ	・専門教育科目/2年次/半期/2単位
		25	文学部 歴史学科	日本史の諸問題Ⅱ	・専門教育科目/3年次/半期/2単位

項目	平成29年度進捗状況		
	26 文学部 歴史学科	日本史専門講読Ⅰ	・専門教育科目/3年次/半期/2単位
	27 文学部 歴史学科	日本史専門講読Ⅱ	・専門教育科目/3年次/半期/2単位
	28 文学部 歴史学科	日本史総合演習Ⅰ	・専門教育科目/3年次/半期/2単位
	29 文学部 歴史学科	日本史総合演習Ⅱ	・専門教育科目/3年次/半期/2単位
	30 文学部 歴史学科	民俗学実習Ⅱ	・専門教育科目/3年次/半期/2単位
	31 文学部 歴史学科	民俗学実習Ⅲ	・専門教育科目/3年次/半期/2単位
	32 文学部 歴史学科	日本史論文演習A	・専門教育科目/4年次/半期/2単位
	33 文学部 歴史学科	日本史論文演習B	・専門教育科目/4年次/半期/2単位
	34 経済学部・経営学部 法学部・教養学部	地理学	・教養教育科目/1年次/半期/2単位
	35 経済学部 全学科共通	地域経済論Ⅰ	・専門教育科目/3年次/半期/2単位
	36 経済学部 全学科共通	地域経済論Ⅱ	・専門教育科目/3年次/半期/2単位
	37 経済学部 経済学科	経済学特殊講義Ⅲ	・専門教育科目/3年次/半期/2単位
	38 経済学部 共生社会経済学科	特殊講義Ⅱ	・専門教育科目/3年次/半期/2単位
	39 経営学部 経営学科	演習（3年）	・専門教育科目/3年次/通年/4単位
	40 経営学部 経営学科	ビジネス・ケース 研究Ⅰ	・専門教育科目/3年次/半期/2単位
	41 経営学部 経営学科	ビジネス・ケース 研究Ⅱ	・専門教育科目/3年次/半期/2単位
	42 経営学部 経営学科	ビジネス・ケース 研究Ⅲ	・専門教育科目/4年次/半期/2単位
	43 経営学部 経営学科	ビジネス・ケース 研究Ⅳ	・専門教育科目/4年次/半期/2単位
	44 経営学部 経営学科	演習（4年）	・専門教育科目/4年次/通年/4単位
	45 法学部 法律学科	地方自治論Ⅰ	・専門教育科目/3年次/半期/2単位
	46 法学部 法律学科	地方自治論Ⅱ	・専門教育科目/3年次/半期/2単位
	47 法学部 法律学科	演習二部	・専門教育科目/4年次/通年/4単位
	48 工学部 全学科共通	経営学	・教養教育科目/2年次/半期/2単位
	49 工学部 環境建設工学科	施工法および施工 管理	・学科専門科目/4年次/半期/2単位
	50 教養学部 全学科共通	地域構想学演習A	・学部共通科目/3年次/半期/2単位
	51 教養学部 全学科共通	地域構想学演習B	・学部共通科目/3年次/半期/2単位
	52 教養学部 地域構想学科	地域構想学基礎実 習	・学科専門科目/1年次/半期/2単位
	53 教養学部 地域構想学科	人と自然発展実習 A	・学科専門科目/2年次/半期/2単位
	54 教養学部 地域構想学科	人と自然発展実習 B	・学科専門科目/2年次/半期/2単位
	55 教養学部 地域構想学科	生態学	・学科専門科目/2年次/半期/2単位
	56 教養学部 地域構想学科	地域システム論	・学科専門科目/2年次/半期/2単位

項目		平成29年度進捗状況			
		57	教養学部 地域構想学科	地域データ分析法	・学科専門科目/2年次/半期/2単位
		58	教養学部 地域構想学科	地形学	・学科専門科目/2年次/半期/2単位
		59	教養学部 地域構想学科	地図と空中写真	・学科専門科目/3年次/半期/2単位
		60	教養学部 地域構想学科	東北地域学	・教養教育科目/2年次/半期/2単位
教育	アクティブラーニング 型授業を行う専任教員 数	No.	学部	学科	氏名
		1	文学部	英文学科	吉村 富美子
		2	文学部	英文学科	村野井 仁
		3	文学部	英文学科	那須川 訓也
		4	文学部	総合人文学科	原田 浩司
		5	文学部	総合人文学科	出村 みや子
		6	文学部	歴史学科	加藤幸治
		7	文学部	歴史学科	河西晃祐
		8	文学部	歴史学科	菊池慶子
		9	文学部	歴史学科	政岡 伸洋
		10	文学部	歴史学科	竹井英文
		11	文学部	歴史学科	渡辺昭一
		12	文学部	歴史学科	豊島孝之
		13	文学部	歴史学科	櫻井 康人
		14	文学部	教育学科	加藤 卓
		15	文学部	教育学科	紺野 祐
		16	文学部	教育学科	佐藤 正寿
		17	経済学部	経済学科	伊鹿倉 正司
		18	経済学部	経済学科	宮本拓郎
		19	経済学部	経済学科	高橋 秀悦
		20	経済学部	経済学科	篠崎剛
		21	経済学部	経済学科	小沼 宗一
		22	経済学部	経済学科	千葉昭彦
		23	経済学部	経済学科	泉 正樹
		24	経済学部	経済学科	倉田 洋
		25	経済学部	経済学科	白井大地
		26	経済学部	共生社会経済学科	佐藤 純
		27	経済学部	共生社会経済学科	佐藤康仁
		28	経済学部	共生社会経済学科	石川真作
		29	経営学部	経営学科	古賀裕也
		30	経営学部	経営学科	山口朋泰
		31	経営学部	経営学科	秋池篤
		32	経営学部	経営学科	松村尚彦
		33	経営学部	経営学科	尾田 基
		34	経営学部	経営学科	北村智紀
		35	経営学部	経営学科	矢口義教
		36	経営学部	経営学科	鈴木好和
		37	法学部	法律学科	遠藤隆幸
		38	法学部	法律学科	近藤 雄大
		39	法学部	法律学科	黒田秀治
		40	法学部	法律学科	佐藤優希
		41	法学部	法律学科	松浦 陽子
		42	法学部	法律学科	石垣 茂光
		43	法学部	法律学科	大窪誠
		44	法学部	法律学科	中村 英
		45	法学部	法律学科	中村 雄一
		46	法学部	法律学科	陶久利彦
		47	工学部	機械知能工学科	加藤 陽子
		48	工学部	機械知能工学科	魚橋 慶子

項目	平成29年度進捗状況		
49	工学部	機械知能工学科	熊谷 正朗
50	工学部	機械知能工学科	佐瀬 一弥
51	工学部	機械知能工学科	斎藤 修
52	工学部	機械知能工学科	長島 慎二
53	工学部	機械知能工学科	矢口 博之
54	工学部	機械知能工学科	李 淵
55	工学部	機械知能工学科	鈴木 利夫
56	工学部	電気電子工学科	郭 海蛟
57	工学部	電気電子工学科	金 義鎮
58	工学部	電気電子工学科	桑野 聡子
59	工学部	電気電子工学科	原明人
60	工学部	電気電子工学科	小澤 哲也
61	工学部	電気電子工学科	嶋 敏之
62	工学部	環境建設工学科	宮内 啓介
63	工学部	環境建設工学科	三戸部 佑太
64	工学部	環境建設工学科	山口 晶
65	工学部	環境建設工学科	石川 雅美
66	工学部	環境建設工学科	中村 寛治
67	工学部	環境建設工学科	飛田 善雄
68	工学部	環境建設工学科	鈴木 道哉
69	工学部	情報基盤工学科	吉川 英機
70	工学部	情報基盤工学科	志子田 有光
71	工学部	情報基盤工学科	深瀬 道晴
72	工学部	情報基盤工学科	神永 正博
73	工学部	情報基盤工学科	川又 憲
74	工学部	情報基盤工学科	淡野 照義
75	教養学部	人間科学科	加藤 健二
76	教養学部	人間科学科	黒須 憲
77	教養学部	人間科学科	小林 信重
78	教養学部	人間科学科	神林 博史
79	教養学部	人間科学科	水谷 修
80	教養学部	人間科学科	清水 貴裕
81	教養学部	人間科学科	平野 幹雄
82	教養学部	人間科学科	片瀬 一男
83	教養学部	言語文化学科	岸 浩介
84	教養学部	言語文化学科	宮本 直規
85	教養学部	言語文化学科	金 永昊
86	教養学部	言語文化学科	金 亨貞
87	教養学部	言語文化学科	佐藤 真紀
88	教養学部	言語文化学科	酒井 朋子
89	教養学部	言語文化学科	小林 陸
90	教養学部	言語文化学科	塚本 信也
91	教養学部	言語文化学科	渡部 友子
92	教養学部	言語文化学科	文 景楠
93	教養学部	情報科学科	坂本 泰伸
94	教養学部	情報科学科	松本 章代
95	教養学部	情報科学科	菅原 研
96	教養学部	情報科学科	石田 弘隆
97	教養学部	情報科学科	村上 弘志
98	教養学部	情報科学科	土原 和子
99	教養学部	情報科学科	武田 敦志
100	教養学部	地域構想学科	宮城 豊彦
101	教養学部	地域構想学科	金菱 清
102	教養学部	地域構想学科	高橋 信二
103	教養学部	地域構想学科	高野 岳彦
104	教養学部	地域構想学科	佐久間 政広

項目		平成29年度進捗状況			
	105	教養学部	地域構想学科	菅原 真枝	
	106	教養学部	地域構想学科	大澤 史伸	
	107	教養学部	地域構想学科	平吹 喜彦	
	108	教養学部	地域構想学科	和田 正春	
	109	地域共生推進機構	特任講師	菊池広人	
	110	地域共生推進機構	特任講師	小泉美彩紀	
	111	地域共生推進機構	特任講師	本間 照雄	
	112	地域協働教育推進機構	特任講師	伊藤晋	
	113	地域協働教育推進機構	特任講師	高橋美和	
	114	地域協働教育推進機構	特任講師	四宮 千佳子	
	115	地域協働教育推進機構	特任講師	松崎光弘	
	116	地域協働教育推進機構	特任講師	千葉真哉	
	117	ラーニング・コモンズ	特任講師	遠海 友紀	
	118	ラーニング・コモンズ	特任講師	嶋田 みのり	
	119	就職キャリア支援部	特任講師	庄子 健太郎	
	FD・SD推進	新任職員FD研修会 平成29年4月4日(火) 参加者：43名			
		アクティブラーニング学習会 平成29年7月5日(水) 参加者：14名			
		全学教員研修会の実施 平成30年3月16日(金)			
	研究	地域コーディネーター(CSW等)に関する研究 担当教員： 阿部 重樹 郭 基煥 増子 正 齊藤 康則 黒坂 愛衣 矢口 義教 松崎 光弘 本間 照雄 菊池 広人 小泉 美彩紀	第1回CSW運営会議 平成29年4月7日(金)		
第2回CSW運営会議 平成29年5月5日(金)(メール審議)					
第3回CSW運営会議 平成29年9月14日(木)					
第4回CSW運営会議 平成29年11月6日(月)					
第5回CSW運営会議 平成29年12月6日(水)					
		第6回CSW運営会議 平成30年2月24日(土)			
		第1回CSW公開研究会 平成29年6月27日(火) 「CSWに求められる力とそれを育てる教育プログラムの発展を目指して」 後援：社会福祉法人宮城県社会福祉協議会、社会福祉法人仙台市社会福祉協議会、仙台市地域包括支援センター連絡協議会 講演：阿部重樹 パネリスト：本間照雄、ダクルス久美氏、三井悦弘氏、西塚国彦氏、高橋健一氏 参加者：31名 大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/170705-3.html			
		第2回CSW公開研究会 平成29年7月16日(日) 「大震災被災地における地域社会の再編」 共催：東北社会学会 司会：永井彰氏 報告：高木竜輔氏、本間照雄、伊藤亜都子氏 コメンテーター：佐久間政広、菅磨志保氏 参加者：112名 大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/170622-1.html			
		第3回CSW公開研究会 平成29年8月19日(土) 「資金の調達と運用Ⅰ・Ⅱ」 講師：久津摩和弘氏 参加者：46名 大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/170907-4.html			
		第4回CSW公開研究会 平成29年10月19日(日) 「これからの被災地に求められる地域人財とは～福祉系・地域系支援員の活動から見えてきたこと～」 共催：特定非営利活動法人地星社、宮城県サポートセンター支援事務所、一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム 講師：本郷正武氏 参加者：70名 大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/171003-1.html 河北新報：2017.10.20			

	項目	平成29年度進捗状況
		<p>第5回CSW公開研究会 平成29年11月30日(木)  共催：(社福)宮城県社会福祉協議会  後援：宮城県、仙台市、(社福)仙台市社会福祉協議会  「コーディネーターが走る！」  事例発表  (1) 口頭発表  ①地域づくりは挨拶から！子供も大人も！！(南三陸町・なかよし会)  ②震災から6年を経た女川町のコミュニティづくり(女川町社会福祉協議会)  ③ボトムアップ型の自治会づくり(涌谷町10区自治会)  ④チャレンジショップ「やました幸街堂」運営事業(山元町・スタンドアップ亘理)  ⑤地域との防災活動(富谷市・成田中学校地域防災ささえ隊)  (2) ポスター発表  ①ういの活動！マルシェで人づくり(南三陸町・ウィメンズアイ)  ②祈り・希望そして明日へ(仙台市・県中央地域福祉サービスセンター)  ③ミニデいの活動(継続して20年)(栗原市・上在ミニデイサービスすみれ会)  ④移動支援で生き生きした暮らしを創る(石巻市・特定非営利活動法人 移動支援Rera)  ⑤心災復興計画(名取市サポートセンターどっとなとり)  ⑥ともに願い ともに寄り添い ともに歩む(つばめの杜西区自治会/山元町社会福祉協議会)  ⑦ささえあつていこう 新しい扉を開けよう(南三陸町・中央公営住宅LSA)  ⑧支え合い助け合い住み良い下在地区にするために(栗原市・下在地区社会福祉協議会)  ⑨復興公営住宅におけるコミュニティづくり支援(仙台市社会福祉協議会青葉区事務所)  ⑩地域力を啓佑から(仙台市・県中央地域福祉サービスセンター)  参加者：120名  大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/171111-1.html</p>
研究	<p>多文化共生社会の推進  担当教員：  阿部 重樹  石川 真作  郭 基煥  七海 雅人  楊 世英  津上 誠  佐藤 真紀  酒井 朋子  菅原 真枝  本間 照雄  菊池 広人  小泉 美彩紀</p>	<p>平成29年度公開セミナー「外国につながる子どもへのサポートを考える」  平成29年5月8日(月)  講演：田所希衣子氏  大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/170501-1.html</p> <p>記憶風景を縫う チリのアルピジェラと災禍の表現  平成29年5月30日～6月12日  共催：「記憶風景を縫う」実行委員会、Survivart、Conflict Textiles  協力：大島博光記念館助成：公益財団法人朝日新聞文化財団、東北学院大学平成28年度学長研究助成金、平成29年度科学研究費補助金 若手(B)  後援：朝日新聞仙台総局、河北新報社、KHB東日本放送、毎日新聞仙台支局、宮城県文化振興財団  大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/170508-1.html</p> <p>平成29年度「難民ワークショップ」  平成29年12月9日(土)  共催：認定NPO法人IVY  大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/171031-3.html</p> <p>講演会「障害者が始めた障害者支援 ゼロからのスタート ルワンダの20年を振り返る」  平成30年1月20日(土)  講師：ルダシングア(吉田)真美氏  大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/171214-2.html  河北新報：2018.1.22</p>
研究	<p>その他、市民参加型の地域課題解決プログラム  担当教員：  阿部 重樹  坂本 泰伸  本間 照雄  菊池 広人  小泉 美彩紀</p>	<p>「キャンパス見学ツアー@土樋」  平成29年6月17日(土)  参加者：46名  大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/170517-2.html  河北新報：2017.6.19</p> <p>「青葉土樋敬老会お食事会」  平成29年9月18日(月・祝)  参加者：61名  大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/170928-2.html</p> <p>「フラワーアレンジメント講習会」  平成29年10月14日(土)  参加者：50名  大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/170907-6.html</p> <p>「キャンパス見学ツアー@土樋」(第2弾)  平成29年10月27日(金)  参加者：34名  大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/171030-2.html</p> <p>荒町市民活動センター：地域力創造支援事業「荒町公園活用事業」への協力  「シャボン玉&amp;バルーンフェスタ」  平成29年10月12日  参加者：89名</p> <p>多賀城市子育て支援研修 第1回「多賀城市の目指すべき子育て支援環境を考える」  平成29年7月5日  市内子育て支援施設職員12名</p>

	項目	平成29年度進捗状況
		<p>多賀城市子育て支援研修 第2回「来てほしい人が来る施設になるためには」 平成29年9月7日 市内子育て支援施設職員9名</p> <p>多賀城市子育て支援アンケートの内容を基にした各子育て支援施設職員研修 平成29年12月4日 鶴ヶ谷児童館5名、すくっぴー広場8名 平成29年12月7日 西部児童センター6名</p> <p>多賀城市地域コミュニティ課・市民活動サポートセンター アンケート研修会 平成30年1月11日 参加者：7名 平成30年3月2日 参加者：5名</p>
社会 貢献	地域志向系の公開講座 及びセミナーの開講数	<p>「震災と文学」の開催：全10回（前期5回、後期5回） 講 師：赤坂憲雄、熊谷達也、山下祐介、柳美里、三浦佑之、高成田享、土方正志、 大和田雅人、川元茂、御厨貴、和合亮一、大澤真幸 参加者：805名（前期・後期） 大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/oc2017sp-12.html http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/oc2017au-02.html 河北新報：2017.6.13、2017.9.19 朝日新聞：2018.1.15</p> <p>履修証明プログラム「コミュニティソーシャルワーカー（CSW）スキルアッププログラム」 開 講 式：平成29年4月29日 講 義：平成29年4月29日～平成30年2月24日 計24回 修 了 式：平成30年3月17日 受 講 者：15名 修 了 者：14名 大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/170508-2.html http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/180323-2.html</p>
社会 貢献	市民活動への参加を希 望する方を対象とした 講座開講数	<p>「全国高校生MY PROJECT AWARD（マイプロジェクトアワード）2017 東北地域大会」 平成30年2月10日（土） 参加者：200名 地域共生推進機構HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/iprc/news/1489.html</p> <p>「地域コミュニティの支援体制を考えるフォーラム～中間支援組織と行政の望ましい役割とは～」 平成30年2月15日（木） 参加者：80名 大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/180223-3.html</p> <p>多賀城市行政区長向け地域づくり講座 平成30年3月22日（木） 参加者：60名</p>
社会 貢献	多賀城高等学校に関連 した勉強会	<p>ファシリテーター養成講習 平成29年7月22日（土） 参加者：29名</p> <p>ファシリテーター勉強会 平成30年2月12日（月・祝） 参加者：40名</p>
その他	フォローアップ調査	H28年度分 対 象 者：全学生（回収率66.8%）、全教員（回収率52.6%）、全職員（回収率66.2%）、 全連携自治体（回収率100%）
	地域共生推進機構会議	第1回 平成29年4月10日（月） 第2回 平成29年5月8日（月） 第3回 平成29年7月3日（月） 第4回 平成29年9月25日（月） 第5回 平成29年12月11日（月） 第6回 平成30年3月5日（月）
	地域共生推進機構運営 委員会	第1回 平成29年4月26日（水）（メール審議） 第2回 平成29年9月15日（金）（メール審議） 第3回 平成29年10月31日（火） 第4回 平成29年12月8日（金） 第5回 平成30年3月29日（木）
	自治体との連絡調整会 議	仙台市地域共生推進協議会 平成30年3月19日（月） 多賀城市地域共生推進協議会 平成30年3月28日（水）
	COC研究の発行	平成30年3月 第3号発行
	外部評価	東北学院大学COC事業外部評価委員会による中間評価の実施 「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」に関する外部評価委員会（面接評価） 平成29年11月30日（木）

項目		平成30年度進捗状況			
教育	シラバスにおいて地域に関する学習をおこなうことを明示している授業数	No.	対象学部・学科	科目名	概要
			※集計中※		
教育	アクティブラーニング型授業を行う専任教員数	No.	学部	学科	氏名
			※集計中※		
	F・S・D推進	地域の課題Ⅰ（地域課題版）公開授業 平成30年7月25日（水） 参加者：10名			
		アクティブラーニング学習会 平成30年9月10日（火） 参加者：15名			
	地（知）の拠点整備事業終了報告会 平成30年12月21日（金） 参加者：70名				
研究	地域コーディネーター（CSW等）に関する研究担当教員： 阿部 重樹 郭 基煥 増子 正 齊藤 康則 黒坂 愛衣 矢口 義教 松崎 光弘 本間 照雄 菊池 広人 小泉 美彩紀	第1回CSWスキルアッププログラム運営会議 平成30年4月4日（水）			
		第2回CSWスキルアッププログラム運営会議 平成30年6月13日（水）			
		第3回CSWスキルアッププログラム運営会議 平成30年9月27日（木）			
		第4回CSWスキルアッププログラム運営会議 平成30年12月6日（木）			
		第5回CSWスキルアッププログラム運営会議 平成31年2月23日（土）			
	第1回CSW公開研究会 平成30年6月27日（水） 「組織におけるコミュニティソーシャルワーカーの育成とその方策について」 講 演：阿部重樹、青山奈保美氏 パネリスト：本間照雄、西塚国彦氏、岩渕徳光氏、浅野恵美氏、青山奈保美氏 参加者：36名 大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/180531-2.html http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/180629-1.html				
	第2回CSW公開研究会 平成30年9月15日（土） 「地域福祉とファンドレイジング」 講 師：久津摩和弘氏 参加者：23名 大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/20180726-1.html http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/180920-4.html				
	第3回CSW公開研究会 平成30年10月19日（金） 「災害公営住宅自治会等活動報告会」 事例発表 ①つなぐ・つながるプロジェクトについて（仙台市社会福祉協議会中核支え合いセンター） ②宮城県地域コミュニティ再生支援事業の補助金を利用したコミュニティ活動（塩竈市錦町囃南会） ③安心して暮らせる住宅を目指して（たんぼぼの会） ④心災復興計画2018・今（名取市サポートセンターどっとなとり） ⑤繋がり（志津川西災害公営住宅自治会） ⑥『栗原若柳の住民です』と言えるその日まで（栗原市社会福祉協議会若柳支所（地区社協）） ⑦さんさんファーム～災害転入者と既存地区住民との農業交流サロン～（亶理町社会福祉協議会） ⑧うちではこんなふうにやっています（あすと長町第二市営住宅の会） ⑨地域を動かせ！！震災から現在、未来へ！～牛橋地区支援ネットワークの取組～（牛橋地区支援ネットワーク） 参加者：約100名 大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/180929-1.html 河北新報：2018.10.20				
	第4回CSW公開研究会 平成30年11月7日（水） 「災害から一人ひとりの命と暮らしを守るために―防災福祉の視点から地域コーディネーターの役割を考える―」 講 師：浦野愛氏 参加者：53名 大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/181002-1.html http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/181113-3.html				

項目	平成30年度進捗状況
	<p>第5回CSW公開研究会 平成30年11月30日(金)  「地域コーディネーターが走る！一県内取組事例に学ぶ地域力の魅力と可能性」  事例発表  (1) 口頭発表  ①定年後の『夢づくり』が小さな『村おこし』(滝ノ原地区社会福祉協議会)  ②新道行政区の取り組みとコーディネーターの関わり(登米市社会福祉協議会)  ③『つながる』『つなげる』仲間づくり(村田町社会福祉協議会)  ④人の絆が宝物!!(高瀬区地域支援ネットワーク)  ⑤住民の力があってこそ(女川町大原北区)  ⑥野いちご物語り(野いちごの会)  (2) ポスター発表  ①復興公営住宅におけるコミュニティづくり支援(仙台市社会福祉協議会)  ②住民サークルからの地域交流(せんだい・みやぎNPOセンター)  ③互近助(ごきんじょ)の力(根岸地区社会福祉協議会)  ④南三陸町は宝の山(南三陸町社会福祉協議会生活支援コーディネーター)  参加者:150名  大学HP: <a href="http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/181113-1.html">http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/181113-1.html</a>  河北新報:2018.12.12</p>
研究	<p>多文化共生社会の推進  担当教員:  阿部 重樹  石川 真作  郭 基煥  七海 雅人  楊 世英  津上 誠  佐藤 真紀  酒井 朋子  菅原 真枝  本間 照雄  菊池 広人  小泉 美彩紀</p> <p>平成30年度公開セミナー「外国につながる子どもへのサポートを考える」  平成30年5月21日(月)  講演:田所希衣子氏  参加者:20名  大学HP: <a href="http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/180522-2.html">http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/180522-2.html</a>  J:COM「デイリーニュース」:2018.5.23放送</p> <p>講演会「ルワンダ大虐殺から四半世紀—2020年パラリンピックを目指して」  平成30年12月6日(木)  講師:ルダシングワ・ガテラ・エマニュエル氏、ルダシングア(吉田)真美氏  参加者:150名  大学HP: <a href="http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/181106-4.html">http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/181106-4.html</a></p> <p>平成30年度「難民を知るワークショップ—ロヒンギャ難民編—」  平成30年12月15日(土)  共催:認定NPO法人IVY  参加者:約20名  大学HP: <a href="http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/171031-3.html">http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/171031-3.html</a>  河北新報:2018.12.22</p>
その他、市民参加型の地域課題解決プログラム	<p>「キャンパス見学ツアー@土樋」  平成30年5月25日(金)  共催:青葉土樋町内会、五橋地域包括支援センター  後援:社会福祉法人仙台市社会福祉協議会  参加者:22名  大学HP: <a href="http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/180426-2.html">http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/180426-2.html</a></p> <p>「多賀城市子育て施設評価に関する評価指標・評価方法設計支援」  多賀城市における子育て支援施設の今後の在り方に関する市民ニーズの整理および事業改善に向けた検討支援  平成30年6月4日(月)、18日(月)、25日(月)  対象:多賀城市子育て支援課  参加者:4名</p> <p>「スマホサロン@青葉土樋」  平成30年6月13日(水)  後援:青葉土樋町内会、五橋地域包括支援センター、(社福)仙台市社会福祉協議会  参加者:22名  大学HP: <a href="http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/180514-1.html">http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/180514-1.html</a>  <a href="http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/180613-3.html">http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/180613-3.html</a></p> <p>「多賀城市地域コミュニティづくりロードマップ作成支援」  多賀城市の第6次総合計画策定にあわせた地域コミュニティ施策の改善に向けたロードマップの策定支援  平成30年6月13日(水)、7月2日(月)、20日(金)、23日(月)、30日(月)、8月1日(水)、9月10日(月)、10月1日(月)、16日(火)  対象:多賀城市地域コミュニティ課  参加者:8名</p> <p>「キャンパス見学ツアー@土樋」(第2弾)  平成30年7月5日(木)  共催:片平地区連合町内会  参加者:30名  大学HP: <a href="http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/180612-4.html">http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/180612-4.html</a></p> <p>平成30年度 第4回 青葉土樋防災訓練  平成30年7月10日(火)  主催:松源寺、青葉土樋町内会  参加者:50名</p>

項目	平成30年度進捗状況
	<p>自治体・支援団体等 情報交換・交流会 平成30年7月13日（金） 主 催：仙台市・仙台市社会福祉協議会 参 加 者：136名</p> <p>「多賀城市子どもの生活に関する実態調査設計支援」 子どもの生活実態および親の所得などの社会環境の関係性を整理し、政策横断型の課題解決に向けた体制づくりへの支援 平成30年7月23日（月）、10月1日（月）、18日（木）、11月1日（木）、平成31年2月28日（木）、3月13日（水） 対 象：多賀城市子育て支援課 参 加 者：4名</p> <p>「青葉土樋敬老会お食事会」 平成30年9月17日（月・祝） 共 催：青葉土樋町内会、五橋地域包括支援センター、（社福）仙台市社会福祉協議会 参 加 者：58名 大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/190107-1.html</p> <p>「多賀城市区長制度改革制度設計支援」 多賀城市と地域コミュニティの協働をより推進するために、現行の区長制度を見直し、これからの地域の課題に対応しやすい行政・自治組織のパートナーシップの構築支援 平成30年11月13日（火）、12月11日（火）、21日（金）、平成31年1月22日（火）、2月20日（水） 対 象：多賀城市地域コミュニティ課 参 加 者：8名</p> <p>「多賀城市子育て施設アンケート実施支援」 多賀城市の子育て支援施設における利用者のニーズ把握および改善に向けた方向性の検討支援 平成30年12月6日（木）、平成31年1月10日（木） 対 象：多賀城市子育て支援課 参 加 者：4名</p> <p>「多賀城市第6次総合計画策定支援」 多賀城市第6次総合計画策定にあたり、市民参加型の計画策定に向けたワークショップの企画策定支援 平成31年2月6日（水）、20日（水）、28日（木）、3月6日（水） 対 象：多賀城市市長公室 参 加 者：4名</p> <p>自治会等情報交換会 平成31年2月7日（木） 主 催：仙台市・仙台市社会福祉協議会 後 援：東北学院大学地域共生推進機構 参 加 者：94名</p>
社会 貢献	<p>地域志向系の公開講座 及びセミナーの開講数</p> <p>「震災と文学」の開催：全3回 平成30年9月10日、10月5日、平成31年2月9日 講 師：苅部直、熊谷達也、和合亮一 参 加 者：約300名 大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/180831-1.html http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/190116-1.html 河北新報：2018.08.28 2018.10.02 2018.10.11 2018.10.23 2018.10.24 2019.01.29 朝日新聞：2018.09.04</p> <p>履修証明プログラム「コミュニティソーシャルワーカー（CSW）スキルアッププログラム」 開 講 式：平成30年4月21日 講 義：平成30年4月21日～平成31年2月23日 計26回 修 了 式：平成31年3月16日 受講者10名 修了者10名 大学HP：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/180426-3.html http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/180824-4.html</p> <p>市民参加型防災ワークショップ コンサートで避難訓練～今年は、仙台ベンチャーズ！！～ 平成30年9月17日（月・祝） 主 催：多賀城市文化センター指定管理者 協 力：東北学院大学／東北学院大学地域共生推進機構 参 加 者：150名</p>

	項目	平成30年度進捗状況
		<p>「多賀城市区長会市政懇談会」 多賀城市の市長および各部署の長と区長との懇談会において、ビジョン共有および建設的な意見交換の場づくりを実施。 平成30年10月18日（木） 参加者：70名</p> <p>「多賀城市区長制度整理に向けた説明会」 多賀城市と各地域コミュニティの協働推進に向けた区長制度等の各種制度の見直しのためのワークショップ 平成31年1月30日（水） 参加者：70名</p> <p>「多賀城市災害公営住宅支援の在り方検討会」 多賀城市の災害公営住宅におけるコミュニティ支援・生活支援に関する共通理解を深めるための勉強会 平成30年4月26日（木） 参加者：28名</p> <p>「多賀城市協働研修」 多賀城市内での行政と市民のパートナーシップがより深まり、多様な協働が生まれるための研修会 平成31年1月10日（木）、28日（月） 参加者：60名</p> <p>「多賀城市子どもの生活に関する実態調査活用検討ワークショップ」 子どもの生活に関する実態調査を各種政策に活かすための仮説設定および因果関係検討ワークショップ 平成30年11月23日（金・祝）、平成31年3月18日（月） 参加者：30名</p> <p>「多賀城市子育て支援施設ニーズ検討ワークショップ」 多賀城市の子育て支援施設において利用者とのコミュニケーションの促進と協働の推進に向けたワークショップ 平成31年3月4日（月）、6日（水）、13日（水） 参加者：25名</p> <p>「第3回持続可能な“暮らしの足”を考えるフォーラムin東北2018秋～助け合い送迎でつくる豊かな地域の移動～」 平成30年10月16日（火） 共催：「持続可能な“暮らしの足”を考えるフォーラムin東北2018秋」実行委員会、日本福祉のまちづくり学会地域福祉交通特別研究委員会 参加者：約150名 地域共生推進機構HP：<a href="http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/iprc/news/1718.html">http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/iprc/news/1718.html</a> 河北新報：2018.10.21</p>
社会 貢献	市民活動への参加を希望する方を対象とした講座開講数	<p>映画上映会「人生フルーツ」 平成30年9月1日（土） 参加者：100名 大学HP：<a href="http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/180606-6.html">http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/180606-6.html</a> <a href="http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/180903-1.html">http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/180903-1.html</a></p> <p>地（知）の拠点整備事業終了報告会 平成30年12月21日（金） 共催：東北学院大学FD推進委員会、東北学院SD委員会 報告：菊池広人、吉田智治氏、増田恵美子氏、岡亮太郎、本間照雄、ダクルス久美氏、結城修子氏 評価：大槻覚氏、柴田光起氏 参加者：70名 大学HP：<a href="http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/181212-1.html">http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/181212-1.html</a> <a href="http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/190109-1.html">http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/info/top/190109-1.html</a></p> <p>たがじょう4住宅交流会 桜木・新田・鶴ヶ谷・宮内～安心して共にこの住宅で暮らすために～ 平成31年1月26日（土） 参加者：30名</p> <p>「全国高校生MY PROJECT AWARD（マイプロジェクトアワード）2018 東北地域大会」 平成31年2月16日（土） 参加者：215名 地域共生推進機構HP：<a href="http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/iprc/news/1806.html">http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/iprc/news/1806.html</a> 河北新報：2019.02.18</p> <p>宮内住宅入居者勉強会 地域での支えあいの大切さを共有し、今後の団地内コミュニティのあり方を考える勉強会 平成31年3月13日（水） 参加者：50名</p>

	項目	平成30年度進捗状況
社会 貢献	多賀城高等学校に関連した勉強会	<p>涌谷高校地域企業探究支援（1年生） 多賀城高校での探究支援のノウハウを生かし、宮城県立涌谷高校1年生の地域企業探究に向けたワークショップの開催 平成30年6月21日（木）、10月11日（木）、12月18日（火） 参加者：90名</p>
		<p>涌谷高校探究学習支援（3年生） 多賀城高校での探究支援のノウハウを生かし、宮城県立涌谷高校3年生のこれからの探究に向けたワークショップの開催 平成30年9月13日（木） 参加者：40名</p>
		<p>石巻西高校探究学習支援（3年生） 多賀城高校での探究支援のノウハウを生かし、宮城県立石巻西高校3年生の地域探究に向けたワークショップの開催 平成30年9月13日（木） 参加者：180名</p>
		<p>涌谷高校総合的な探究に関する研修会 宮城県立涌谷高校の教員を対象とした地域探究に関する研修会の開催 平成30年12月18日（火） 参加者：30名</p>
		<p>石巻西高校総合的な探究に関する研修会 宮城県立石巻西高校の教員を対象とした地域探究に関する研修会の開催 平成30年7月29日（日） 参加者：10名</p>
		<p>桜坂高校総合的な探究に関する研修会 石巻市立桜坂高校の教員を対象とした地域探究に関する研修会の開催 平成30年7月29日（日） 参加者：18名</p>
		<p>仙台南高校総合的な探究に関する研修会 宮城県立仙台南高校の教員を対象とした地域探究に関する研修会の開催 平成30年12月6日（木） 参加者：35名</p>
その他	フォローアップ調査	<p>H29年度分 対象者：全学生（回収率69.7%）、全教員（回収率52.9%）、全職員（回収率66.4%）、全連携自治体（回収率100%）</p>
	地域共生推進機構会議	<p>第1回 平成30年4月5日（木） 第2回 平成30年6月19日（火）（メール審議） 第3回 平成30年11月26日（月） 第4回 平成30年12月17日（月） 第5回 平成31年3月4日（月） 第6回 平成31年3月11日（月）</p>
	地域共生推進機構運営委員会	<p>第1回 平成30年11月12日（月）</p>
	地域共生推進機構作業部会	<p>「未来の扉センター（仮称）の設置並びに「地（知）の拠点整備事業及び地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」の承継に係る検討作業部会」 第1回 平成30年12月27日（木） 第2回 平成31年1月7日（木） 第3回 平成31年1月21日（月） 第4回 平成31年2月19日（火） 第5回 平成31年3月8日（金）</p>
	自治体との連絡調整会議	<p>仙台市地域共生推進協議会 平成31年3月20日（水） 多賀城市地域共生推進協議会 平成31年3月28日（木）</p>
	COC研究の発行	<p>平成31年3月 第4号発行【予定】</p>









**編集・発行**（平成 31 年 3 月 31 日発行）

東北学院大学地域共生推進機構

〒 980-8511 仙台市青葉区土樋 1 丁目 3-1

（東北学院大学土樋キャンパス）

TEL：022-264-6562 FAX：022-264-6522

URL：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp

E-mail：kikou@staff.tohoku-gakuin.ac.jp